平成27年度

経済社会の発展を牽引する グローバル人材育成支援

外部評価・実績報告書

愛知県立大学
Aichi Prefectural University
グローバル人材育成推進室

刊行の辞

本書は、平成 24 年 9 月に採択された文部科学省グローバル人材育成推進事業について、平成 28 年 3 月 8 日（13:00～15:00）、愛知県立大学で行われた事業評価委員会に提出した平成 27 年度実績報告書と外部評価委員の評価をまとめたものである。

外部評価については、一定の観点から評価いただくため、安倍悟氏（愛知大学現代中国学部学部長）、小川正樹氏（中部経済連合会　常務理事事務局長）、石田訓夫氏（元外務省外交史料館　館長）の諸氏には 24、25、26 年度に引き続き 27 年度も評価委員をお願いした。川嶋太津夫氏（大阪大学　教授）、服部俊之氏（愛知県立旭丘高等学校　教頭）には、27 年度の評価委員として新たな観点からの評価をお願いした。評価委員会にあっては、iCoToBa の全学的利用、補助金終了後の事業計画の問題など様々な観点より有益なご意見を課題としていただいた。それとともに、24、25 年度の骨組みに続き、26 年度は肉付けがなされ、27 年度は学生による自主的取り組みへとプログラムを推進する主体の移行がみられるなどの評価をいただいた。委員の皆様に感謝申し上げたい。

評価委員会の皆様よりご指摘いただいた諸課題については、外国語学部、国際交流室、国際交流委員会、教養教育センター、教育支援センターなど関係各所と連携し協力を得ながら取り組み、改善に努めたい。

平成 28 年 3 月

愛知県立大学 グローバル人材育成推進室長

外国語学部教授　吉池孝一

平成 27 年度　愛知県立大学 経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援
外部評価・実績報告書

目次

刊行の辞　i
平成 27 年度外部評価委員による評価コメント　iii

［平成 27 年度経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援　実績報告］
1.　本報告書の発行によせて　1
2.　グローバル人材育成推進事業　5
3.　iCoToBa（多言語学習センター）　18
4.　学修支援　36
　4－1.　e-Learning プログラム　36
　4－2.　インターネットポートフォリオ　40
　4－3.　語学学習アドバイジング　44
5.　語学検定　46
6.　留学および支援体制　51
　6－1.　学術交流協定大学の協定締結と単位認定留学　51
　6－2.　留学アドバイジング　56
　6－3.　留学中の学習支援　59
　6－4.　留学中のリスク管理　61
7.　学術交流協定大学留学生対象プログラム　64
8.　地域における体験学習　68
　8－1.　インターンシップ　68
　8－2.　地域と連携した教育活動　73
9.　FD 活動　81
10.　講演会・セミナー・イベント　83
11.　西日本第1ブロック共同シンポジウム　93
12.　入試・広報活動　99
13.　情報発信　108
14.　グローバルキャンパスへの取り組み　112
15.　資料　116
総括と次年度に向けて　120

平成 27 年度外部評価委員による評価コメント

平成 27 年度外部評価委員による評価コメント

1. 概要

平成 28 年 3 月 8 日、本事業評価委員会を開催し、平成 27 年の本学の取組について、5 名の外部評価委員から、客観的に評価していただくと共に、今後の取組の課題の整理を行った。

［外部評価委員］

川嶋　太津夫氏　（大阪大学　教授）
安部　悟氏　　（愛知大学現代中国学部　学部長）
小川　正樹氏　　（中部経済連合会　常務理事　事務局長）
石田　訓夫氏　　（元外務省外交史料館　館長、本学卒業生）
服部　俊之氏　　（愛知県立旭丘高等学校　教頭）

2. 外部評価報告

川嶋　太津夫氏　　（大阪大学　教授）

本グローバル人材育成推進事業は、4つの取組を柱として、様々な精力的に活動が行われたが、特に、以下の活動は注目される。

1. iCoToBa（多言語学習センター）での外国語学習支援と異文化理解、国際交流支援の活動は高く評価できる。一日平均利用者の今年度の目標である60名を達成したのみならず、本事業の主要な目的の一つである、単位認定を伴う海外留学を目指す学生の大多数が本センターを利用しており、本事業の中核となる役割を果たしている。ただし、「グローバル人材プログラム」の受講生と合格者数の増加には課題を抱えている。
2. 外国語能力の育成については、無料で受験できる TOEIC の平均点が年々上昇しており、また専攻言語の検定試験の結果も向上し、取組の成果は着実に現れている。しかし、TOEIC の受験率は、まだ向上の余地があり、外国語学部在学者への周知徹底が望まれる。
3. 岡崎ホテルプロジェクトに代表される学生の外国語能力を生かした、地域社会や地元企業との共同プロジェクトは、学生の学習意欲、自己効力感、キャリア意識の向上などに大きな効果があると思われる。今後も、このような社会との連携活動の一層の推進が望まれるが、このような PBL 形式の取組には、教員の理解と協力が不可欠であり、啓蒙活動を含むFDの取組の充実が望まれる。
4. iCoToBa の施設・授業見学の実施、入試にグローバル人材枠の導入など、育成すべき人材像にふさわしい入試と広報を実施している。その成果として、1年生の TOEIC 試験のスコアも年々向上しており、英語能力が高い受験生が増えている。今後、英語の外部検定試験の

成績を入試に活用するなど、一層外国語に興味関心があり、かつ語学能力の高い受験生の確保が望まれる。

なお、事業全体としては、補助金事業期間が終了後の運営体制と他学部の巻き込みをいかに図っていくのかが大きな課題である。

安部　悟氏 （愛知大学現代中国学部　学部長）

平成 24 年度から始まった文部科学省の「経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援」（当時は「グローバル人材育成推進事業」）事業も今年度で 4 年目となり、来年度はいよいよ最終年度を迎える。東海地区で採択された 2 大学の、もう一つの大学である愛知大学の実施責任者として外部評価委員に加えていただき、今回で 3 回目の評価コメントを書かせていただく。なお今回は、27 年度の実績を評価すると同時に、事業の今後の継続性の問題についても少し言及しておきたい。

先ずは 27 年度実績についてであるが、昨年度の外部評価委員会で出されたいくつかの問題、例えば留学中の学生に対する危機管理の強化やグローバル人材プログラム修了者数の増加を図る必要性、学生と外国人との交流の機会を増やすといった提案に対して、積極的な対応を行っていることを高く評価したい。特に危機管理の問題は、大学の国際化やグローバル人材育成事業を推進していく過程で避けては通れない問題で、前年度からかなり改善されていることは評価できる。ただこの問題は、1 大学の努力では不十分な面もあり、国の積極的な関与が求められるところである。

次に今年度の 5 つの目標についてそれぞれ見ていくと、①海外協定校調査及び「単位認定留学」の拡大については、目標の 130 名を1月の段階ですでに達成している。②検定試験対策講座の充実と受講の促進についてはかなり努力しており、実際の学生のスコアも年々上昇してきているが、各年度の目標値が極めて高いためか目標達成できていないのが惜しまれる。ただ、この数年で着実に数値が改善されていることは評価できる。③④iCoToBa の全学的な利用促進と利用者数の拡大については、外国語学部以外の学生にも開放されており、利用者数も前年度比 26.8%増であり、平成 24 年度と比較すると 10 倍近い学生が利用しており、iCoToBa がすでにグローバル人材育成の中心的な働きをしていることが分かる。逆に言えば、来年、そして再来年度以降その運営をどうしていくのかが大きな課題となるであろう。⑤グローバル人材育成推進事業西日本第1ブロック共同シンポジウムの開催については、昨年 11 月に愛知大学との共催で開催され、両大学の所在が愛知県ということから、その特色を活かした「地域に根ざしたグローバル人材とは」というテーマで活発な討論が行われた。これはグローバル人材育成を考える上で、新たな視座を与えたものとして評価できるだろう。

最後に今後の継続の問題であるが、今年度からすでに新たなグローバル人材育成推進の体制を構築すべく検討に入っており、また「地域ものづくり学生共同プロジェクト」のような地域と連携した新たな取組を始めるなど、今後の取組の更なる充実が期待できる。

小川　正樹氏 （中部経済連合会　常務理事　事務局長）

平成 24 年度からスタートしたグローバル人材育成推進事業は、平成27年度で助成金継続期間5年間の内、4 年間が終了した。この間、iCoToBa（多言語学習センター）の立ち上げ・活用促進、語学検定目標に向けた指導、留学の推進と支援、グローバル人材に必要な 8 つの能力と 5 つの態度・資質の醸成などに取り組み、目標設定した数値が毎年向上するなど成果は明らかに拡大している。

その中で、とくに平成 27 年度には、地域と連携した教育活動や、西日本第 1 ブロック共同シンポジウムを実施し、インバウンド観光客の大幅増加や東南アジア等からのビジネスマンの拡大などといった地域の国際化に合わせ「地域に根ざしたグローバル人材育成」にチャレンジしていることは、大変有意義な取り組みである。

助成期間は平成 28 年度までであるが、その後も含め、次の 3 点に期待したい。

① 語学や各種能力の醸成や動機付けには、学内での学びだけでなく、学外を含め国際交流機会を増やすことも重要である。平成 26 年度は ESD で学ぶことができた。今年はサミットがあり、愛知県が玄関となり多くのサミット関連訪日客がセントレアや名古屋駅を訪れる。併せてサミット関連の各種国際会合が愛知県で開催される見通しである。学生にとってまたとないチャンスであり、安全が前提であるが積極的な参加を期待したい。また今後も愛知県庁国際部局等が関わるMICEや国際イベント等に協力・参加できるよう、県庁等と協議されることも重要であろう。経済団体としても協力させていただきたい。

② 語学と必要な 8 項目に関する能力と 5 つの態度・資質は、社会がグローバル化していく中、あらゆる分野の社会人に求められる内容である。ただし、あまりにも幅広い内容であり、大学教育だけでなく社会に出てからも常に学びが求められる。まず大学では、こうした学びに対する必要性や意識・意欲を植え付けていただきたい。

③ 外国語学部以外の学生からも、iCoToBa などを利用したいとの声が出始めていると伺った。iCoToBa の実績が評価されていることの現れであるとともに、他学部学生の意欲も大いに評価されるものである。ぜひとも、上記②の「学びの植え付け」と共に iCoToBa の活用も幅広く道を作ってやってほしい。

平成 28 年が助成最終年度となるが、社会が求める人材の育成成果を高め、自治体や企業等との連携を図り、より社会で役立つ人材育成を進めていただきたい。

石田　訓夫氏 （元外務省外交史料館　館長、本学卒業生）

本事業は、平成 27 年度で 4 年目を迎えて随所に取り組みの成果が生まれはじめた。この傾向は、①ガイダンスと履修相談の増加、②iCoToBa 多言語学習センター利用者の順調な増加、③海外留学者の予想を上回る増加、④地域体験学習参加者の増加等、プログラム各段階における参加者数の順調な増加ぶりに端的に表れている。殊に、海外を指向する留学者数が大きく伸長したことと並行して、国内に目を向けて地域のグローバル化の発展に貢献しようとする活動が活発化したことは、事業名にも冠されている「グローバル人材の育成」および「経済社会の発展の牽引」の 2 大目標を具現化する動きとして大いに注目できる。

先ず、留学については、協定校の拡大による留学環境の整備と、個人カルテによる的確な留学アドバイジングが功を奏している。これにより留学に対する学生の意識が心理的な負担から挑戦へと前向きに変化し、単位取得を伴う留学者数が予想を上回って増加した。今後留学を制度的に定着化させるための基盤が形成されつつあるものとして高く評価できる。

特筆されるべきは、学生の間に「海外日系企業（メキシコ）でのインターンシップ」、「地域ものづくり学生共同プロジェクト」というかたちでプログラムから習得した能力を地域社会の発展に還元しようとする動きが具体化したことである。地域経済社会のグローバル化へのニーズに根ざしたこの実践的な学習教育活動は、学生と企業の双方に意識改革をもたらし、また新聞にも大きく取り上げられて本事業への社会的評価を高めた。出口を見据えた画期的な取り組み成果として極めて高く評価できる。

総じて平成 27 年度は、部分的ではあるが教職員中心から学生による自主的取り組みへとプログラムを推進する主体の入れ替わりが起きた。なによりも学生自身が、経済社会の発展のためにグローバル人材が必要とされており、かつ、地域には語学力、異文化適応能力、コミュニケーション能力を活かした潜在的活躍の場が様々なかたちで存在するという事実に目覚めはじめたことから、本事業の可能性に新たな突破口が開かれたのではないだろうか。

他方で課題もまだ残されている。プログラムに社会的実践度が増すと、「広義のコミュニケーション能力」も一層求められる。その対策として、留学中に発信力、対話・交渉力、ネットワーク構築力等において積極性を意識して高めることができるよう事前指導を強化する必要がある。また、今後は大学全体で本プログラムに取り組む学生の裾野を広げて、語学力、特にグローバル言語である英語力の底上げに積極的に取り組む必要がある。これは時間を要する課題であるが、例えば、入学直後の第 1 学年前期課程に英語授業を集中させ、その期末に TOEIC を受けさせるなどカリキュラムの工夫が考えられる。これが短期集中訓練効果とともに、新たな語学力向上の動機付けともなって早期に留学準備への移行を促し、その後の iCoToBa を利用する語学学習者の裾野を広げることにもつながるのではないだろうか。

服部　俊之氏（愛知県立旭丘高等学校　教頭）

平成 26 年度の評価を受け、平成 27 年度の目標として掲げた①海外協定校調査および「単位認定留学」の拡大、②検定試験対策講座の充実と受講の促進、③iCoToBa の全学的な利用促進、④iCoToBa 利用者の拡大、⑤グローバル人材育成推進事業西日本第1ブロック共同シンポジウムの開催について、それぞれが一定以上の成果を得ていること、また平成28年度以降も成果の向上が見込まれていることは高く評価できる。

それぞれの目標に関して、①については、前年度よりも学術交流協定を締結した海外大学・機関の数が増加していることは、大学の努力の表れでもあり、学生にとっては留学先の選択肢の増加だけにとどまらず、多くのメリットが期待される。単位認定留学者数が、目標値を多く超えていることもその証と考えられる。さらに、安心して留学できるような環境作りの充実も、高く評価できる。ただし、改善すべきこととして、英米圏の協定大学に関しての更なる充実が望まれる。留学にかかる費用対策としては、学生自身による留学積立などを制度化するなど、留学時の負担を分散させるような方策をとることも考えるべきではないだろうか。

②については、達成者数の変動から着実に成果が表れていると捉えることができる。今後の継続した取組により目標が達成できるものと期待される。

③、④の iCoToBa については、グローバル人材を目指す学生とっては理想的な環境づくりがなされている。利用者数の増加に、大学の取組の学生による評価が反映されている。一方で「グローバル人材プログラム」の修了者数に関しては、さらなる取組により少しでも目標値に近づくよう期待したい。そのためには、「なぜ、グローバル人材なのか」という根本的な理念を大学入学以前に根付かせることが効果的と考えられる。高大連携・高大接続といったシステムの充実が重要ではないだろうか。さらに、現在行われている高校生向けの取組への積極的な参加者への評価が、入試、さらには入学後に利用されることを望む。

⑤については、大学間の連携により、企業、自治体、高校、NPO 団体などの取組を紹介する機会として、さらには「地域に根ざしたグローバル人材」育成を考える良い機会となった。参加させていただいた高校の立場からすると、他団体の取組は参考になったし、今後の連携や協力を得て、さらに充実した活動を行うきっかけとなる良い機会であったと思う。来年度以降も、同様のイベントが地元で継続的に行われることを期待したい。

本学が、外国語教育を主軸に８つの能力・知識と５つの態度・資質の醸成を目指すグローバル人材育成事業は、高校段階からの人材育成を意識した取組も充実しており、高校の立場として、安心して生徒を送り出せる優れた事業であると評価できる。

平成 27 年度
経済社会の発展を牽引する
グローバル人材育成支援
実績報告

1.　本報告書の発行によせて

愛知県立大学グローバル人材育成推進室長（外国語学部長）
吉池　孝一

平成 25 年 1 月 25 日に本事業のキックオフセミナーを開催した。参加者から大学教育への要望等についての意見・ニーズを収集し、平成 25 年度の事業の参考とした。

平成 26 年 3 月 10 日には第 1 回外部評価委員会を開催した。海外留学をプログラムの中に組み込み、留学前→留学中→留学後という学びの 3 段階に対応するプログラムを実施したことが評価されるとともに、外国語学習・異文化理解・異文化交流の場である iCoToBa（多言語学習センター）における人材育成の活動につき高い評価をいただいた。これは次年度への弾みとなった。平成 26 年 4 月からはグローバル人材育成推進室は体制を強化した。全ての学科・専攻から室員を選出し、副室長を 1 名から 2 名とし、運営の体制を整えた。本構想の中心的な役割を果たす iCoToBa は、語学学習および異文化交流の場として、英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語のネイティブ教員 6 名とアドバイザー教員 2 名が常駐し、その運営は、外国語学部の学科・専攻から選出された 6 名の委員よりなる iCoToBa 委員会によって担われるという体制でスタートし、以下の 4 つの目標を設定して本事業のいっそうの推進をはかった。目標①海外協定校とくに英語圏及び独仏語圏の協定大学の拡大、目標②単位認定留学の拡大、目標③iCoToBa の利用促進、目標④manaba と e-Learning の利用促進。①②③については目標をほぼ達成したが、④の manaba の利用については限定的であり今後の検討が必要である。

平成 26 年度の 3 月（平成 27 年 3 月 4 日）には第 2 回外部評価委員会を開催した。①留学中の学生に対する危機管理の強化、②プログラム修了者数の増加をはかる必要性、③愛知県下の外国人との交流の機会を積極的に作ってはどうかというご提案、④グローバル社会や留学に関心が向かない学生への対応をどのようにするか、など貴重なご意見をお寄せいただいた。

①については危機管理セミナー（6 月 10 日の危機管理セミナー、12 月 2 日の留学前危機管理セミナーの 2 回）、および留学説明会（6 月 10 日ショートプログラムオリエンテーション、6 月 17 日留学説明会、7 月 15 日交換・派遣留学説明会、7 月 21 日ショートプログラム出発前説明会、7 月 22 日交換・派遣留学者オリエンテーション、11 月 11 日ショートプログラム説明会）において学生への情報提供と危機管理教育を行った。なお、本年度より留学する学生は全員が学研災に加入することとなり、その説明会を 6 月 10 日に危機管理セミナーとともに行った。また、11 月 20 日～12 月 5 日に、海外留学・滞在中の学生の連絡先確保のため UNIPA によるアンケートを実施した。

②については、前期と後期の初めのグローバルガイダンスの充実により本プログラムに参加する母数の増加およびプログラム修了の要件となっている語学検定試験対策講座の充実をはかった。

③につながるものとして、外国人観光客が多く利用する岡崎のホテルにおいて、多言語による施設紹介を、本プログラムの学生を中心として行った。これは岡崎市役所と岡崎のホテルと本学の協働のプロジェクトである。

④は難しい課題である。グローバル人材プログラム自体を一層魅力的なものにするということであろう。その意味で、本プログラムにある「地域ものづくり学生共同プロジェクト」は面白い取り組みとなる。東海 3 県の特徴あるものづくりの企業と学生たちが共同し、多言語（英語、フランス語、ドイツ語、スペイン語、中国語、韓国語、ロシア語、日本語）で企業や商品を紹介する企画である。詳しくは本報告書の第 8 章を参照していただきたい。

平成 27 年度は次の 5 点を目標に掲げてスタートした。この 5 点について1月までの報告をし、本報告書の発行によせてを締めることとする。

目標①：海外協定校調査および「単位認定留学」の拡大（27 年度は 130 名を目標とした）

・単位認定の学生数は 130 名（1 月 13 日時点）

・交流協定に基づく海外からの特別聴講生の受入承認人数は 23 名（10 月 7 日時点）

目標②：検定試験対策講座の充実と受講の促進

・iCoToBa 前後期授業において TOEIC 対策講座を実施

・iCoToBa 教員による TOEIC 検定対策直前講座の実施

・外国語学部教員による TOEIC 検定直前講座の実施

・外国語学部教員によるドイツ語検定前直前講座の実施

・効果的な検定試験実施時期に変更（ドイツ語 3 級：2 年生秋→3 年生春、中国語 3 級：2 年生秋→3 年生春、中国語 2 級：4 年生秋→3 年生秋）

目標③：iCoToBa の全学的な利用促進

・全学学生を対象として英語及び諸言語の e-Learning のガイダンス（4 月 5 回）および講習会（4～5 月 4 回)の実施。語学学習 e-Learning アドバイスの実施（後期週 3 回）

・英語検定試験 TOEIC 対策講座（全学開放）の実施

目標④：iCoToBa 利用者数の拡大（平成 27 年度 1 日平均目標 60 人、長期休暇期間除く）

・iCoToBa 利用者数(イベント参加人数含む)、4 月 124 人、5 月 64 人、6 月 75 人、7 月 55 人、10 月 71 人、11 月 44 人、12 月 51 人。

目標⑤：グローバル人材育成推進事業西日本第 1 ブロック共同シンポジウムの開催

本年は東海地区において、平成 27 年 11 月 14 日に愛知県立大学と愛知大学が幹事校となり、共同の企画・運営で「地域に根ざしたグローバル人材とは」をテーマにシンポジウムを開催した。大学のみならず、高校・自治体・NPO 団体など様々な団体の、地域に根ざしたグローバル人材育成の取り組みを紹介した。ポスターセッションでは情報共有や意見交換が活発に行われ、特に高校生の活躍が目立った。アンケート結果からは、愛知県知事による県の取組紹介も参加者の評価が高かった。参加者は 214 名で、成功を収めた。

2. グローバル人材育成推進事業

1. 概要

平成 24 年度に文部科学省に採択された愛知県立大学「グローバル人材育成推進事業」は、本学の第二次中期計画（平成 25 年度～30 年度）の外国語学部の人材育成方針「21 世紀国際社会を創造し、地域社会に貢献するグローバル人材の育成」の達成をめざしたものである。

本事業は、外国語学部学生の 60％以上が単位認定留学するという目標を設定した上で、「留学前→留学中→留学後」のプロセスを、グローバル人材を育てる一貫した発展的教育課程としてとらえている。これらの各段階で必要な能力を育てる体系的なプログラムとして、「グローバル人材プログラム」を新たに整備し、平成 25 年 4 月から実施している。

iCoToBa（多言語学習センター）は、グローバル人材育成の中核となる外国語学習と異文化理解学習、および本学の異文化交流の場として、平成 25 年 4 月に開設された。iCoToBa では「グローバル人材プログラム」の中心となる科目群を開講し、TOEIC 等各種検定講座の開講や、留学コーディネータによるカウンセリングなど、幅広い活動を行っている。iCoToBa の詳しい内容は、第 3 章（pp.18-35）に述べる。

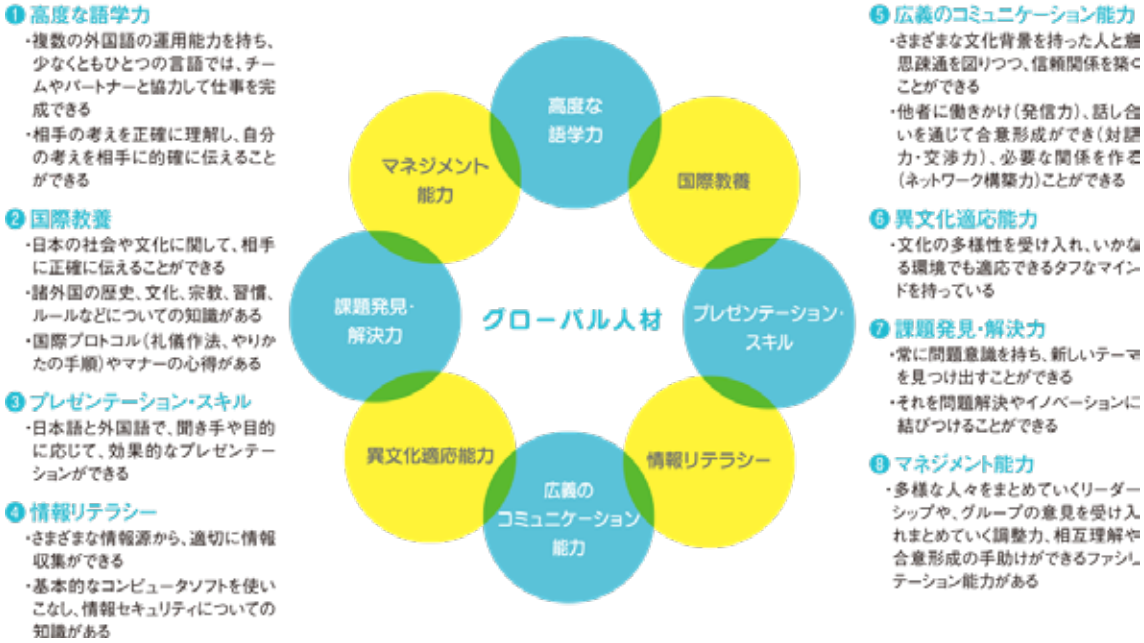
本学のグローバル人材育成推進事業は、以下の 4 点を主たる目的に取り組んでいる。

A. 留学前→留学中→留学後の各段階で必要な能力を育てる体系的なプログラムを実施する。
B. 外国語学部学生の 60％以上が単位認定を伴った留学をする。
C. 各専攻言語および第 2 外国語の二言語において、一定以上の語学力を身につける。（各言語の目標値は、p.9、表 2-2 を参照）
D. グローバル人材として必要な 8 項目に関する能力養成と、5 つの態度・資質の醸成を目指す。

［8 つの能力・知識］
①高度な語学力、②国際教養、③プレゼンテーション・スキル、④情報リテラシー、⑤広義のコミュニケーション・スキル、⑥異文化適応能力、⑦課題発見・解決力、⑧マネジメント能力（p.6、図 2-1 を参照）
［5 つの態度・資質］
①グローバルかつローカルな視点、②主体性、③積極性とチャレンジ精神、④協調性、⑤責任感・倫理観

以下、2 章では、本学のグローバル人材育成事業のうち、その中核をなす外国語学部「グローバル人材プログラム」を中心に説明する。

［図 2-1　グローバル人材育成推進事業で養成する 8 つの能力］



2. 平成 27 年度の目標

平成 27 年度の目標は、以下のとおりである。

上の図 2-1 に示したグローバル人材に必要となる能力養成を目指し、平成 25 年度より開始された「グローバル人材プログラム」を引きつづき実施する。また、本プログラムで指定した科目の単位を取得し、専攻外国語および第 2 外国語科目の基準を満たした者を「グローバル人材プログラム」修了者として、本事業の目標を達成した学生として認める。

加えて、きめ細やかなガイダンスの実施により、外国語学部の学生に「グローバル人材プログラム」を周知し、教務体制を確立する。

平成 28 年度の文部科学省による本事業助成終了に向け、「グローバル人材プログラム」の iCoToBa 科目を正課科目に位置付け、平成 29 年度以降の学部プログラムとして再編成する。

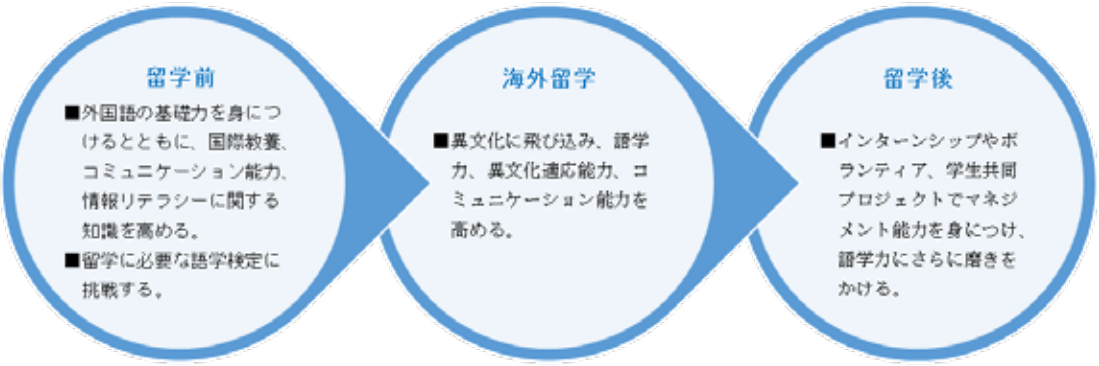
3. 平成 27 年度の実績

①グローバル人材プログラムの策定と実施

上記の目標を達成すべく、グローバル人材育成推進室は、「グローバル人材プログラム」を外国語学部で前年度に引きつづき実施した。

本プログラムは、学部の専門の学修に加えて、海外留学を組み込み、留学前、留学中、留学後の各段階で、グローバル社会に必要とされる能力を養成する体系的な授業科目を提供し、語学力と共に主体的に行動する力を身につけることを目標としている(図 2-2 参照)。

［図 2-2　グローバル人材プログラムにおける学びの 3 段階］



また、本プログラムは、専攻外国語に加えて、他の一つ以上の外国語能力を身につける「複数言語運用能力養成」を目指している。複数の外国語を学ぶことにより、外国語で話せることのみならず、多様性を受け入れる柔軟な心や複眼的思考を育むことが可能となる。

「グローバル人材プログラム」で定めた科目は下表の通りである。

［表 2-1　グローバル人材プログラム科目一覧※］

科目群名称	科目		対象学年	単位	必修単位
A.国際教養	愛知の歴史と文化(グローバル)	教養教育	1～4	2	2
	日本の歴史と文化(グローバル)	教養教育	1～4	2	
	アジアの歴史と文化(グローバル)	教養教育	1～4	2	2
	ヨーロッパの歴史と文化(グローバル)	教養教育	1～4	2	
	北アメリカの歴史と文化(グローバル)	教養教育	1～4	2	
	ラテンアメリカの歴史と文化(グローバル)	教養教育	1～4	2	
	国際関係(グローバル)	教養教育	1～4	2	
B. プレゼンテーション・スキル	基礎演習 I	各学科・専攻	1	2	2
	日本紹介	iCoToBa	留学前	－	必修
C.情報リテラシー	情報リテラシーA(キャリア・スキル)	教養教育	1・2	2	2
	情報リテラシーB(キャリア・スキル)	教養教育	1～4	2	
	高度情報社会の理解(キャリア・スキル)	教養教育	1～4	2	
	キャリアのための統計入門(キャリア・スキル)	教養教育	1～4	2	

D. 広義のコミュニケーション力	多文化社会とコミュニケーション（グローバル）	教養教育	1～4	2	2
	キャリア実践（キャリア・形成）	教養教育	1～3	2	
	地域に学ぶ（特別開講科目）	教養教育	1～4	2	
	人文地理学入門（旧カリのみ）	旧カリ	1～4	2	
	特別講義B「企業トップに聞く」（旧カリのみ）	旧カリ	1～4	2	
E. 異文化適応能力	英語連続セミナー（グローバル）	教養教育	1～4	2	2
	Japan Seen from Outside （グローバル）（新カリのみ）	教養教育	1～4	2	
	日本と異文化の交流（グローバル）	教養教育	1～4	2	
	文化人類学（旧カリのみ）	旧カリ	1～4	2	
	研究各論（多文化共生論）	国際関係	2	4	
	研究各論（異文化コミュニケーション）	国際関係	2	2	
	研究各論（地域社会論）	国際関係	3・4	2	
	比較文化セミナー	iCoToBa	留学前	－	必修
F. 課題発見・解決力	インターンシップ（キャリア形成支援）	教養教育	2・3	2	2
	リサーチ・発信プロジェクト①	iCoToBa	留学前	－	必修
	卒業論文	各学科・専攻	4	8	8
G. マネジメント能力	人生設計とキャリア（キャリア形成支援）	教養教育	1・2	2	2
	研究各論（NPO 論）	国際関係	2・3	2	
	学生共同プロジェクト	iCoToBa	留学後	－	必修
H. 留学先履修科目	リサーチ・発信プロジェクト②	iCoToBa	留学中	－	必修
	海外協定大学修得科目	各学科・専攻		2	2
I. 講習会等	情報探索講座（初級）	図書館	1	－	必修
	情報探索講座（上級・外語編）	図書館	2・3	－	必修
	留学体験発表会	iCoToBa	留学後	－	必修
					26

※ 平成 26 年度からの新カリキュラムを反映したものである。

「グローバル人材プログラム」の修了要件は、以下の 4 点である。

1. 卒業時に、専攻外国語と第 2 外国語（全学共通外国語科目で履修した言語）に関して以下（p.9、表 2-2）の到達目標レベルを満たしていること。
2. 「グローバル人材プログラム」指定科目（表 2-1）から、26 単位を履修すること。
3. 「グローバル人材プログラム」が指定する iCoToBa 開講科目（表 2-1）を受講し、クラス修了試験に合格すること。
4. 「グローバル人材プログラム」指定講習会に出席し、指定の課題を提出すること。

［表 2-2 グローバル人材プログラムで定めた外国語達成目標］

	専攻外国語	第 2 外国語
英語	TOEIC 800 点以上	TOEIC 730 点以上
フランス語	実用フランス語技能検定試験準 1 級以上	実用フランス語技能検定 3 級以上
スペイン語	DELE　B1 以上	DELE　A1 以上
ドイツ語	ドイツ語技能検定試験 2 級以上	ドイツ語技能検定試験 4 級以上
中国語	中国語検定試験 2 級以上	中国語検定試験 3 級以上
ポルトガル語	―	外国語としてのポルトガル語検定試験 CIPLE 以上または、中級以上に相当する科目でA評価を4単位以上
ロシア語	―	ロシア語能力検定試験 4 級以上または、中級以上に相当する科目でA評価を4単位以上
韓国朝鮮語	―	ハングル能力検定試験 3 級以上または、韓国語能力試験 3 級以上
日本語※	―	日本語能力検定試験 N1 合格

※外国人留学生のみ

②「グローバル人材プログラム」ガイダンスの実施と教務体制の確立

外国語学部の学生に「グローバル人材プログラム」を周知するために、きめ細やかなガイダンスを実施した。平成 27 年度に実施したガイダンスは以下のとおりである。

a)　平成 27 年度新入生対象　グローバル人材プログラムガイダンス（4 月 6 日実施）
b)　グローバル人材プログラムガイダンス・履修相談（4 月 7 日実施）
c)　平成 27 年度後期グローバル人材プログラムガイダンス・履修相談
（10 月 1 日、2 日、7 日実施）

これら a～c に加え、各学科・専攻で新入生対象に iCoToBa ガイダンスを実施した。これについては第 3 章（pp.19-22）で触れる。

a）平成 27 年度　新入生対象グローバル人材プログラムガイダンス

平成 27 年 4 月 6 日に外国語学部新入生を対象に実施した。グローバル人材プログラムの概要および、iCoToBa（多言語学習センター）の紹介、留学制度等について説明した。

［新入生対象グローバル人材プログラムガイダンスの様子］

b) グローバル人材プログラムガイダンス・履修相談（4 月 7 日実施）

全学で新年度の履修相談がおこなわれた 4 月 7 日（13:00～17:00）に、iCoToBa Activity Space でグローバル人材プログラムのガイダンスと履修相談を実施した。50 名余りの学生の参加があり、グローバル人材プログラムの履修方法、iCoToBa の授業のとり方、留学制度についてなど具体的な質問があった。昨年度に続き、グローバル人材育成推進室の各学科・専攻の新旧室員が対応した。

［グローバル人材プログラムガイダンス・履修相談の様子］

c) 平成 27 年度後期グローバル人材プログラムガイダンス・履修相談

10 月 1 日、2 日、7 日の昼休み（12:10～12:40）に iCoToBa Activity Space で後期のグローバル人材プログラムのガイダンスと履修相談を実施した。特に、留学から帰国した学生や復学した学生に向けてプログラムの履修方法など教務内容を中心としたガイダンスを実施した。新年度に実施したガイダンスと同様にグローバル人材育成推進室の各学科・専攻の室員が対応した。参加者は 12 名と多くはなかったが、本プログラムに関心の高い学生の個別の質問に答えることができた。

また、本プログラムに関する学生からの質問をまとめた「グローバル人材プログラム FAQ」を作成し、資料配布および HP やインターネットポートフォリオ manaba（pp.40-43 参照）により周知した。

③「グローバル人材プログラム」指定科目履修状況

本プログラムは、全学共通科目（教養教育科目）、学部専門科目、iCoToBa 開講科目、その他講習会等からなる。このうち、平成 27 年度に iCoToBa で開講したグローバル人材プログラム科目の履修者は以下のとおりである。

表 2-3～表 2-5 の「※1」はグローバル人材プログラムの「日本紹介」、「※2」は「比較文化セミナー」、「※3」は「リサーチ・発信プロジェクト（留学前）」の指定科目であることを示している。

［表 2-3　平成 27 年度前期　iCoToBa 開講グローバル人材プログラム指定科目］

CEFR によるレベル（言語） 科目名称	各言語科目名称	受講者数
B1-C1/中級～上級（英語）※1 英語で日本 PR プロジェクト 1	J-Ambassador 1	14
B1-C1/中級～上級（英語）※1 英語で日本 PR プロジェクト 2	J-Ambassador 2	4
B2-C1/中上級～上級（英語）※1 日本コンテンツ文化英訳プロジェクト	Japan Contents Culture Translation Project	12
A2-B1/初中級～中級（英語）※2 比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！1	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World 1	17
A2-B1/初中級～中級（英語）※2 比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！2	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World 2	23
B1-C1/中級～上級（英語）※2 比較文化セミナー：ニュースで英語	News English	21
C1-C2/上級以上（英語）※2 メディアと文化	Advanced Course: Media and Culture	8
A2-B1/初中級～中級（英語）※3 プロジェクトワークを行って発表しよう！①-1	Research and Presentation Project 1	9
A2-B1/初中級～中級（英語）※3 プロジェクトワークを行って発表しよう！①-2	Research and Presentation Project 2	10
A2-B1/初中級～中級（英語）※3 プロジェクトワークを行って発表しよう！①-3	Research and Presentation Project 3	17
B1-C1/中級～上級（英語）※3 世界を変えるには	Creating Change	5
A2-B1/初中級～中級（フランス語）※1 ニッポンなう。	Le Japon aujourd'hui	12
A2-B1/初中級～中級（フランス語）※2 フランス語圏なう。	La Francophonie aujourd'hui	12

A1-A2/初級～初中級（フランス語）※3 リサーチ・発信プロジェクト①	Recherche et présentation I	12
A2/初中級（スペイン語）※1 日本文化をプレゼン	Habilidades de Presentación sobre la Cultura Japonesa	10
B1/中級（スペイン語）※2 比較文化研究（比較文化セミナー）	Estudios Culturales Comparativos	12
B1/中級（スペイン語）※3 リサーチ・発信プロジェクト①	Metodología y Léxico para Proyectos de Investigación 1	12
A2-B2/初中級～中上級（ドイツ語）※1 日本紹介	Japanbotschafter	25
B1 以上/中級以上（ドイツ語）※2 ドイツの文化：留学ケア	Deutsche Kultur – Auslandsstudiumsnachbetreuung	4
A2-B2/初中級～中上級（ドイツ語）※3 リサーチ・発信プロジェクト①	Forschungs- und Präsentationsprojekt 1	10
A2/初中級（中国語）※1 中国語で日本を紹介する	用汉语介绍日本	6
A2/初中級（中国語）※2 中国と日本の比較文化	中日文化比较	6
B1/中級（中国語）※3 リサーチ・発信プロジェクト①	实践调查与报告　1	5
B2 以上/多言語 あいちものづくり学生共同プロジェクト	Aichi Local Business Student Collaborative Project	19

［表 2-4　平成 27 年度後期　iCoToBa 開講グローバル人材プログラム指定科目］

CEFR によるレベル（言語） 科目名称	各言語科目名称	受講者数
B1-C1/中級～上級（英語）※1 英語で日本 PR プロジェクト-日本の魅力を発信しよう！	J-Ambassador	9
B2-C2/中上級～上級以上（英語）※1 ちなみに、「日本」って何？	What is "Japan," Anyway?	9
B1-C1/中級～上級（英語）※2 ニュースで英語	News English	7
B1-C1/中級～上級（英語）※2 それは面白い？	What’s so funny?	9

A2-B1/初中級～中級（英語）※2 比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！1	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World 1	11
A2-B1/初中級～中級（英語）※2 比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！2	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World 2	9
B2-C2/中上級～上級以上（英語）※2 ちなみに、「グローバル」って何？	What is "Global," Anyway	2
A2-B2/初中級～中上級（英語）※3 プロジェクトワークを行って発表しよう！①-1	Research and Presentation Project①- 1	16
A2-B2/初中級～中上級（英語）※3 プロジェクトワークを行って発表しよう！①-2	Research and Presentation Project ①-2	4
B2-C1/中上級～上級（英語）※3 グローバルリーダー	Global Leader	5
A2-B1/初中級～中級（フランス語）※1 ニッポンなう。	Le Japon aujourd'hui	15
A2-B1/初中級～中級（フランス語）※2 フランス語圏なう。	La Francophonie aujourd'hui	12
A2-C1/初中級～上級（フランス語）※3 リサーチ・発信プロジェクト①	Recherche et présentation I	12
A2/初中級（スペイン語）※1 日本文化をプレゼン	Habilidades de Presentación sobre la Cultura Japonesa	3
B1-B2/中級～中上級（スペイン語）※2 比較文化研究	Estudios Culturales Comparativos 2	12
B1-B2/中級～中上級（スペイン語）※3 リサーチ・発信プロジェクト	Metodología y Léxico para Proyectos de Investigación 1	8
A2-B2/初中級～中上級（ドイツ語）※1 日本紹介	Japanbotschafter	3
B1-C1/中級～上級（ドイツ語）※2 ドイツの文化：留学ケア	Deutsche Kultur – Auslandsstudiumsnachbetreuung	6
A2-B2/初中級～中上級（ドイツ語）※3 リサーチ発信プロジェクト①	Forschungs- und Präsentationsprojekt 1	5
A2/初中級（中国語）※1 中国語で日本を紹介する	用汉语介绍日本	5
A2/初中級（中国語）※2 中国と日本の比較文化	中日文化比较	5
B1/中級（中国語）※3 リサーチ・発信プロジェクト①	实践调查与发表1	1

A2-C1/多言語 学生共同プロジェクト（イマージョン合宿）	Group Work Project (Immersion Program)	14
B2 以上/多言語 地域ものづくり学生共同プロジェクト	Local Business Student Collaborative Project	24

［表 2-5　平成 27 年度 iCoToBa サマープログラム内グローバル人材プログラム指定科目］

CEFR によるレベル（言語） 科目名称	各言語科目名称	受講者数
B1-C1/中級～上級（英語）※1 英語で日本 PR プロジェクト：スピーキング・エクスチェンジ・プロジェクト	J-Ambassador	9
A2-B2/初中級～中上級（英語）※2 比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World	3

④「グローバル人材プログラム修了証」の発行

本プログラムにおける上記の修了要件を満たした者には、卒業時に「グローバル人材プログラム修了証」を発行することとしており、平成 27 年度については、平成 28 年 3 月に卒業予定の 1 名（英米学科）が発行を受ける予定である。修了証の発行は次のような手順でおこなわれている。

1) 学務課：「グローバル人材プログラム修了証書」発行について UNIPA で学生向けに仮申請の受付開始を案内
2) 学生：UNIPA で申請後、「修得単位チェックシート」を学務課に提出（仮申請）
3) グローバル人材育成推進室：当該年度後期の成績発表後、学務課より成績情報・検定結果を受領
4) グローバル人材育成推進室：本プログラム担当教員による認定審査
5) グローバル人材育成推進室会議：承認
6) 学務課：修了証の発行、学生への引渡し（平成 28 年 3 月の予定）

⑤「グローバル人材プログラム受講証明書」の発行

本プログラムにおける下記の発行条件を満たした 3 年次以上の者には、キャリア支援の一環として、就職活動を予定している学生のために「グローバル人材プログラム受講証明書」を発行することとしており、平成 27 年度については、12 名への発行が承認された。

［発行条件］

1. グローバル人材プログラム指定 iCoToBa 科目の 3 科目以上に合格していること
2. 卒業論文以外の必修単位（18 単位）のうち 14 単位以上を取得済みであること

受講証明書の発行は次のような手順でおこなわれている。

1) 学務課:「グローバル人材プログラム受講証明書」発行についてUNIPAで学生向けに仮申請の受付開始を案内
2) 学生:UNIPAで申請後、「修得単位チェックシート」を学務課に提出(仮申請)
3) グローバル人材育成推進室:前期・後期の成績発表後、学務課より成績情報・検定結果を受領
4) グローバル人材育成推進室:本プログラム担当教員による認定審査
5) グローバル人材育成推進室会議:承認
6) 学務課:受講証明書の発行、学生への引渡し(随時)

⑥「グローバル人材プログラム修了見込証明書」の発行

上記の「グローバル人材プログラム受講証明書」に加え、平成27年度から新たに、本プログラムにおける下記の発行条件を満たした3年次以上の者には、更なるキャリア支援の一環として、就職活動を予定している学生のために「グローバル人材プログラム修了見込証明書」を発行することとし、平成27年度については、3名への発行が承認された。

[発行条件]

1. グローバル人材プログラム指定iCoToBa科目の3科目以上に合格していること
2. 卒業論文以外の必修単位(18単位)のうち14単位以上を取得済みであること
3. 語学検定試験において、専攻外国語、第2外国語ともに到達目標レベルを満たしていること

修了見込証明書の発行は次のような手順でおこなわれている。

1) 学務課:「グローバル人材プログラム修了見込証明書」発行についてUNIPAで学生向けに仮申請の受付開始を案内
2) 学生:UNIPAで申請後、「修得単位チェックシート」を学務課に提出(仮申請)
3) グローバル人材育成推進室:前期・後期の成績発表後、学務課より成績情報・検定結果を受領
4) グローバル人材育成推進室:本プログラム担当教員による認定審査
5) グローバル人材育成推進室会議:承認
6) 学務課:修了見込証明書の発行、学生への引渡し(随時)

⑦平成29年度からの「グローバル人材プログラム」履修規程の整備

平成28年度で、文部科学省による本事業助成は終了する。助成終了までに、「グローバル人材プログラム」を正課科目に全て移行することを目指していた。本年度は、企画

委員会で「グローバル人材プログラム」の正課科目移行を検討してきた。その結果「日本紹介」「比較文化セミナー」「リサーチ・発信プロジェクト①」を、学部の正課科目として新たに設置し、平成 28 年度入学生より学部履修規程に、専門発展科目として以下の科目を加えることが、第 7 回教授会（10 月 7 日）で承認された。

「共通各論（グローバル：日本紹介）」（2 年次以上・2 単位）

「共通各論（グローバル：比較文化セミナー）」（2 年次以上・2 単位）

「共通各論（グローバル：リサーチ・発信プロジェクト）」（2 年次以上・2 単位）

そのほか、「学生共同プロジェクト」と学科・専攻の演習科目に「図書館情報探索講座」の受講を必修とした。以上により、「グローバル人材プログラム」の科目が全て正課科目となり、平成 28 年度入学生からは、計 36 単位のプログラムとして再出発することとなった。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

平成 25 年度に始まった「グローバル人材プログラム」も 3 年目に入り、本プログラム指定の iCoToBa 科目の時間割編成や manaba を利用した履修登録などにおいて、ノウハウが蓄積されてきた結果、新学期に向けた準備作業がスムーズにおこなわれている。また、本年度は前期および後期の新学期に本プログラムのガイダンス・履修相談を複数回実施した結果、学生へのきめ細かい指導ができた。

平成 27 年度に卒業する学生のうち、「グローバル人材プログラム」の修了者は 2 名にとどまっているが、3 年次以上の学生を対象とした「グローバル人材プログラム受講証明書」の発行については、7 名に発行済みである。また、平成 27 年度より新たに設けた「グローバル人材プログラム修了見込証明書」については 4 名に発行しており、次年度以降、修了者の増加が見込まれる。

平成 27 年度に iCoToBa で開講したグローバル人材プログラム科目の履修者は、のべ 575 名であった。加えて、情報探索講座（初級編）合格者が 134 名、情報探索講座（上級編）合格者が 45 名であったことをあわせて考えると、次年度以降、本プログラムの修了者数および受講証明書の受領者数は増加していくものと期待される。

②改善すべきこと

本年度は、前期および後期の新学期に本プログラムのガイダンスおよび履修相談を実施し、熱心に取り組んでいる学生へのきめ細かい指導はできたが、本プログラムに取り組んでいる学生のすそ野が十分に広がっているとはいえない。学生からの履修上の相談に対応できる教員がグローバル人材育成推進室の各学科・専攻の室員しかいないことも、その原因の一つといえる。

しかし本年度は、本プログラムを受講している学生が、プログラムのプロモーションのために、自主的に動画作成をするなどの動きも始まっている。

今後、修了者数を増やしていくためにも、さらなる周知徹底を図る。

5. 平成 28 年度に向けての方策

平成 28 年度に実施するガイダンスでは、学生の視点に立ち、本事業に関連する部署（iCoToBa 委員会、国際交流室）とも連携をとり、一元化した情報提供を目指す。

平成 28 年度で文部科学省からの事業助成が終了する。そこで、来年度は、本事業助成終了後の外国語学部「グローバル人材プログラム」の教務体制を確立するとともに、全学に展開する新グローバル人材育成推進室の立ち上げを行う。iCoToBa（多言語学習センター）での開講科目や教育サービスの運営は、新グローバル人材育成推進室が所掌予定であり、来年度は、全学の教育ニーズも探りながら運営方針を固める予定である。

3. iCoToBa（多言語学習センター）

1. 概要

iCoToBa（多言語学習センター）は、本事業採択に伴い、本学の外国語学習支援と異文化理解および異文化交流推進を目的に開設された学習施設である。

iCoToBa では、英語 2 名、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語各 1 名の外国人教員によるバラエティ豊かな語学授業が提供されている。また、留学アドバイザー（非常勤）と語学学習アドバイザーによる個別指導も行っており、学生の外国語能力養成と留学計画を含めた計画的な学修ができるようサポートしている。

iCoToBa は、以下の役割を担っている。

a） 語学授業の提供

英語 45 時間（90 分×30 コマ）、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語は、各 15 時間（90 分×10 コマ）の語学授業を開講している。語学授業は、専攻外国語と第 2 外国語の授業や外国語学部学生の必修科目の時間帯を調査し、できるだけ学生が履修しやすい時間帯に設定するように工夫されている。

b） 語学学習アドバイジングと自律学習支援

iCoToBa では、専任の語学学習アドバイザーが、TOEFL や IELTS など、英語圏の大学への留学に必要な試験準備の指導に加え、留学準備に関する個別相談にのっている。また、e-Learning を用いた語学学習に学生が自主的に取り組めるよう、e-Learning ガイダンスを立案・実施している。英語以外の e-Learning については、各学科・専攻の iCoToBa 委員が中心となり、使用方法や勉強方法について説明会を開催している。

これに加え、学生が自由に外国人教員と外国語での会話や学習相談ができる「iContact」という時間を設定している。平成 27 年度からは、教養教育センターとの協働により、教養教育センター所属外国人教員 4 名も担当し、週あたり 19.5 時間開設している。

c） 留学アドバイザーによる個別指導および留学体験報告会の実施

留学アドバイザー（平成 27 年度より非常勤）が、国際交流室との協働のもと、個別に留学準備のための相談に応じている。加えて、iCoToBa では留学した学生の体験談を聞くイベントなど、学生に対する留学への動機づけを目指したイベントを計画・実施している。

d） 異文化理解、異文化交流を促進させるイベントの開催

外国の文化を紹介・体験するイベントや、本学留学生や近隣機関との交流イベントなどを開催している。これは、本学の学生にとって、異文化を理解し実際に外国語でコミュニケーション

する機会にもなっている。また、これらの多くのイベントは、教員が企画運営をするのではなく、企画段階から学生も参加することで、学生の自主性や行動力、マネジメント能力育成も目指している。

e) 学生活動のサポート

d の活動を契機に、学生自身が「ともに創りだす楽しさ」を発見することも多い。これを成長の機会ととらえ、iCoToBa では、学生自身が企画を作成し実施することも推奨、サポートしている。現在では、学生の自主グループ iCoToBa Supporters Club（ISC）が組織化され、iCoToBa の運営に積極的に参画している。

f) 情報発信

Web サイトやインターネットポートフォリオを活用し、外国語学習や留学に関する情報提供を行っている。また、学生の自主的な活動のサポートとしてインターネットポートフォリオ内にコミュニティを立ち上げ、運営している。

加えて、iCoToBa で取り組んでいる語学授業や教育手法について研究会での実践報告や教材開発も行っている。

2. 平成 27 年度の目標

iCoToBa 開講の外国語学部「グローバル人材プログラム」指定科目をすべて開講する。PBL 手法に基づく外国語教育を拡充し、語学学習支援と異文化交流行事を充実させる。また、iCoToBa 利用者および iCoToBa 授業受講者の増加を目指す。1 日あたりの iCoToBa 利用者数の目標値を 60 人とする。

3. 平成 27 年度の実績

① iCoToBa ガイダンスの実施

平成 27 年度は、昨年度と同様 iCoToBa 主催の新入生対象ガイダンスを 2 種類実施した。iCoToBa の雰囲気に触れることを目的とした「iCoToBa Welcome Week」と、外国語学習の動機づけと主体的な学びを促すことを主眼においた「iCoToBa 新入生ガイダンス」である。

a) iCoToBa Welcome Week

本年度の iCoToBa Welcome Week は、4 月 8 日（水曜日）から 4 月 14 日（火曜日）にかけて開催された。Welcome Week 期間中は、①各言語の授業説明会と体験授業、②異文化理解イベント、③自由会話を楽しむ時間を毎日設定し、多くの学生が参加した。昨年度同様、学生が集中し混乱するのを避け、より多くの学生が参加できるよう言語ごとにスケジュール調整した。

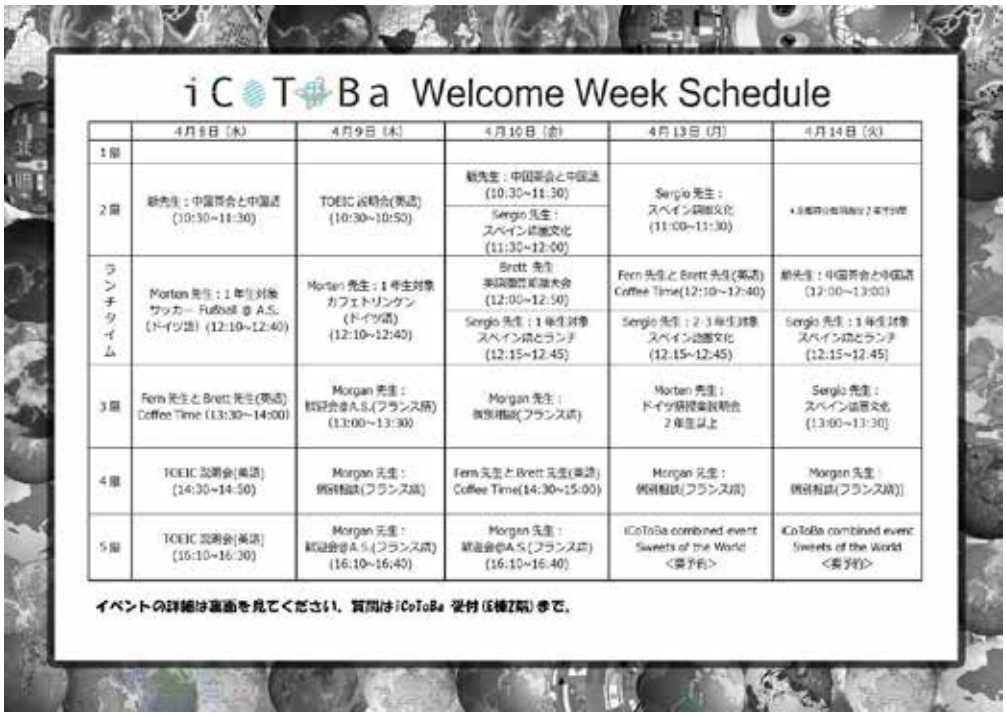
英語のガイダンスは期間中毎日開催し、授業説明に加えて、英語が話されている国や地域に関する豆知識大会、ドイツの文化やスポーツをトピックに話し合うなど、コミュニケーションを楽しめるイベントを提供した。中国語のガイダンスでは、iCoToBa 教員による中国茶のデモンストレーションを行い、学生の語学学習に対する関心を高めた。

Welcome Week 5 日目および 6 日目には、世界のスイーツ体験（Sweets of the World）を開催した。1 年生を中心に 94 名の学生が参加した。

Welcome Week 期間中に iCoToBa を利用した学生数はのべ 592 名 (1 日平均 118 名)であり、学年では 1 年生が最も多く全体の 60%（357 名）であった。Welcome Week の開催により、新入生に iCoToBa の施設や授業内容等について十分周知できたと考えられる。

［iCoToBa Welcome Week の様子］

［図 3-1 iCoToBa Welcome Week ちらし］



iCoToBa Welcome Week Schedule

	4月8日（水）	4月9日（木）	4月10日（金）	4月13日（月）	4月14日（火）
1限					
2限	新先生：中国茶会と中国語 (10:30~11:30)	TOEIC 説明会(英語) (10:30~10:50)	新先生：中国茶会と中国語 (10:30~11:30) Sergio 先生：スペイン語圏文化 (11:30~12:00)	Sergio 先生：スペイン語圏文化 (11:00~11:30)	
ランチタイム	Morten 先生：1 年生対象 サッカー Fußball @ A.S. (ドイツ語) (12:10~12:40)	Morten 先生：1 年生対象 カフェトリンゲン (ドイツ語) (12:10~12:40)	Brett 先生 英国国際交流大会 (12:00~12:50) Sergio 先生：1 年生対象 スペイン語とランチ (12:15~12:45)	Fern 先生と Brett 先生(英語) Coffee Time(12:10~12:40) Sergio 先生：2・3 年生対象 スペイン語圏文化 (12:15~12:45)	新先生：中国茶会と中国語 (12:00~13:00) Sergio 先生：1 年生対象 スペイン語とランチ (12:15~12:45)
3限	Fern 先生と Brett 先生(英語) Coffee Time (13:30~14:00)	Morgan 先生：新設会@A.S.(フランス語) (13:00~13:30)	Morgan 先生：個別相談(フランス語)	Morten 先生：ドイツ語授業説明会 2 年生以上	Sergio 先生：スペイン語圏文化 (13:00~13:30)
4限	TOEIC 説明会(英語) (14:30~14:50)	Morgan 先生：個別相談(フランス語)	Fern 先生と Brett 先生(英語) Coffee Time(14:30~15:00)	Morgan 先生：個別相談(フランス語)	Morgan 先生：個別相談(フランス語)
5限	TOEIC 説明会(英語) (16:10~16:30)	Morgan 先生：新設会@A.S.(フランス語) (16:10~16:40)	Morgan 先生：新設会@A.S.(フランス語) (16:10~16:40)	iCoToBa combined event Sweets of the World <要予約>	iCoToBa combined event Sweets of the World <要予約>

イベントの詳細は裏面を見てください。質問は iCoToBa 受付（E棟2階）まで。

b） iCoToBa 新入生ガイダンス

このガイダンスは、外国語学習の目標や方法について考え、話し合うことで、新入生が学びの主体であることを意識させるために、iCoToBa 委員、iCoToBa 教員、グローバル人材育成推進室室員の協力により行った。ガイダンスは、90 分×2 回実施した。

それぞれのガイダンスの目的は下記のとおりである。

iCoToBa ガイダンスⅠ：iCoToBa の説明、グローバル人材プログラムの説明・履修方法、外国語学習の動機づけ

iCoToBa ガイダンスⅡ：e-Learning、manaba の使い方の理解

［表 3-1　平成 27 年度 iCoToBa 新入生ガイダンス日程］

学科・専攻	1回目	2回目
英米学科	4 月 8 日（水）5 限	4 月 15 日（水）5 限
フランス語圏専攻	4 月 8 日（水）3 限	4 月 15 日（水）3 限
スペイン語圏専攻	4 月 10 日（金）2 限	4 月 14 日（火）2 限
ドイツ語圏専攻	4 月 8 日（水）3 限	4 月 15 日（水）3 限
中国学科	4 月 14 日（火）2 限	4 月 15 日（水）3 限
国際関係学科	4 月 8 日（水）5 限	4 月 16 日（木）4 限

［iCoToBa 新入生ガイダンス（第 1 回）の様子］

以上の２種類のガイダンスに加え、グローバル事業関連ガイダンスや行事についてまとめたプリント「グローバル人材プログラム& iCoToBa at a glance」を作成・配布した。

［図 3-2　グローバル人材プログラム＆iCoToBa at a glance］

② iCoToBa 開講科目

iCoToBa では、外国語学部の専攻外国語である英語、フランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語の語学授業を開講している。レベル別（ヨーロッパ共通参照枠：CEFR A1~C1）・目的別（4 技能、留学準備、グローバル人材プログラム指定科目）に設定し、正課の授業で身につけた言語知識をもとに、実際的な運用能力を身につけることと、学習言語が話されている地域の文化や社会について、学習言語を使って調べ発信することを目指す授業設計をしている。

以下は、平成 27 年度に iCoToBa で開講した科目および受講者の一覧である。なお、各表左端の列「指定」の「○」は、外国語学部「グローバル人材プログラム」指定科目であることを示している。

［表 3-2　平成 27 年度前期 iCoToBa 開講科目］

指定	科目名称	各言語科目名称	レベル	受講者数
	サバイバル英語 1	Survival English	A2-B1	50

○	ニュースで英語	News English	B1-C1	21
	ワードパワー！	Word Power	B1-B2	2
○	英語で日本PRプロジェクト 1	J-Ambassador 1	B1-C1	14
○	英語で日本PRプロジェクト 2	J-Ambassador 2	B1-C1	4
○	世界を変えるには	Creating Change	B1-C1	5
	TED から学ぶ	TED Talks	B1-B2	17
	英語で小論	Short Essay Writing	B2-C1	9
	会話を上手に！	Get Good at Speaking	B1 以上	24
	発音練習 1	Pronunciation Profiles 1	A2-B1	26
	発音練習 2	Pronunciation Profiles 2	A2-B1	9
○	比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！1	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World 1	A2-B1	17
○	比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！2	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World 2	A2-B1	23
○	プロジェクトワークを行って発表しよう！①－1	Research and Presentation Project ①-1	A2-B2	9
○	プロジェクトワークを行って発表しよう！①－2	Research and Presentation Project ①-2	A2-B2	10
○	プロジェクトワークを行って発表しよう！①－3	Research and Presentation Project ①-3	A2-B2	17
	実際に使える英語表現・イディオム	Real-Life Expressions and Idioms	A2-B1	24
○	日本コンテンツ文化英訳プロジェクト	Japan Contents Culture Translation Project	B2-C1	12
○	メディアと文化	Advanced Course: Media and Culture	C1-C2	8
	検定対策 TOEIC 1	TOEIC Intensive 1	A1-C1	31
	検定対策 TOEIC 2	TOEIC Intensive 2	A1-C1	13
	検定対策 TOEIC 3（全学部生対象）	TOEIC Intensive 3	A1-C1	15
	検定対策 TOEIC 4（全学部生対象）	TOEIC Intensive 4	A1-C1	11
	検定対策 TOEIC 早朝特訓 1（全学部生対象）	TOEIC Early Bird 1	A1-C1	11
	検定対策 TOEIC 早朝特訓 2	TOEIC Early Bird 2	A1-C1	10

	検定対策　TOEFL 1	Strategic TOEFL 1	A1-C1	7
	検定対策　TOEFL 2	Strategic TOEFL 2	A1-C1	2
	検定対策　IELTS 1	Successful IELTS 1	A1-C1	7
	検定対策　IELTS 2	Successful IELTS 2	A1-C1	2
	検定対策 リスニング　1	Listening for Exams 1	A1-C1	4
	検定対策 リスニング　2	Listening for Exams 2	A1-C1	10
	発音サロン	Le français tout de suite	A1	44
	めざせ仏検準 2 級	Cours de préparation au DAPF - jun 2 kyu	A2-B1	10
	めざせ仏検準 1 級	Cours de préparation au DAPF - jun 1 kyu	B2-C1	2
	フランス語で話そう！II (3･4 年生)	Petite discussion en français II	B1 以上	4
	フランス語クラブ 1　初･中級	Atelier de français I	A1-B1	12
	フランス語クラブ 2　中･上級	Atelier de français II	B1-B2	3
○	ニッポンなう。	Le Japon aujourd'hui	A2-B1	12
○	フランス語圏なう。	La Francophonie aujourd'hui	A2-B1	12
○	リサーチ･発信プロジェクト①	Recherche et Présentation I	A2-B1	12
	スペイン語圏世界とグローバリティ	El Mundo Hispánico y la Globalidad	B1-B2	6
	第 2 外国語としての スペイン語	Español como Segunda Lengua Extranjera A1 alto	A1+他学科/専攻	4
○	比較文化研究（スペイン語圏の学生と合同授業）（比較文化セミナー）	Estudios Culturales Comparativos con estudiantes hispanos	B1-B2	12
○	リサーチ･発信プロジェクト①	Metodología y Léxico para Proyectos de Investigación	B1-B2	12
○	日本文化をプレゼン	Presentación de la Cultura Japonesa	A2	10
	時事問題読解	Actualidad del Mundo Hispánico	A2-B2	7
	DELE B1 対策＋α	Preparación para el Examen DELE B1	B1	22
	DELE A2 対策＋α	Preparación para el Examen DELE A2	A2	31
	初級スペイン語　1	Español Básico Nivel A1	A1+他学科/専攻	27

	初級スペイン語 2	Español Básico Nivel A1	A1+他学科/専攻	21
	ドイツ日常語と実践会話 I	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches I	A1	24
	ドイツ日常語と実践会話 II	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches II	A1	14
	ドイツ日常語と実践会話 III	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches III	A2	4
	ドイツ日常語と実践会話 IV	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches IV	A2	3
	ドイツ日常語と実践会話 V	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches V	A1	41
	ドイツの文化：留学ケア	Deutsche Kultur – Auslandsstudiumsnachbetreuung	B1 以上	4
	発音、パフォーマンス	Aussprache und Performance	A2 以上	10
	検定試験対策	Testvorbereitung	A2 以上	9
○	日本紹介	Japanbotschafter	A2-B2	25
○	リサーチ・発信プロジェクト①	Forschungs- und Präsentationsprojekt 1	A2-B2	10
○	中国と日本の比較文化	中日文化比较	A2	6
○	リサーチ・発信プロジェクト①	实践调查与发表 1	B1	5
	発音特訓講座 A	发音特训讲座 A	A1	12
	発音特訓講座 B	发音特训讲座 B	A1	14
	発音特訓講座 C	发音特训讲座 C	A1	12
	発音特訓講座 D	发音特训讲座 D	A1	13
○	中国語で日本を紹介する	用汉语介绍日本	A2	6
○	あいちものづくり 学生共同プロジェクト	Aichi Local Business Student Collaborative Project	B2-C1	19
○	留学体験発表会 1（留学経験あり）発表者用	Presentation of Study Abroad Experience 1	A2-C1	10
○	留学体験発表会 2（留学経験なし）参加者用	Presentation of Study Abroad Experience 2	A2-C1	5

［表 3-3　平成 27 年度後期 iCoToBa 開講科目］

指定	科目名称	各言語科目名称	レベル	受講者数
	サバイバル英語	Survival English	A2-B1	12
○	ニュースで英語	News English	B1-C1	7
○	それは面白い？	What's so funny?	B1-C1	9
○	英語で日本PRプロジェクト	J-Ambassador	B1-C1	9
	トピックトーク	Topic Talk	A2-B2	16
○	グローバルリーダー	Global Leader	B2-C1	5
	1 分間スピーチを練習しよう！	One-minute speech	A2-B2	1
	TED から学ぶ英語	TED Talks	B1-B2	12
	英語でショート・エッセイ	Short Essay Writing	B2-C1	7
	会話を上手に！	Get Good at Speaking	B1 or higher	23
	映画で英語学習	Study English with Movies	A2-B2	31
○	比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！1	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World 1	A2-B1	11
○	比較文化セミナー：英語圏を知りつくそう！2	Comparative Study of Cultures: The English-Speaking World 2	A2-B1	9
○	プロジェクトワークを行って発表しよう！①-1	Research and Presentation Project ①-1	A2-B2	4
○	プロジェクトワークを行って発表しよう！①-2	Research and Presentation Project ①-2	A2-B2	16
	実際に使える英語表現・イディオム	Real-Life English Expressions and Idioms	A2-B1	22
	クリティカル思考・作文ワークショップ	Critical Thinking and Writing Workshop	B2-C2	14
○	ちなみに、「日本」って何？	Advanced Course: What is "Japan," Anyway?	B2-C2	9
○	ちなみに、「グローバル」って何？	Advanced Course: What is "Global," Anyway?	B2-C2	2
	検定対策　TOEIC 1（全学部生対象）	TOEIC Intensive 1	A1-C1	20
	検定対策　TOEIC 2（全学部生対象）	TOEIC Intensive 2	A1-C1	13
	検定対策　TOEIC 3（全学部生対象）	TOEIC Intensive 3	A1-C1	8
	検定対策　TOEIC 4（全学部生対象）	TOEIC Intensive 4	A1-C1	13

	検定対策　TOEIC　早朝特訓　1（全学部生対象）	TOEIC Early Bird 1	A1-C1	24
	検定対策　TOEIC　早朝特訓　2（全学部生対象）	TOEIC Early Bird 2	A1-C1	29
	検定対策　TOEFL	Strategic TOEFL	A1-C1	10
	検定対策　Speaking for TOEFL	Speaking for TOEFL: Integrated	A1-C1	9
	検定対策　IELTS 1	Successful IELTS 1	A1-C1	5
	検定対策 リスニング 1	Listening for Exams 1： TOEIC, TOEFL and IELTS	A1-C1	8
	検定対策 リスニング 2	Listening for Exams 2: TOEIC, TOEFL and IELTS	A1-C1	5
	発音サロン 1	Le français tout de suite 1	A1	3
	発音サロン 2	Le français tout de suite 2	A1	10
	めざせ仏検準 2 級	Cours de préparation au DAPF - jun 2 kyu	A2-B1	4
	めざせ仏検準 1 級	Cours de préparation au DAPF - jun 1 kyu	B1-B2	8
	フランス語で話そう!	Petite discussion en français II	B1-B2	7
	フランス語クラブ　初・中級	Atelier de français I	A1-B1	6
	フランス語クラブ　中・上級	Atelier de français II	B1-B2	6
○	ニッポンなう。	Le Japon aujourd'hui	A2-B1	15
○	フランス語圏なう。	La Francophonie aujourd'hui	A2-B1	12
○	リサーチ・発信プロジェクト①	Recherche et Présentation I	A2-B1	12
	スペイン語圏世界とグローバリティ	El Mundo Hispánico y la Globalidad	B1-B2	3
	第 2 外国語としてのスペイン語	Español como Segunda Lengua Extranjera A1 alto	A1+他学科/専攻	2
○	比較文化研究（スペイン語圏の学生と合同授業）（比較文化セミナー）	Estudios Culturales Comparativos con estudiantes hispanos	B1-B2	12
○	リサーチ発信プロジェクト ①	Metodología y Léxico para Proyectos de Investigación	B1-B2	8
○	日本文化をプレゼン	Presentación de la Cultura Japonesa	A2-B2	3

	時事問題読解	Actualidad del Mundo Hispánico	A2-B2	5
	DELE B1 対策＋α	Preparación para el Examen DELE B1	B1	7
	DELE A2 対策＋α	Preparación para el Examen DELE A2	A2	15
	初級スペイン語Ⅱ- 1	Español Básico Ⅱ-1	スペイン語圏専攻 1 年・他学科/専攻用	14
	初級スペイン語Ⅱ- 2	Español Básico Ⅱ-2	スペイン語圏専攻 1 年・他学科/専攻用	16
	ドイツ日常語と実践会話 I	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches I	A1	11
	ドイツ日常語と実践会話 Ⅱ	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches II	A1	6
	ドイツ日常語と実践会話 III	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches III	A2	1
	ドイツ日常語と実践会話 IV	Deutsche Alltagssprache und Sprachpraktisches IV	A2	18
	ミュンスターアフターケア	Deutsche Kultur – MÜNSTERnachbetreuung	A2	2
○	ドイツの文化：留学ケア	Deutsche Kultur – Auslandsstudiumsnachbetreuung	B1	6
	発音とパフォーマンス	Aussprache und Performance	A2	5
	検定試験対策	Testvorbereitung	A2	4
○	日本紹介	Japanbotschafter	A2-B2	3
○	リサーチ・発信プロジェクト①	Forschungs- und Präsentationsprojekt①	A2-B2	5
○	中国と日本の比較文化	中日文化比較	A2	5

	実践中国語 A（日常会話）	生活汉语 A（日常会話）	A2	3
○	リサーチ・発信プロジェクト①	实践调查与发表	B1	1
	複文トレーニング	复句强化练习	B1	1
	発音と朗読	发音与朗读	A2	1
	実践中国語 B（聴解と会話）	生活汉语 B（听力与会话）	B1	6
	発音と初級会話	发音与初级会话	A1	4
○	中国語で日本を紹介する	用汉语介绍日本	A2	5
	中検 3 級対策	中检 3 级应试对策	A2	20
	成语、慣用句でリアルフレーズ	常用惯用语	B2	3
○	留学体験発表会 1（留学経験あり）発表者用	Presentation of Study Abroad Experience 1	A2-C1	23
○	留学体験発表会 2（留学経験なし）参加者用	Presentation of Study Abroad Experience 2	A2-C1	1
○	学生共同プロジェクト(Immersion Program)	Group Work Project (Immersion Program)	A2-C1	14
○	地域ものづくり学生共同プロジェクト	Local Business Student Collaborative Project	B2-C1	24

［表 3-4　平成 27 年度 iCoToBa サマープログラム開講科目］

指定	科目名称	各言語科目名称	レベル	受講者数
○	英語で日本 PR プロジェクト	J-Ambassador Speaking Exchange Project	B1-C1/	9
○	比較文化セミナー： 英語圏を知りつくそう！	Comparative Study of Cultures -The English-Speaking World -	A2-B2	3
	検定試験対策講座　TOEIC 1	TOEIC Intensive 1	A2-C1	11
	検定試験対策講座　TOEIC 2	TOEIC Intensive 2	A2-C1	
	TOEFL ITP 受験対策	TOEFL ITP	A2-C1	5
	検定試験対策講座　TOEFL	TOEFL last minute	A2-C1	2
	検定試験対策講座　IELTS	IELTS last minute	A2-C1	1
	思い出しフランス語 I	Le français dans la tête I	A2-B1	5
	サバイバルスペイン語	Español práctico	A2	4
	夏休みスペイン語力向上講座 （1 年生対象）	¿Cómo te lo pasas en tus primeras vacaciones?	A1	11

	ミュンスター大学夏期講座受講生対象コース	Münster, wir kommen! - Praktisches Vorbereitungs - blockseminar	A1-A2	7
	声に出して読んでみたい中国語 1	朗読 1	A2-B2	12
	声に出して読んでみたい中国語 2	朗読 2	A2-B2	8

［表 3-5　平成 27 年度 iCoToBa スプリングプログラム開講科目］

指定	科目名称	各言語科目名称	レベル	受講者数
	検定試験対策講座 TOEIC	TOEIC Intensive	A2-C1	2
	検定試験対策講座	English for Exams	A2-C1	6
	フランス Go! 1	À vos marques, prêts... français ! 1	B2 以上	5
	フランス Go! 2	À vos marques, prêts... français ! 2	A1-B2	5
	テスト準備	ÖSD-Testvorbereitung	A2-C1	9
	中検 3 級試験対策 1	中检 3 级考试辅导 1	A2-B2	6
	中検 3 級試験対策 2	中检 3 级考试辅导 2	A2-B2	4
	中検 3 級試験対策 3	中检 3 级考试辅导 3	A2-B2	4

［iCoToBa での授業風景］

③異文化交流イベントの実施

iCoToBa では、本学の学生の異文化理解および異文化交流を促進するために定期的にイベントを開催している。平成 27 年度に実施したイベントは、以下のとおりである。

［表 3-6　平成 27 年度 iCoToBa イベント］

実施日	時間	イベント名	参加者数
4 月 13 日 4 月 14 日	16:10-17:40	Sweets of the World	115

4 月 22 日	12:30-14:20	留学生歓迎会	41
5 月 27 日	12:10-12:40	日韓交流会	17
7 月 17 日	16:10-17:40	Goûter français	17
8 月 5 日	9:30-12:30	Survival Cooking	14
10 月 21 日	13:30-15:30	留学生歓迎会	76
11 月 2 日	12:00-12:50	Mexican Celebration of the day of the Dead	10
12 月 2 日	14:00-16:00	餃子会	30
12 月 16 日	12:00-17:00	ドイツのクリスマス	23
12 月 24 日	12:00-13:00	クリスマスクッキー　アイシング体験	33
1 月 6 日	14:30-16:00	メキシコのパーティ	27
1 月 13 日	13:00-15:00	留学生送別会	32
1 月 20 日	13:00-15:00	おせち体験と書初め大会	14

［4 月 22 日　留学生歓迎会］

［10 月 21 日　留学生歓迎会］

［12 月 16 日 ドイツのクリスマス］

［1 月 20 日　書初め大会］

④留学報告会の実施

iCoToBa では、留学を終えた学生が、自身の留学体験をふりかえり、今後留学を計画している学生に充実した情報を提供するために、定期的に留学体験発表会を開催している。平成 27 年度は 25 回開催した。一覧を表 3-7 に示す。

［表 3-7　平成 27 年度開催の留学報告会］

実施日	留学先	国名	参加者数
4 月 20 日	サンテティエンヌ・ジャン・モネ大学	フランス	13
4 月 22 日	アリゾナ大学	アメリカ	18
4 月 27 日	ミュンスター大学	ドイツ	18
5 月 11 日	ラス・アメリカス大学	メキシコ	1
5 月 18 日	スィンバーン大学	オーストラリア	9
5 月 20 日	プレスビテリアン大学	アメリカ	12
5 月 25 日	ディーキン大学	オーストラリア	6
6 月 1 日	南京師範大学	中国	10
6 月 8 日	アリゾナ州立大学	アメリカ	11
6 月 15 日	ラサール大学	フィリピン	6
6 月 29 日	マラヤ大学	マレーシア	7
7 月 6 日	メキシコ国立自治大学	メキシコ	15
7 月 13 日	アシュランド大学	アメリカ	7
10 月 19 日	ニューキャッスル大学	イギリス	6
10 月 26 日	サラマンカ大学	スペイン	8
11 月 2 日	シベリア連邦大学	ロシア	4
11 月 9 日	大連理工大学・台湾師範大学	中国・台湾	12
11 月 16 日	プレスビテリアン大学	アメリカ	12
11 月 23 日	トレド大学	アメリカ	6
11 月 30 日	オークランド大学	ニュージーランド	6
12 月 7 日	ラス・アメリカス大学	メキシコ	8
12 月 14 日	復旦大学	中国	1
12 月 21 日	カビラムビシー語学研修	フランス	6
1 月 18 日	ユーロセンターパリ校 ボルドー第 3 大学	フランス	7
1 月 25 日	セントラルランカシャー大学	イギリス	4

⑤ iCoToBa 利用者数の推移（平成 27 年 4 月～12 月）

iCoToBa 開設以降、利用者数は順調に増加している。4 月～12 月の外国語学部利用者数の推移を見ると、平成 25 年 5,340 人、26 年 6,125 人、27 年は 7,764 人である。iCoToBa が、外国人留学生との交流や外国語を学ぶ学生にとって欠かせない場所に育ってきている証左であると言えよう。外国語学部以外の学生については、平成 25 年、26 年はほぼ変動がなかっ

たが（平成 25 年 451 人、26 年 478 人）、本年度は、iCoToBa の科目の一部を全学部の学生に開放したこともあり、大幅に増加した（平成 27 年 719 人）。特に、留学生の利用者が増えており、iCoToBa が本学のグローバルキャンパスの中心的な存在として認知されていると評価できよう。

［表 3-8　平成 27 年度 iCoToBa 利用者一覧（外国語学部）］

平成 27 年 4 月~12 月（人数はのべ数）

入学年度	英米	フランス	スペイン	ドイツ	中国	国際関係	計
2015	427	431	1,317	594	263	399	3,345
2014	209	512	344	317	281	205	2,058
2013	221	20	866	373	84	194	1,698
2012	38	63	79	35	31	133	379
2011 以前	21	10	22	172	37	22	284
計	916	1036	2,628	1,491	696	997	7,764

［表 3-9　平成 27 年度 iCoToBa 利用者一覧（外国語学部以外）］

平成 27 年 4 月~12 月（人数はのべ数）

入学年度	日本文化		教育福祉		看護	情報	大学院	交換留学生※	計
	国語国文	歴史文化	教育発達	社会福祉					
2015	6	5	1	2	29	4	18	349	414
2014	1	3	0	3	0	15	19	223	264
2013	1	31	0	0	0	5	0	0	37
2012	0	0	0	0	0	2	0	0	2
2011 以前	0	0	0	0	0	1	1	0	2
計	8	39	1	5	29	27	38	572	719

⑥教材開発・授業実践報告

iCoToBa では、グローバル人材育成推進事業で目標としている能力養成を目指し、教育実践に基づく教材開発に取り組んでいる。平成 27 年度は、これらの成果として、1 冊の教材と 4 冊の授業実践に関する報告書を作成した。

［教材開発］

a）　Mag' iCoToBa #2（フランス語）

［授業実践報告書］

b) Student Essay Printed Volume（英語）

c) Haikuschrift Ⅱ（ドイツ語）

d) 地域ものづくり学生共同プロジェクト成果報告書（多言語）

e) 岡崎ホテルプロジェクト成果報告書（英語・中国語）

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

iCoToBa ガイダンスの継続的な実施や国際交流イベントの開催、他学部生への iCoToBa 授業の開放などにより、iCoToBa 利用者数は、順調に増加している（前年度比 26.8%増）。

iCoToBa 科目受講者数は、本年度は 1,639 人と昨年度と比べて減少しているが（平成 26 年度 1,803 人）、1 クラスあたり平均 11.4 人と語学授業としては理想的な人数で教育実践ができている。

このほか、異文化交流イベントを 13 回、留学報告会を 25 回開催するなど、定期的に iCoToBa に学生が集まるしかけを作った。また、これらのイベント告知や報告を manaba コミュニティや iCoToBa の Web サイトで発信したことも利用者増加に効果的だったと言えよう。

②改善すべきこと

本年度は、iCoToBa の受講者数も増え、一定の成果をみることができた。しかしながら、「グローバル人材プログラム」指定科目の受講者および合格者数は、言語や指定科目によりばらつきがみられ、本事業最終年度の目標達成（卒業学生の 50%がプログラム修了）の達成は非常に厳しいと言わざるを得ない。本年度は「グローバル人材プログラム」指定科目開講数を増やしたが、来年度はこれらを継続開講するとともに、修了学生の声を載せるなど、「グローバル人材プログラム」で学ぶメリットが見えるようにする。

また、来年度は事業助成終了後のプログラムの継続に向けて各科目の授業ノウハウの引継ぎを進めていく必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

次年度に注力する課題は 3 つある。

平成 28 年度の iCoToBa は、上記「改善すべきこと」に挙げた「グローバル人材プログラム」の受講者数・合格者数の増加を第 1 目標とする。本年度と同様、各言語の指定科目について、平成 27 年度の実績数値を基に、それぞれ目標人数を設定する。ガイダンスなどを徹底し、受講者増を目指す。

次に、第 2 外国語として履修している学生を対象とした授業や講座等を充実させ、「グローバル人材プログラム」の修了要件である複言語能力向上を目指す。

第 3 に、本事業助成終了後の iCoToBa での開講科目と利用方法について、検討を進める。本年度の利用者数は、1 日平均 60 人という目標値を達成したので、これをキープしつつ、外国語学部以外の学生にも iCoToBa の利用を拡げるためのイベントを開催する。

4. 学修支援

本事業では、学生の主体的な自律学習と効果的な語学能力養成をめざし、学修支援を行っている。第 4 章では、本事業で導入したふたつのシステム（e-Learning とインターネットポートフォリオ）、および、語学学習アドバイジングについて述べる。

4－1. e-Learning プログラム

1. 概要

平成 27 年度もこれまでと同様、学生の自律学習支援の一環として、6 種類の e-Learning コンテンツを採用している。

a) ALC NetAcademy 2 （アルク）
b) Rosetta Stone （ロゼッタストーン）
c) WORKOUT フランス語検定（スパーズ）
d) AVE Aula Virtual de Español (Instituto Cervantes)
e) WORKOUT ドイツ語検定（スパーズ）
f) 中国語検定過去問 WEB（高電社）

ロゼッタストーンの ID は外国語学部学生専用だが、その他のプログラムは、外国語学部生以外の、第 2 外国語の授業で各言語を学習する他学部の学生も利用可能である。なお、ALC NetAcademy 2 については、希望する職員全員に ID を配布しており、職員研修の一環としても活用されている。

2. 平成 27 年度の目標

学科・専攻における e-Learning ガイダンスを実施し、学生の学習動機付けを高める。また、学科・専攻で、利用状況について把握するとともに、効果的な利用方法について、正課科目での活用を含め、検討・実施する。iCoToBa 語学学習アドバイザーによる e-Learning 利用促進のための講座・イベントを策定、実施する。

3. 平成 27 年度の実績

①利用状況

平成 27 年度の利用状況は以下のとおりである。

［表 4-1　e-Learning 利用状況の推移］

コンテンツ名	配布 ID 数		
	平成 25 年度	平成 26 年度	平成 27 年度
ALC NetAcademy 2	2,856	3,911	3,310
Rosetta Stone	794	363	374
WORKOUT フランス語検定	689	851	305
WORKOUT ドイツ語検定			
AVE Aula Virtual de Español	325	216	319
中国語検定過去問 WEB	503	445	597

Rosetta Stone は平成 26 年度より配布可能 ID 数が半数になった。また、ALC NetAcademy 2 と WORKOUT については、平成 27 年度に実際には使っていない ID を整理した。このため、平成 26 年度に比べて配布 ID 数が減少している。

②ガイダンスおよび学生サポート

新学期に開催される学科・専攻別新入生ガイダンスでIDの配布とe-Learningに関する説明、使い方に関するリーフレットを配布した。その後、第2回iCoToBaガイダンス（第3章参照）でパソコン操作も含めた講習を実施し、新入生全員が講習を受けた。また、4月～5月に5回、自由参加のALC NetAcademy 2とロゼッタストーンのガイダンスを実施した。これに加え、マンツーマンで質問できるe-Learningランチタイムセッションを週3回設け、個別対応体制も整えた。第2外国語のIDについては、5月末までに教養外国語科目の授業内でIDとマニュアルを配布し、周知を徹底した。

③各言語プログラムに関する利用状況

［英語：ALC NetAcademy 2・ロゼッタストーン］

ロゼッタストーンについては、学科・専攻により学年指定配布か希望者配布か、方針が異なる。英米学科では、希望者のみに配布しているため、アメリカ英語レベル 1 については、履修率が高い。しかし、レベル 5 まで達成している者は、かなり減り、20%に満たない。また、アルクの利用率について、前後期で比較すると、前期のみより、後期も含めた数値のほうが全般的に増加している。特に外国語学部以外での利用率が 9.7%から 15.1%に上がっている点に注目したい。これは、後期より、アルクの e-Learning プログラムを導入した教養英語科目が複数存在することが理由であると考えられる。

なお外国語学部の中では国際関係学科において、アルクの利用率が最も高く、またロゼッタストーンの学習時間が最も長いという事実は、「リーディング」（1 年生）ないしは「オーラルコミュニケーション」（2 年生）の試験の一部として利用していることを反映している。

利用率をあげるためには、授業の一環として e-Learning プログラムを取り入れるべきかどうかは今後議論すべき点になろう。また、休学して留学している学生からの使用希望が出されたが、留学中のほうが語学学習の動機づけが高く、時間をさくこともできるため、これらの学生へのアカウント配布もこれから検討する必要があるかもしれない。

［フランス語：WORKOUT フランス語検定］

本システムの利用率はあまり高くないが、本コンテンツは利用者の要望に合わせてカスタマイズすることが可能であるため、内容をさらに精査し、より良いものに仕上げ、今後の合格率上昇をはかる。平成 27 年度の秋季試験（受験料補助による団体受験）の一次試験の合格率は、準 1 級が 52.0%、2 級が 100%、準 2 級が 76.7%、3 級が 61.1%で、昨年度と比して大幅に上昇した（平成 26 年度団体受験の一次試験の合格率は、準 1 級が 19.4%、準 2 級が 60.0%、3 級が 13.0%）。

（参考：全国の合格率は、準 1 級が 25.4%、2 級が 35.7%、準 2 級が 62.5%、3 級が 59.8%）

［スペイン語：AVE Aula Virtual de Español スペイン語オンラインコース］

平成 27 年 5～6 月にかけて、スペイン語圏専攻1年生、全学共通外国語科目「スペイン語 II」履修者に対し、計 5 回ガイダンスを実施した。1、2 年生の語学の授業によっては AVE を課題として指示しているクラスもある。とくに、長期休業期間に既習事項の復習や、聴き取り能力を伸ばすには本オンラインコースは効果的である。秋の DELE 対策としても使用されてきたが、4 年生の使用率が低いことが課題である。

［ドイツ語：WORKOUT ドイツ語検定］

2 年生以上の学生にプログラムの周知が進んでいる一方で、実際に上位級プログラムの学習を終えた学生からは、「問題数が少ない」との指摘もある。利用者の要望に合わせてカスタマイズすることが可能なコンテンツであるが、改訂には至っていない。また、独検の受検者数確保の観点から、就職活動の時期変更により 4 年生の受検者が減少しているという実情も考慮し、学習と受検のバランスをとる必要がある。

平成 27 年度春季の学内独検受検者の合格率は、2 級が 69%、4 級が 100%で、昨年度と比して大幅に上昇した（平成 26 年度 2 級が 33%、3 級が 100%。）

（参考：全国の合格率は、2 級 46%、4 級 78%である）

［中国語：中国語検定過去問 WEB］

11 月の検定団体受験結果を含めての合格状況は以下の通りである。専攻 2 年生の 3 級合格は約 96%（前年度 77%）、専攻 4 年生の 2 級以上合格者は約 56%（前年度 36%）。

特記すべきは、本事業の目標以上である準 1 級合格者が若干名でてきたことである。これは学生がモチベーションをもって、より高い志で学習を進めた成果である。これらの学生は留学先や自宅で過去問 Web に取り組んでいる。今後も e-Learning 学習の利用を推進していけば、よりよい結果が見込めると考えられる。

なお、e-Learning と専攻授業との関連づけ（＝e-Learning の段階的な学習を単位取得の

要件とする）に関しては、上記の国際関係学科（ロゼッタストーン/アルク・英語）、ならびにドイツ語圏専攻（ロゼッタストーン・ドイツ語）の例が挙げられる。

たとえばドイツ語圏専攻では、前年度に続き、1 年生の専攻語学科目の後期の単位取得要件として、ロゼッタストーンの学習を義務づけている。1 年生の夏季にドイツ語圏留学を体験した学生にとっては、後期からのプログラム利用は帰国後のフォロー的側面をもつ。いずれせよ、後期の授業を受ける1年生にあっては、留学経験の有無にかかわらず、ドイツ語学習をらせん状に補完する手段としてロゼッタストーンが活用されている。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

e-Learning に関する新年度ガイダンスを徹底したことにより、学生への周知および、配布 ID 数は全般的に伸びている。また、教員への周知も進み、教養外国語科目においても、e-Learning を課題に取り入れたり自習用教材として勧められている。

今年度の本学での語学検定合格率を見ると、各言語とも増加している。これは、すべて e-Learning 学習の効果であるとは結論づけられないが、課外で e-Learning にも取り組む熱心な学生が、少しずつ増えてきているのではないかと手ごたえを感じている。

②改善すべきこと

学生が外国語を学ぶ動機は、各種検定試験対策、留学のための個々人の準備を始めとして多岐にわたるため、既存の専攻の文法・講読科目、会話やコミュニケーションを重視した授業との相互作用に対して、授業担当者・管理者には準専門的、分析的な視点が求められる。本学で導入されている e-Learning プログラムは有益なものであるが、利用者にとっては一定のニーズがある一方で、大学での専門的知見を深めるためには物足りないなどの、内容面での「限界」もある。それらの e-Learning の特質を客観的に把握した上で、今後は正課科目へと移行するグローバル人材育成プログラムの内容と関連づけながら吟味していく必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

次年度も、本年度と同様新年度の利用ガイダンスを徹底する。また、e-Learning の利用率を高めるために、正課との結びつけについて、各学科・専攻で検討し、効果的な実施につなげる。

また、来年度は、文部科学省による本事業助成が終了する。平成 29 年度以降の本学のグローバル人材育成推進事業の継続に向け、e-Learning を含め現行の事業内容の効果測定を行う。e-Learning については、現在採用している 6 プログラムの使用状況などを測定し、平成 29 年度に採用するプログラムを決定する。

4－2. インターネットポートフォリオ

1. 概要

本事業は平成25年2月よりポートフォリオシステム「manaba folio（以下、manaba）」を導入し、学生の自主的な学びを促すツールとして活用している。manabaはラーニング・ポートフォリオの電子版であり、本学のほか、日本の約200の教育機関で採用されている（Wikipedia調べ。データは平成25年3月末時点のもの）。本学におけるmanaba の活用事例は以下の通りである。活用事例については基本的に前年度から大きな変更はない。

［学修記録］

a）外国語学部「グローバル人材プログラム」の履修記録

b）学習成果の記録

［ピア学習の促進］

c）授業での課題・報告へのピアフィードバック

d）インターネット上で議論を深める

［教材提示・留学・国際交流情報の提供］

e）配布プリント、音声・映像教材の提供

f）iCoToBa、国際交流室の情報発信

［コミュニティの形成］

g）学生の組織化の促進

［教職員の情報共有］

h）グローバル人材育成推進室会議およびiCoToBa委員会の会議資料等の共有

2. 平成27年度の目標

iCoToBa 科目や正課授業における運用の促進、留学中の学生への指導や生活支援のための活用についてはすでに実施されてきたので、今年度の目標として、ポートフォリオのさらなる活用促進を目指す。また、学生の自律的な学びの場として、あるいはキャリア支援活動の一環として manaba 内のコミュニティを積極的に活用し、継続的な学習とその記録の実現を図る。

昨年度、教員有志により本学での外国語学習の到達目標案作成のためのワーキンググループを立ち上げ、到達目標案をまとめた。今年度はこの到達目標案の内容を吟味し、本学のウエブページでの公開を目指すと同時に、学生が学びを通して自らの成長を自覚できるようCan-doチェックリストに記録をつけるためのシステム構築を実現する。

3. 平成 27 年度の実績

① iCoToBa ガイダンスによるオリエンテーション

新入生を対象に、ポートフォリオの特徴や利点についてガイダンスを実施した。実施内容については、第 3 章を参照いただきたい。

②留学支援ツールとしての活用

iCoToBa で開講している「リサーチ・発信プロジェクト②（留学中科目）」で manaba を利用し、レポートを提出させ、それに対するフィードバックを実施した。また、留学予定の学生に対する事務連絡および、事前準備などの情報提供への活用と、留学中の学生との連絡ツールとして活用している。本年度からは、リサーチ発信プロジェクト②を履修している学生は、manaba コミュニティに定期的に報告を送ることになっており、留学中の学修支援だけでなく、留学準備中の学生にとっても、貴重な情報源となっている。（テーマは以下の通り。1～4 か月目：大学生活について、5～8 か月目：日本との比較、社会、政治など、9 か月目：留学での学び）

③ manaba のコミュニティの活用

平成 28 年 1 月現在、開設されたコミュニティは 81 に達している。昨年度と同様に、「留学（海外旅行もあり！）について話そう！」「みんな集まれ iCoToBa 広場」への学生の参加が続いている。参加者数については、「留学（海外旅行もあり！）について話そう！」では、昨年度の 363 人から 503 人に、「みんな集まれ iCoToBa 広場」は 269 人から 305 人に、それぞれ増加している。現在留学中の学生による現地からの情報発信が留学を希望する在学生にとっておおいに役だっているようである。

さらに、キャリア支援活動の一環としてコミュニティが有効活用されていて、学生たちが自らコミュニティを開設し、情報交換や作業を行っている。

④ manaba の活用事例の報告

本学グローバル人材育成推進室による manaba の活用事例報告を 2015 年度の学部 FD 研究会においておこなった。FD 研究会のテーマは「留学支援・教育支援・障がい者支援ツールの研究」である。詳細は以下の通り。

日時：　平成 28 年 1 月 27 日（水）
場所：　本学長久手キャンパス H005 教室
報告者：宮谷 敦美（グローバル人材育成推進室副室長／国際関係学科）
題目：　manaba を活用した学修支援－留学中の支援を中心に

このほか、株式会社朝日ネットが発行している『manaba 活用ブック vol.3』に「グローバル人材プログラム」科目「地域ものづくり学生共同プロジェクト」の事例が掲載される予定である。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

留学関係のコミュニティの参加者数増やキャリア支援科目関係のコミュニティ開設が相次いでいるという事実から、manaba がとりわけ留学支援やキャリア支援に欠かせないツールの役目を果たしていることがわかる。

学修支援については、主に「マイコース」において教員が実施している。教員が「マイコース」にて登録している科目において、レポート課題の提出や掲示板を利用した情報発信が行われている。その科目の履修登録をしている学生はその内容を閲覧できるが、教員間でお互いの「マイコース」の内容を閲覧することはできないため、各教員の「マイコース」活用の実態は必ずしも明らかではないが、レポート課題提出の場としては多く利用されているようである。

「マイコース」経由で課題を出し、学生が添付ファイルで書きかけの卒論やレポートの原稿を添付で送付すると、教員がチェックしたのちに学生に添付ファイルで返却することができる。このような形で執筆済みの原稿案を「マイコース」に残しておくと、万が一のアクシデントなどによって学生がパソコン内の書きかけのデータを失ってしまう事態が生じたとしても、少し古いバージョンの原稿案を「マイコース」から取り込むことができる。

manaba では課題提出のための特定のフォーマットを作成し、学生がそれに記入して送付するという提出方法も選択できる。本学における実践の一例は多読課題の提出である。

レポート提出のツールとして manaba は次のような利点を持つ。提出がペーパーレスで実施できる。提出締切日時を過ぎると課題受付は一切できなくなるので、学生に締切を厳守させるのに役立つ。設定次第で受講生どうしが提出済みの課題の内容を閲覧できる。外国語リーディング科目の多読課題においては、この特性を利用して他の学生が勧める本のタイトルと感想文を読むなど、学生間の情報共有を図ったクラス運営も増えてきている。

②改善すべきこと

コミュニティの開設数が増加したのは喜ばしいが、既存のコミュニティの中で活動がほぼ停止しているように思えるものもある。特に管理者が卒業したコミュニティについては、管理者を交代できるようにしたり、閉鎖して別の場所に保存するなどの措置が進んでいない。

また、manaba 利用についての教員間の情報共有は十分に行われているとは言えない。ポートフォリオを利用しやすい科目とそれほどでもない科目があると思われるが、他の教員の活用例についての情報を得る機会を作り、PBL 型授業、ピア・ラーニングの教育実践共有を図る。

Can-do チェックリストについては、担当教員の在外研究と産休期間が重なり、今年はほとんど進めることができなかった。次年度は、文部科学省の助成が終了するため、平成 29 年度以

降に、manaba システムを継続するか否か決定する。そのためにも、現在教員がどのように manaba を利用しているか、また学生の manaba 使用に関するアンケートを実施するなど状況を把握する必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

平成 27 年度内の実現を目標としていた、外国語学習の到達目標案のウェブページ公開および Can-do チェックリスト用のシステム立ち上げを達成することができなかったので、次年度の実現を目指す。

キャリア支援活動におけるポートフォリオ活用が成果を上げているので、この分野での活用促進を積極的に図る。

インターネットポートフォリオの活用は学生の自律的な学びの促進につながると考えられるが、その証左となるデータを確実に集める。本学の授業や課外活動での利用実績および実例の蓄積や教員・学生の manaba 使用に関するアンケート等を実施し、今後の本学でのラーニング・ポートフォリオのありかたを明らかにする。

４－３. 語学学習アドバイジング

1. 概要

外国語学習のサポートを目的として、語学学習アドバイザー教員が iCoToBa に常駐し、アドバイジング業務を担っている。主な業務は次の 2 点である。①海外留学準備としての外国語学習および留学後のフォローアップ、②TOEIC、IELTS、TOEFL などの検定試験対策に関するアドバイジング。

前期、後期それぞれの週 10 コマ、夏、春の長期休暇中の 50 コマの語学検定対策を中心とした授業に加えて、カウンセリングによる学生対応を実施するため、学期中における週 6 回のアドバイジングアワーおよび夏と春の長期休暇中の個別カウンセリングを設定している。

2. 平成 27 年度の目標

次の 3 点に関わるアドバイジングにより、学生の語学学習に対する意欲づけおよび語学力向上を図る。

まず、留学に必要な語学力に関するアドバイジングである。英語圏留学に際して、学部留学希望者は英語力の証明として TOEFL または IELTS のスコア提示が留学先より求められる。語学留学ではなく、大学学部留学を実現させたいという強い希望をもった学生を対象にカウンセリングと、必要に応じて個人セッションを実施する。

次に、グローバル人材プログラム修了要件の一つに TOEIC などの検定試験のスコアがあり、学生の外国語学習の動機づけのひとつとなっている。また、就職活動時に語学力の証明として企業から TOEIC スコアを求められることも多く、TOEIC 受験前に短期間で英語力を伸ばしたいという学生ニーズも高い。このような学生の相談に対応する。

最後に、e-Learning 活用の推進である。iCoToBa の Self Study Space に設置されている 14 台のパソコンを用い、効果的な利用方法を学生に紹介する。また英語のエッセイライティングについて、インターネットを活用した添削方法を紹介し、外国語学習における学生の自立学習を促す。

3. 平成 27 年度の実績

留学希望の学生の学習歴やテストにおける弱点などを把握したうえで、個別面談を中心としたアドバイスを行ない、きめ細かい対応を行なった。具体的なアドバイス内容としては、問題集やスピーキングとライティングの学習方法の紹介に加え、それぞれのテストの問題構成や採点方法ついても解説している。その際、学生の要望を受け、模擬試験問題などの過去問を用いて攻略方法を重点的に解説した。また、学生のスピーキング力向上のため、ネイティブ教員とのセッションのコーディネートを行なった。

加えて、中学校および高等学校の英語教員採用試験の際にも TOEIC スコアが重視されるため、就職試験対策の一環として TOEIC 受験に対するアドバイジングの時間をとった。このような場合、総合的な語学力強化よりむしろ戦略的かつ集中的にスコアのアップを達成するようなアドバイスを行なった。

なお、学生の自立学習能力養成のために、アドバイジングアワーの中で、e-Learning を積極的に活用するように働きかけた。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

11 月から 12 月にかけて、TOEIC 直前対策のための短期集中型の問題演習講座を開講した（TOEIC last minutes）。このような検定対策の授業や講座に参加した学生は、スコアに大きな改善がみられた。

留学準備として TOEFL や IELTS を受験する際のスピーキングセクションおよびライティングセクションではリスニング力が大きく関わってくる。そのため、聞く能力を高める学習方法として、シャドーイングの指導を行なった。加えて、長期休暇中の個人セッションでは、学生のニーズに対応することで、試験でのスコアアップへとつなげた。

②改善すべきこと

iCoToBa では e-Learning を自立学習の手段と位置づけ、検定試験対策および多言語習得のためのプログラムが用意されているが、TOEIC 受験対策のアルクネットアカデミー2 の利用実績が十分に伸びていない。利用方法や効果を定期的かつ継続的に学生に知らせ、意識を高めたい。

外国語学習をサポートする上で、多文化を理解することや留学先でのコミュニケーションのとり方などを身につけることは、留学のための試験勉強と同様に大切である。学生には、外国人教員と自由に会話することで、外国語によるコミュニケーション能力の強化ができるよう iContact の時間を設定している。しかしながら、利用者および対応教員に偏りがみられ、改善の余地が残されているという状況である。iContact の時間設定を工夫することも必要だと考えられる。

5. 平成 28 年度に向けての方策

本年度に開催したさまざまな講座により、検定対策の授業の効果が学生の間で認知され、受講者が増加傾向にある。平成 28 年度は検定対策だけでなく、外国語学習全般に対する意欲喚起や学習方法に関するカウンセリングを積極的かつ意図的に進めていきたい。また、他学部生に対しての対応も強化していきたい。

5. 語学検定

1. 概要

本学の「グローバル人材育成推進事業」の目標の一つとして、複数言語の習得をあげ、その指標として語学検定を用いている。それぞれの目標は、p.9 の「表 2-2 グローバル人材プログラムで定めた外国語達成目標」を参照いただきたい。

語学力評価の方法として、英語は TOEIC を導入し、年に 1 回外国語学部全学生を対象に学内団体試験を実施している。他言語（ロシア語、ポルトガル語、韓国朝鮮語、日本語を除く）は、専攻言語とする学生には 2 年次と 4 年次（言語により 3 年次）、第 2 外国語とする者には、2 年次または 3 年次に実施している。これらの試験実施は、本事業予算を用いており、継続的な定点測定を可能にしている。

2. 平成 27 年度の目標

本事業の「卒業時の外国語力スタンダードを満たす学生数」の平成 27 年度の目標値は、100 人と設定している。その内訳は、英米学科・国際関係学科 31 人、ヨーロッパ学科 57 人、中国学科 12 人である。

3. 平成 27 年度の実績

本報告書執筆段階では、DELE の試験結果が出ていないため、本年度の DELE 結果は反映されていない。また、本年度は、外国語学部学生全員に対して、語学検定合格に関する調査を行なったが、この結果についても、合格証書等で確認していないものは、今回の数値には含んでいない。

①複数言語能力スタンダード達成者数

複数言語能力スタンダードを満たす学生数の推移を表 5-1 に示す。

［表 5-1　複数言語能力スタンダード達成者数］

	英米・国際	ヨーロッパ	中国	合計
平成 25 年度卒業者	2	3	1	6
平成 26 年度卒業者	0	8	3	11
平成 27 年度卒業者	7	8	0	15
平成 27 年度在校生	23	8	2	33

現在把握している数値では、複数言語能力スタンダードについては、昨年度を下回る数値であり、目標値には遠く及ばない。

②各言語の結果

a) TOEIC

平成 27 年度の学科・専攻、入学年度(学年)別の TOEIC 平均点と、目標得点達成人数をそれぞれ表 5-2、表 5-3 に示す。

[表 5-2　平成 26・27 年度 TOEIC 平均点](学内団体受験結果のみ)

学科／入学年度	2015 年度	2014 年度	2013 年度	2012 年度以前
英米	647.7	707.4 (622.9)	714.8 (685.1)	753.1 (663.4)
国際関係	594.7	634.3 (565.6)	629.4 (597.9)	689.1 (636.7)
ヨーロッパ	517.9	550.0 (509.1)	600.2 (546.4)	627.7 (552.7)
中国	474.5	549.7 (499.0)	523.8 (498.3)	557.5 (471.2)

(　　)内は平成 26 年度の平均点

[表 5-3　平成 27 年度 TOEIC 目標得点を達成した学生数](学外受験結果を含む)

学科／入学年度	2015 年度	2014 年度	2013 年度	2012 年度以前
英米・国際 (TOEIC800 点)	15	27	29	68
ヨーロッパ・中国 (TOEIC730 点)	6	13	13	39

目標値に達成した学生数の少なさは否めないが、平均点は前年度と比して着実に伸びてきているのがわかる。また、1 年次の TOEIC 得点も年を追うごとに高くなっており、本事業により、語学力が高い(あるいは語学学習に熱心な)学生が本学に入学していることも示唆できる。

b) 実用フランス語技能検定

平成 27 年度の実用フランス語技能検定の目標級達成人数は表 5-4 のとおりである。卒業時の目標についての達成率は低いが、前年度と比べるとその数値は全て大幅に改善されている。

［表 5-4　平成 26･27 年度実用フランス語技能検定目標級を達成した学生数］

	受験級	達成者数	達成率
平成 27 年度卒業者（新カリのみ）	準 1 級	7	14.0% (0.0%)
2011 年・2012 年度入学（4 年生） 卒業者含む		18	29.5% (13.7%)
2014 年度入学 （フランス語圏専攻 2 年生）	準 2 級	29	59.2% (46.2%)
2014 年度入学フランス語Ⅱ受講者 （フランス語圏専攻以外）	3 級	11	42.3% (9.7%)

（　　）内は平成 26 年度実績

c) DELE（外国語としてのスペイン語検定試験）

DELE（外国語としてのスペイン語検定試験）は、平成 27 年度の結果がまだ出ていない。平成 26 年度の目標レベル達成人数は表 5-5 のとおりである。卒業時および第 2 外国語の目標についての達成率は低いが、専攻言語の 2 年次の達成率は、まずまずである。スペイン語については、2014 年度に DELE のレベル見直しに伴い、目標レベルを B2 から B1 に変更したため、平成 25 年度との比較ができない。

［表 5-5　平成 26 年度 DELE 目標レベルを達成した学生数］

	レベル	達成者数	達成率
平成 26 年度卒業者（新カリのみ）	B1	9	18.0%
2010 年・2011 年度入学（4 年生） 卒業者含む		11	20.8%
2013 年度入学 （スペイン語圏専攻 2 年生）	A2	25	47.2%
2013 年度入学スペイン語Ⅱ受講者 （スペイン語圏専攻以外）	A1	11	14.1%

d）ドイツ語技能検定

平成 27 年度のドイツ語技能検定の目標級達成人数は表 5-6 のとおりである。本年度より、ドイツ語圏専攻の受験時期を 2 年次秋から 3 年次春に変更したため、3 級については、本年度の数値がない。目標値には達していないが、昨年度と比べどの数値もかなり上昇している。

［表 5-6　平成 26･27 年度ドイツ語技能検定目標級を達成した学生数］

	受験級	達成者数	達成率
平成 27 年度卒業者（新カリのみ）	2 級	21	42.0% （14.0%）
2011 年・2012 年度入学（4 年生） 卒業者含む		23	42.6% （37.3%）
2013 年度入学 （ドイツ語圏専攻 2 年生）	3 級	－	（94.7%）
2014 年度入学ドイツ語Ⅱ受講者 （ドイツ語圏専攻以外）	4 級	1	33.3% （65.4%）

（　　）内は平成 26 年度実績

e）中国語検定

平成 27 年度の中国語検定の目標級達成人数は表 5-7 のとおりである。本年度より、中国語Ⅱ（第 2 外国語）受講者の受験時期を 2 年次秋から 3 年次春に変更したため、本年度の数値がない。新カリ卒業者は、留学経験がない学生がほとんどであり、目標達成率が低い。2 年次については、目標を大幅に超えている。

［表 5-7　平成 26･27 年度中国語検定目標級を達成した学生数］

	受験級	達成者数	達成率
平成 27 年度卒業者（新カリのみ）	2 級	14	28.0% （50.8%）
2010 年~2012 年度入学（4 年生） 卒業者含む		24	34.3% （32.8%）
2013 年度入学 （中国学科 3 年生）		2	3.7%
2014 年度入学 （中国学科 2 年生）	3 級	46	88.5% （63.2%）
2014 年度入学中国語Ⅱ受講者 （中国学科以外）	3 級	－	（0.0%）

（　　）内は平成 26 年度実績

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

本事業の一番課題となっている外国語能力については、各年度の目標値には遠く及ばないが、年を経るにつれて、着実に数値が改善されている。特に専攻言語については、達成率が着実に伸びてきている。

昨年度検討した受験時期の変更により、本年度は数値が団体受験をしていない試験もあるため、来年度の結果を待たなければならないが、各言語についての数値は事業開始時と比べ大幅に伸びることが期待される。

②改善すべきこと

複数言語の目標達成についてはなお大変厳しい状況である。iCoToBa では第 2 言語履修者対象の語学授業や検定対策授業も開講しているため、これらの授業や e-Learning の活用について、学生に働きかける必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

来年度末には本事業の助成が終了する。今年も行なった試験前対策を含め、学生への受験の働きかけと共に、本事業効果測定のために、学生が学外で受験した外国語試験結果についても、確実に情報を集め情報精度を高め、本事業の効果測定を行なう。

6. 留学および支援体制

6－1. 学術交流協定大学の協定締結と単位認定留学

1. 概要

本事業は、外国語学部学生の 60%に学士課程教育の一環として単位認定を伴う留学を経験させ、グローバル社会に通用する資質を備えた人材として輩出することを主要目標として挙げている。公立大学である本学の学生には、海外留学の費用について大きな経済的負担であると感じる者も多い。そこで、より多くの留学を実現させるために、海外大学との相互授業料不徴収での学生交換と、奨学金給付による学生派遣を目指し、学術交流協定の締結と留学先大学での適切な教育、実質的な単位互換制度の整備を進めている。また、学生に対しては、留学を視野に入れた 4 年間の学修計画と履修指導が不可欠であり、そのために入念な留学前カウンセリングと留学後の学修計画とキャリア支援の体制を整備している。しかし、これらの仕組みを実質的に機能させていくためには、教職員の協働による組織的な国際交流業務が不可欠である。また、学生の留学および履修に関する動向の情報収集とその分析に基づいた留学支援体制の構築も必要である。

2. 平成 27 年度の目標

協定大学と交換プログラムの運営などについて協議をしながら、受け入れ、送り出しの実績を重ね、連携を深めていく。

平成 24 年度後半以来、それまで一部の専攻言語による短期集中講座に限られていたショートプログラムの拡充がここ 3 年で進み、英語による留学を希望する学生のニーズを順次満たしてきた。それでも、年々留学需要の増える状況の中で、上述した英語圏の協定の下での授業料不徴収あるいは奨学金給付を伴う短期留学機会についてはまだ需要があるため、引き続き北米圏をはじめとする英語圏大学との協定拡充を目指す。

3. 平成 27 年度の実績

①新たに学術交流協定を締結した大学

平成 27 年 12 月 1 日現在、学術交流協定を締結した海外大学・機関は、26 年度より更に 3 大学増えて、15 か国・地域 46 大学・機関となった。また、英語圏大学（協定校含む）との間で、学生交換を含む新規協定の締結や既存の協定内容の拡充を継続協議中である。

［協議中の大学］

a. 新規交流協定

・テイラーズ大学（マレーシア）
・ニューカッスル大学（オーストラリア）
・西オーストラリア大学（オーストラリア）
・リューネブルク・ロイファナ大学（ドイツ）
・CEV サンパウロ大学（スペイン）

b. 協定大学との現行プログラムの拡充

・ディーキン大学（オーストラリア）
・スインバーン工科大学（オーストラリア）
・アシュランド大学（米国）

②単位認定留学者

協定大学への単位認定留学は、平成 27 年度、1 年未満交換留学生 43 名、1 年未満派遣留学 21 名であった。ショートビジット(SV)は 83 名で、平成 26 年度の 141 名（表 6-1）から 58 名の減となり、奨学金受給者減がほぼ反映された形となった。本年度の夏期・春期ショートビジットの実績を表 6-2 に示す。

［表 6-1　平成 26 年度　ショートビジット実績］

	留学先	人数	合計
夏期	イーストアングリア大学（イギリス）	29	84
	ミュンスター大学（ドイツ）	29	
	ポートランド州立大学（米国）	2	
	サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学（スペイン）	6	
	アリゾナ州立大学（米国）	3	
	スタンダール・グルノーブル第 3 大学（フランス）	6	
	サンテティエンヌ・ジャン・モネ大学（フランス）	3	
	華東師範大学（中国）	6	
春期	ニューヨーク州立大学フレドニア校（米国）	7	57
	ラス・アメリカス大学（メキシコ）	6	
	スインバーン工科大学スインバーンカレッジ（オーストラリア）	2	
	ディーキン大学（オーストラリア）	10	
	アリゾナ州立大学（米国）	3	
	華東師範大学（中国）	8	
	ミュンスター大学（ドイツ）	18	
	サンテティエンヌ・ジャン・モネ大学（フランス）	3	
合計			141

［表 6-2　平成 27 年度ショートビジット実績］

	留学先	人数	合計
夏期	セントラルランカシャー大学（イギリス）	5	37
	ミュンスター大学（ドイツ）	10	
	ポートランド州立大学（米国）	7	
	サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学（スペイン）	5	
	アリゾナ州立大学（米国）	5	
	スタンダール・グルノーブル第 3 大学（フランス）	5	
春期	ニューヨーク州立大学フレドニア校（米国）	8	46
	ラス・アメリカス大学（メキシコ）	9	
	スインバーン工科大学スインバーンカレッジ（オーストラリア）	1	
	ディーキン大学（オーストラリア）	5	
	アリゾナ州立大学（米国）	2	
	ミュンスター大学（ドイツ）	7	
	華東師範大学（中国）	14	
合計			83

③日本留学支援機構（JASSO）からの奨学金受給者

［表 6-3　平成 27 年度日本留学支援機構（JASSO）奨学金受給者実績］

種別	人数
1 年未満交換留学	31
1 年未満派遣留学	21
ショートビジット	46
合計	98

④国際交流室による留学支援

a. 留学相談

27 年度より専任教職員 3 名の間で予約面談の時間帯とその他の時間帯を明確にし、個々の面談希望学生に十分な時間を確保した上で、良質な留学アドバイジングを行なっている。複数回訪れる学生も多く、継続的なフォローを可能にしている。国際交流室では、所属の教員と職員との相談体制を取っており、担当者の相談可能内容（英語圏留学、奨学金等）も具体的に明記し、学生が相談内容により、適切な相談相手を決められるように情報を提供している。

b. 閲覧資料

協定大学のカタログ・パンフレット類や、各国大学案内、語学能力測定試験（TOEFL 等）対策テキスト、各種留学雑誌など、多岐に渡る留学情報を提供している。また、各国代表国際教育交流窓口とのネットワークを活用し、最新の情報を提示できるようにしている。

c. その他

限られたスタッフで日々の留学生支援業務を効率的に行うために、危機管理ハンドブック等国際交流室作成の資料を順次整備し、学生の情報収集の一助として活用している。また、グローバル人材の育成および輩出に鑑み、海外留学の就活・キャリアにおける有用性についてキャリア支援室との間で共同セミナーを開催した。ホームページ英語版の作成も開始した。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

本事業の一環として拡充してきたショートプログラム（SP）に参加した学生が、引き続き、上級学年次に、より長期の留学や多言語圏への短期研修に向かうケースが年々増え、SP が複数留学への動機づけ・呼び水としての効果が表れている。

また、1 年生及び 2 年生の全員に対する留学アドバイジングを実施し、留学説明会の参加者数や就学に関する相談件数が各々増加し、留学に対するモチベーションの向上が認められる。TOEFL 等留学要件を満たすべく語学運用能力の向上に早めに取り組む学生が増えてきている。

「単位取得を伴う海外留学経験者数」の本年度目標値は 85 人であったが、目標値を越えて達成した。

②改善すべきこと

協定大学の締結とその結果の単位認定留学が、依然スペイン、メキシコなど地域的に偏りがある。学生の希望が多い英米圏での協定大学については、イギリスについては増加したが、アメリカ、オーストラリアなどではまだ不十分である。

5. 平成 28 年度に向けての方策

北米圏、オセアニア圏等英語圏大学との学生交換を視野においての協定締結および既存プログラムの拡充を優先的に取り組む。この一環として、北米、欧州およびアジア太平洋地区で開催される国際教育会議の複数の年次大会に教職員を派遣し、協定大学を含む海外大学との間で交流可能性や時期について具体的に協議する。昨年ブース出展した北米の

NAFSA に引き続き出展し、現地での協議や連携強化の拠点として活用する。上記会議には事務職員が SD 活動として参加することで、本学教職員の国際化を図る。

＊ショートプログラム(SP)：　留学期間 3 ヶ月未満
　ショートビジット(SV)：　　留学期間 3 ヶ月～1 年未満

６－２. 留学アドバイジング

1. 概要

本事業では、外国語学部学生の留学の 60%を単位認定大学留学とし、留学前→留学中→留学後の各段階で必要な能力を育てる体系的プログラムを実施している。このプログラム実施には、留学前に留学やグローバル人材への強い動機づけを行い、1、2 年生で「留学前プログラム」を履修させ、留学中は明確な目的意識を持った上で学修させ、帰国後は「帰国後プログラム」によってフォローするというアドバイジングが必要である。そのため、平成 25 年 4 月から iCoToBa の留学アドバイザー教員と国際交流室が協力して留学アドバイジングを行っている。

2. 平成 27 年度の目標

3 年目を迎えた留学アドバイジング業務は、スタート時の学生が大量に留学するので、そのフォローをするため国際交流室のスタッフ、学部教員と協力して manaba 上での指導を強化する。在学生と留学中の学生たちとの情報交換のパイプを太くすることで、より正確な情報を在学生に提供することもめざす。留学相談は、ひとりひとりと十分な相談に乗れるよう、留学希望者に絞って予約制で行う。彼らの希望とニーズを把握し、より多くの学生が質の高い留学をするよう啓蒙する。

a) 入学時のオリエンテーションで、学士留学の意義と効果について啓蒙する。
b) 授業の合間の休憩時間を利用した週 3 コマ（ランチタイムを含む）の留学アドバイザーによる恒常的留学相談アワーを設置する。
c) 留学体験者による具体的な留学体験に触れる機会を提供し、アドバイジングを多角的に行う。
d) JASSO 奨学金以外の外部奨学金に積極的に応募する学生を支援する。

3. 平成 27 年度の実績

平成 26 年度までに、外国語学部学生の留学用個人カルテを作成したので、それを利用して何度も相談に来る学生の動きを把握し、適切なアドバイスを与えている。

また、留学に関する意向を聴取することで、本学の学生たちの傾向を把握し、今後の協定大学締結のための基礎資料としても活用できるデータベースとなった

このほか外部奨学金の「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」に本年度は、3 名が採択された（平成 26 年度・第 1 期から累計 6 名）。外国語学部単独でみると、この採択数は注目すべき数字である。このプログラムにチャレンジする学生と採択された学生との懇談会の開催や、学部教員による個別指導が功を奏していると言えよう。

本年度は、16 回の留学説明会を開催した。表 6-4 に示す。

［表 6-4　平成 27 年度開催留学説明会］

実施日	留学先	国名	参加者数
4 月 21 日	ポートランド州立大学	米国	27
4 月 22 日	アリゾナ州立大学	米国	18
4 月 27 日	ミュンスター大学	ドイツ	22
4 月 28 日	サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学	スペイン	9
5 月 11 日	セントラルランカシャー大学	イギリス	14
6 月　5 日	マハサラカム大学	タイ	32
11 月 12 日	ディーキン大学、スインバーン工科大学	オーストラリア	17
11 月 13 日	アリゾナ州立大学	米国	10
11 月 16 日	ラス・アメリカス大学	メキシコ	11
11 月 17 日	ミュンスター大学附属語学学校	ドイツ	7
11 月 19 日	グルノーブル大学附属語学学校	フランス	5
11 月 24 日	ニューヨーク州立大学フレドニア校	米国	2
11 月 25 日	華東師範大学	中国	17
1 月　7 日	留学トークセッション	米国、イギリス	27
1 月 14 日	留学トークセッション	カナダ、オーストラリア	3
1 月 21 日	留学トークセッション	ニュージーランド	3

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

英語圏での協定大学が増加したこともあり、交換留学制度で留学する学生が増えたほか、スペイン語専攻では 3 年生の 7 割以上がスペインに限らずメキシコ、ペルー、チリなどのラテンアメリカ各国に積極的に留学した。奨学金が取得できなくても、経済的負担の少ない大学をみつけて、留学に積極的にチャレンジする学生が増えた。また、卒業後のキャリアとの関連付けを考え、留学の必要性を感じて前向きに留学を考える学生が増えた。

本年度は、ランチアワーの留学体験発表会の参加者が増え、気軽に生の情報を得られる機会が与えられていることで、留学への心理的なハードルが低くなり希望者の増加に結びついていると考えられる。

［第 1 回トビタテ留学成果報告会表彰式の様子］

また、「トビタテ！留学 JAPAN 日本代表プログラム」第 1 期生として留学した河島健太さん（国際関係

学科 3 年）が、第 1 回留学成果報告会（11 月 18 日、於芝浦工業大学豊洲キャンパス）で第 1 期派遣留学生約 120 名の中から、優良賞（3 位相当）に選ばれた。

②改善すべきこと

平常授業で忙しく自由時間が少ないという理由で相談が遅れがちになる学生が多いので、早めに計画をスタートするように徹底する必要がある。次年度は入学時オリエンテーションで、留学希望者には早めの面接を行うよう周知徹底する。

5. 平成 28 年度に向けての方策

平成28年度は本事業の助成最終年度になるが、グローバル人材プログラムが終了したあとも、積極的に留学を考える雰囲気を醸成するとともに、それに必要な支援体制を確立するため、この 3 年間の蓄積を活用していく。

６－３. 留学中の学習支援

1. 概要

留学前-留学中-留学後と留学をはさんだ発展的教育課程の中では、留学中のサポートがうまくいくかどうかが鍵になる。本事業では、インターネットポートフォリオシステム manaba を導入し、学部教員、国際交流室の協力を得ながら遠隔地からの指導を行っている。

2. 平成 27 年度の目標

平成 25 年度の短期語学研修に参加した学生を皮切りに、留学中のサポートを開始した。出発前にリサーチ・テーマ設定や調査方法に関するグループ研修を行った後に送り出し、研修中はmanabaを利用して報告を受けながら適宜アドバイスを送っている。またmanabaのコミュニティ機能を利用して、参加者相互及び後輩への現地情報の発信をしている。

3. 平成 27 年度の実績

留学中のリサーチ発信プロジェクトに登録した秋出発の学生数は、平成25年度3名（iCoToBa開設前の学生）、平成 26 年度 19 名と順調に増加し、グローバル人材プログラムが始まった平成 25 年に入学した学生が 3 年生になる平成 27 年度は 63 名と大幅に人数は増えた。これはプログラム当初の想定以上で綿密な留学相談の効果があったと評価している。

［manaba コミュニティへの投稿］

帰国後、出発前に決めたリサーチ・トピックに関するレポートを manaba 上に提出させているが、レポートの7割が留学先の言語で書かれ、中にはロシア語でのレポートもあり、留学の成果がよくわかるものが多かった。

manaba のコミュニティ「留学について話そう！」上では、協定校に留学している学生以外にも多くの学生がスレッドを立てて本学の学生へ発信している。日本にいながらにして、留学中の学生たちの体験を共有でき、バーチャルなグローバルキャンパスとなっている。現在のコミュニティの登録者は教員を含め 512 名(2016 年 1 月末現在)である。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

manaba を利用することによって、日本から留学中の学生を効果的にサポート、指導することができるようになったのはもちろん、留学中の学生同士が励ましあい、よい影響をあたえながら充実した留学生活を送ることができるようになった。留学途中に早期帰国するというケースがほとんどないこともそれを裏付けている。そのうえ留学前の学生にとっても、留学中の学生のレポートを閲覧することで、留学を現実的にとらえることができるため、留学前のアドバイジングとしても有効であり、効果は十分に上がっている。

②改善すべきこと

現在、留学中の学生への指導は、iCoToBa 教員と国際交流室員が中心を占めており、今後は学部全体での指導体制を構築することが必要である。

5. 平成 28 年度に向けての方策

平成 27 年度後期に帰国した学生が、留学体験発表、学生共同プロジェクトといった留学後のプログラムを終え、留学前から留学後までの発展的教育課程を一通り経験したが、その効果は確実に出ている。来年度は、この教育効果を継続できるよう、文科省による本事業助成終了後のサポート体制構築を目指す。

６－４. 留学中のリスク管理

1. 概要

多くの学生を海外に留学させるにあたり、留学中のリスク管理が重要となる。そこで、平成25年度から、学生の留学に対する危機管理意識の醸成、留学中のサポートの充実、学内危機管理体制の構築・強化の 3 点を目的に、留学リスク管理を強化している。具体的には、学生への留学前危機管理ガイダンスの実施（年 2 回）、留学中の不慮の事故等への対応体制および学内における危機管理要綱およびマニュアルの整備である。さらに平成 27 年度より JCSOS（海外留学生安全対策協議会）の会員となり、安全対策面及び法的側面のサポートを受け、全学的なリスク管理体制を構築している。その一環として、JCSOS から送られてくる危機管理情報を manaba を通じて、対象国留学中の学生に配信している。また以上と合わせて、27 年度より本学より派遣留学する学生全員に学研災付帯の海外留学保険（略称：付帯留学）への加入を義務付け、不測の事態に対応している。

2. 平成 27 年度の目標

平成 27 年度の目標は、昨年度と同様、以下のように定めている。

a) 留学に対する危機意識の醸成を目的に、学生への危機管理ガイダンスを開催する。
b) 留学中の不慮の事故や病気、ケガなどに対するサポートの充実を図る。
c) 留学中の不慮の事故等に備えて、関連の要綱および対応マニュアルを整備し、学内のリスク管理体制を構築する。さらに担当教職員を対象に、リスクに対する説明会を開催し、学内で情報共有を図る。

3. 平成 27 年度の実績

①危機管理ガイダンスの開催

留学中の危機管理、危険情報および緊急時の対応等にかかわる情報を提供し、学生の危機管理意識を高めるため、危機管理ガイダンスを 2 回実施した。

［学生対象危機管理ガイダンス］
第 1 回：平成 27 年 6 月 10 日（水） 参加者 131 名
第 2 回：平成 27 年 12 月 2 日（水） 参加者 62 名

②留学中サポートの充実

平成25年度より、日本アイラック社の「アイラック安心サポートデスク」に加入し、留学中の学生が事故や病気、ケガ等、不慮の事態に遭遇した際に、迅速かつ適切なサポートを行えるよう

環境を整備した。なお、日本アイラックへの加入は平成 26 年度いっぱいで終了し、H27 年度から JCSOS に加入している。

③危機管理の重要性：フランステロのケースから

留学する学生の増加とともに、危機管理の重要性はますます増している。昨年度は、インドネシア・ガジャマダ大学（以下、UGM）での夏期短期プログラムに参加した学生が、留学期間中に乙種法定伝染病であるアメーバー赤痢に感染し入院するという事態が生じた。今後の対応策として、1）危機管理ガイダンスの徹底、2）病気、事故、事件等への対応が一目で分かるプリントの作成、配布、電子データでスマートフォンへの保存、manaba（e ポートフォリオ）へのアップ、3）パスポート番号、保険加入番号、緊急時の国内連絡先および保護者に関する情報の関係教職員による把握、4）日英両語の通じるサポーターの連絡先の確保等が挙げられる。本ケースを教訓として、必要以上に恐れず、適切な支援体制構築の必要性が課題となった。

前年度の教訓を受けて、今年度は早速上記を順次行ってきた。このような対策が功を奏し、11 月に起きたフランス同時多発テロの際には、全員の安否確認をスピーディーに行い、教訓の一部を早速実行に移すことができた。

③ 危機管理ハンドブックの作成

平成 27 年 12 月に危機管理ハンドブックを作成し、第 2 回危機管理セミナー参加者や希望者に配布した。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

学生への危機管理ガイダンスを開催することにより、学生の危機管理意識が向上し、さらに留学中のサポート体制の構築により、学生が安心して留学に臨めるようになった。

②改善すべきこと

今回の経験を基に、次年度に向けて効果的な危機管理のために実際に運用していくことが望まれる。現在、留学生の連絡先の確認とその迅速な実施を試みたが、想定していたようには進まなかった。今後は本学オンライン学生支援システムの UNIPA 等の活用により、連絡確認の精度を向上させていきたい。

5. 平成 28 年度に向けての方策

平成 27 年度は世界各地でテロ活動や国家間の衝突が頻発し、留学生の送り出しに従来以上に神経を使わざるを得ない大きな節目の年であった。現在の世界情勢の動向に鑑みて、危

機管理の重要性が今後ますます高まっていくことは確実である。来年度も引き続き「危機管理ガイダンスの強化」のために、先進事例を持つ大学等の事例紹介など、具体的なケースを基にした研修を実施する。

来年度も留学を行う学生に対して危機管理ガイダンスを行うと共に、必要な情報を適切に提供できる体制づくりを強化していく。

7. 学術交流協定大学留学生対象プログラム

1. 概要

学生の留学促進、特に単位認定を伴った留学ができる環境を整備するためには、海外学術交流協定大学を拡充することが不可欠である。そこで、本事業採択後から、交換留学生対象プログラムの整備に取り組んでいる。平成24年度は、グローバル人材育成推進室が交換留学生受け入れプログラムの素案を作成し、国際交流推進委員会に提案した。これを基に平成25年度に同委員会の下部組織である「日本語受入プログラムワーキンググループ」がプログラムを策定、平成26年2月にプログラムを構成する科目が全学で承認され、教育支援センターで扱う事項となった。平成 26 年度からは、教育支援センターが設置する「学術交流協定大学留学生対象科目小委員会」で教務内容を審議し、履修手続きやクラスコーディネートについては、国際交流室が担当している。交換留学生を対象としたプログラムは、平成 26 年度後期から始まり、本年度は2年目にあたる。

2. 平成 27 年度の目標

交換留学生対象プログラム科目の開講と、プログラム運営上の課題を明らかにし、改善を図る。平成 28 年度までの 2 年間で、プレイスメントテストの整備と運営方法を確立する。

3. 平成 27 年度の実績

①平成 27 年度学術交流協定大学留学生対象科目

交換留学生対象の科目は、主として日本語能力を養成することを目的としたものと、主として異文化理解を目的とした科目の 2 種類に分けられる。レベルは、前期は中級、中上級、上級の 3 レベルに対応、後期は初中級から上級の 4 レベルに対応した編成である。また、教養教育科目が、主として大学での学修に必要な日本語能力の養成を目的としているのに対して、交換留学生対象の科目は、日本語の基礎力の強化とともに、学生間のコミュニケーションを中心とした相互理解を目指したものや、リサーチを基にした日本文化理解など、プロジェクト型の教室活動を多く取り入れている点に特徴がある。

交換留学生は、学期始まりにプレイスメントテストを受験し、レベルと本人のニーズに合わせて、履修するクラスを決定している。開講科目を表 2 に示す。レベルの目安は、初中級が日本語能力試験（JLPT）N5 合格、中級が N4 合格、中上級が N3 合格、上級が N2 合格以上である。開講科目を表 7-1 に示す。

［表 7-1　2015 年度開講学術交流協定大学留学生科目］

区分	授業科目	開講時期	レベル	授業目的
日本語科目	総合日本語Ⅰ（4 コマ）	後期	初中級	日本語の基礎を学び、4 技能についてバランスのとれた日本語運用能力を養成する。
	総合日本語Ⅱ（4 コマ）	前・後期	中級	
	総合日本語Ⅲ（3 コマ）	前・後期	中上級	
	日本語実践 A	後期	初中～中級	場に応じた適切な言語行動について理解を深める。
	日本語実践 B	前期	中～中上級	
	日本語文章表現	前・後期	中～上級	書き言葉に関する基礎的な知識について学び、まとまった文章が書けるようになる。
	語彙・漢字 A	後期	初中～中級	トピックごとに、語彙と表記方法を体系的に学ぶ。
	語彙・漢字 B	前期	中～中上級	
異文化理解科目	トピックディスカッション A	後期	中～上級	現代日本の課題について、データに基づきクラスで討論を行ない、理解を深める。
	トピックディスカッション B	前期	中～上級	
	プロジェクトワーク A（2 コマ）	後期	中～上級	調査を計画・実施し、発表にまとめることを通して、アカデミックな日本語使用を学ぶ。
	プロジェクトワーク B（2 コマ）	前期	中～上級	
	Discover Japan	後期	初中級	地域の産業施設と歴史的建造物について講義とフィールドワークを行う。講義は英語で行う。
	フィールド演習 A	後期	中～上級	地域の産業施設と歴史的建造物について、講義とフィールドワークを行う。講義は原則日本語で行ない、学生は日本語で発信する。
	フィールド演習 B	前期	中～上級	

②学術交流協定大学からの交換留学生の受け入れ

平成 27 年度前期は、28 名、後期は 30 名の交換留学生が日本語のクラスを受講した。出身国と人数を表 7-2 に示す。留学生は、各学期開始時に、プレイスメントテストを受験し、適切なクラスに割り当てられた。本学の日本語教育を専門とする専任教員がプレイスメントテストを作成し、国際交流室が実施した。また受け入れ時に国際交流室の担当者が面談を行っている。

［表 7-2　交換留学生の出身国と人数］

2015 年前期	中国 4、韓国 4、台湾 3、ドイツ 4、フランス 2、スペイン 2、メキシコ 5、ペルー1、ブラジル 2
2015 年後期	中国 4、韓国 7、台湾 5、インドネシア 1、イギリス 1、ドイツ 1、フランス 5、メキシコ 4、リトアニア 1、ペルー1

③交換留学生と本学の学生との交流型授業の実施

留学生科目には、本学の学生と共に学ぶものも設定されている。日本語実践 A では、本学日本語教員課程の日本語教育実習生と交流を通して学べるよう設計された。実習生にとっては、日本語をコントロールしながらコミュニケーションする練習の場としての位置付けである。毎回 6~8 人の実習生が参加し、留学生 2~4 人を担当、留学生の日本語学習支援や学外での実践的なコミュニケーション練習の補助を行なった。

［長久手市防災訓練での様子］

この授業の他にも、Discover Japan や iCoToBa 科目の「比較文化セミナー」等では、日本人学生が学ぶ機会を持つなど、留学生科目は、本学の学生にとっても異文化理解を深める機会となっている。

④留学生指導に関する情報共有

留学生指導に必要な情報共有については、日本語科目担当、日本語教員課程担当、国際交流室教職員が manaba コースを利用して授業記録を共有している。これにより、留学生の日本語の学習状況だけでなく、彼らの生活状況を把握し、教員と事務員が協力して留学生を指導することができている。平成 25 年度までは、メーリングリストを活用していたが、平成 26 年度から manaba を導入した。平成 27 年度は、国際交流室との連絡にも活用されるようになり、蓄積された情報として閲覧することが可能となった。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

留学生科目の設置により、多くの交換留学生の受け入れと、体系的な教育が可能になるとともに、本学学生とのやりとりを前提としたタスクを取り入れるなど、本学学生との交流が効果的に進んでいる。

プレイスメントの実施については、本年度は学術交流協定大学留学生科目小委員会から指名された教員が前後期 2 回のプレイスメントテストの作成と実施、クラス分けと履修ガイダンスを担当した。履修手続きの指導は国際交流室の職員が担当した。本年度は履修ガイダンス時に学生のレベルと履修可能な科目を明示した上で履修指導を行なったため、平成 26 年度のような混乱は起きなかった。

英語で開講されている教養科目群には、英語を母語としない留学生も参加しているため、本学の学生にとっては、まさしく「グローバル・イングリッシュ」に触れる機会となっている。

②改善すべきこと

交換留学生の日本語レベルについては、JLPT N5 合格相当を最低ラインとして科目設定をしている。しかし、実際には毎年ほぼゼロ初級レベルの学生も参加する。このような学生は当然クラスでの日本語学習に困難を感じており、担当教員も復習課題を課すなどの対応をしているが、クラス速度が遅くなり、他の学生の学習意欲が削がれるといった弊害もでてきている。これに対応するために、初級レベルの学生サポートを目的に、平成 26 年度後期から日本語教育実習生が中心となり、週 3 回 Active Communication という名称の補習を行なっているが、十分な対応であるとは言えない。今後も日本語レベルが低い学生を受け入れるのであれば、初級クラスの開講は不可欠である。

5. 平成 28 年度に向けての方策

来年度は、まず、上記で指摘した改善点について、対応策を講じることが急務である。本学の日本語科目の大半は非常勤講師が担当しており、総合日本語のようなチームティーチングによる科目もあるため、履修指導の徹底は、スムーズなクラス運営にも不可欠である。今後、この体制をどう確立していくかが課題である。

また、本学学生との交流型授業については担当教員間でノウハウを共有し、本学学生と留学生の双方にとって学びを深められるよう、教室活動に改善を加える。

8. 地域における体験学習

インターンシップの拡大やキャリア支援は、本事業においてグローバル人材育成の「出口」につながる重要な部分である。本事業では、第 2 章で挙げた 8 つの能力と 5 つの態度・資質の醸成を目指しているが、これらを総合的に高めるために、インターンシップや社会での問題解決を目指す活動など、地域における体験学習を積極的に取り入れている。

本年度は、海外インターンシップを導入したのに加え、新たに地域の企業と NPO の協力を得た教育プロジェクトを開始した。これらについて以下に述べる。

8－1. インターンシップ

1. 概要

本学グローバル人材プログラムにおいては、インターンシップを留学後のフォローアップ・プログラムとして位置づけ、主に地元の企業や自治体、NPO や NGO などと連携したインターンシップを想定している。留学後のインターンシップは、学生が留学によって獲得した語学力を活かす場というより、（語学力を含めて）留学という経験を通じて身につけた「広義のコミュニケーション能力」「異文化適応力」「課題発見・解決力」といった能力や、「主体性」「協調性」「積極性」「責任感」といった態度・姿勢を、一層強化していく機会としてとらえている。

本学では、これまでインターンシップを経験する学生は極めて少数であったが、グローバル人材プログラムがスタートした昨年度以降、新たなインターンシップ先の開拓に取り組んできた。平成 25 年度については、初年度限りの措置として、正課科目の「インターンシップ」の認定条件を満たしていない場合であっても、一定の条件のもとで「グローバル人材プログラム認定インターンシップ」として評価し（正課科目としての単位認定はなし）、学生が積極的に社会と関わる機会を奨励するとともに、平成 26 年度からスタートした正課科目の新カリキュラムでは、学生がインターンシップに積極的にチャレンジできるよう、単位認定要件を改めた。

また、本年度は、新たにメキシコでの海外インターンシップを導入し、3 名が派遣された。

2. 平成 27 年度の目標

本年度は、以下の 2 点を目標と定めた。

① 海外協定大学と連携した海外インターンシップや実践型研修を開拓する。

② 留学から帰国した学生や 3 年次の学生に、インターンシップの重要性を周知する。

3. 平成 27 年度の実績

①国内インターンシップの実施

教養教育科目「インターンシップ」は、1 日 6 時間、5 日間（総計 30 時間以上）の就業体験を行い、毎日日誌を書くことを単位認定条件としている。

本年度は、12 月末までに 47 名が完了し、単位取得見込みである（平成 26 年度 45 名）。

インターンシップ先は以下のとおりである。昨年度と比べ、一般企業でのインターンシップに多様性が出てきている。

［表 8-1　平成 27 年度インターンシップ先一覧］

地方自治体	愛知県庁、いなべ市役所、岐阜市役所、三重県立鈴鹿青少年センター
一般企業	JAL グループ、三井住友海上火災保険、損保ジャパン、住友生命、豊田信用金庫、大同特殊鋼、岡谷鋼機、イーオン、名古屋三越、レオパレス 21、豊田まちづくり、三城、アイガ、ガリレオ、エヌエスディ、リス、アドプランナー、アルタ、TAKAMI BRIDAL、白馬樅の木ホテル、山田ビジネスコンサルティング
その他	愛知教育大学、アジア保健研究所、JA あいち経済連、NPO 法人 G-net、旅行商品開発プロジェクト

②メキシコでのインターンシップ実施

メキシコに進出する日系企業（自動車部品メーカー）2 社からの要請を受け、スペイン語圏専攻の学生（4 年生）3 名を、平成 27 年 3 月よりインターン生としてメキシコに派遣した。派遣先は、マツダ系の自動車部品メーカーである株式会社日本クライメイトシステムズ（本社：東広島市）のメキシコ現地法人 J Clima Sistemas México, S.A.de C.V（事務所はハリスコ州グアダラハラ市、工場は隣接のグアナファト州サラマンカ市）、および同じくマツダ系の現地企業 YKM（Y-tec Keylex México）社（グアナファト州サラマンカ市）である。派遣期間は 2 名が 1 年間、1 名が半年間で、派遣に際しては当該企業と本学との間で覚書を締結した。

本インターンシップにおける研修内容は、主として現地工場および事務所（品質管理部、購買部、人事部）における通訳業務である。メキシコでは近年、自動車産業をはじめ日本企業の進出がめざましく、企業通訳の供給が追いつかない状況で、人材養成が急務となっている。そこで企業側からの強い要望もあり本学からスペイン語能力の高い学生 3 名を選抜して派遣した（資料 8-1：平成 28 年派遣インターン募集概要）。

自動車部品会社という専門性の高い現場での企業通訳は容易ではなく、派遣された学生たちは相当苦労したようであるが、日本人社員の指導を受けながら徐々に業務に慣れ、経験を蓄積し、自動車業界で通用する実践的な通訳能力を高めていった。大学側も現地での研修状況を正確に把握し、企業側と協力して人材を育てるという観点から、インターン生に毎月「研修報告書」の提出を義務づけている。

なお、平成28年3月からは、上記派遣学生と入れ替わる形で、新たに1名の学生（3年生）が1年間の予定で現地に派遣されることとなった。

［資料 8-1　メキシコ日系企業インターンシップ募集概要］

1.　派遣期間：2016年3月初旬から6ヶ月または1年間
2. 募集人員：1～2名
3. 主な研修場所：メキシコ　グアナファト州サラマンカ
（ハリスコ州グアダラハラの事務所での研修もあります）
4. 研修内容：現地社員の指導を受けながら、主にメキシコ人スタッフと日本からの駐在員の間の通訳業務の見習い
5. 経費負担：以下の費用は会社側が負担
・往復航空運賃　・基本的な生活費　・保険加入、査証申請手続費用
＊通勤は会社が提供する社員バス等を利用します
6. 事前研修：出発前に本社または山口工場で数日間の研修を行う場合があります。
7. 対象者および必要な語学力：
学部2年生以上（2014年度またはそれ以前入学者）で学部・学科は問わない。
大学院生も可。DELE/B1 以上に合格、またはそれに相当するスペイン語力を有する者。
8. 選考方法および提出書類：
◆第一次選考（書類審査）
①　履歴書
②　志願理由書：希望派遣期間（6ヶ月か1年か）を明記し、A4用紙に800～1000字程度で作成）
③　語学力証明書類コピー：DELE,スペイン語検定等。ない場合はスペイン語能力がわかる文書（成績証明書やボランティア通訳の活動経歴書などアピールできるもの）
◆第二次選考（面接）：第一次選考通過者を対象に、愛知県立大学において本社担当者による面接（日本語・スペイン語）を実施
＊面接当日は、午後2時半にスペイン語圏専攻共同研究室に集合してください。最初に全体説明の後、個別面接を実施します。
＊選考結果は12月初旬までにお知らせします。
＊問い合わせ先：スペイン語圏専攻キャリア支援委員・小池康弘
＊企業情報は以下のHPを参照してください。
株式会社日本クライメイトシステムズ：http://www.jcsaircon.co.jp
（広島県東広島市吉川工業団地3-11　Tel082-420-9500　Fax082-420-9540）

③卒業生を招いた講演会・イベント等の実施

キャリア教育の一環として、グローバルに活躍する本学卒業生や、通訳・翻訳や、国際協力に関連する分野で活躍する方を招き、講演会を実施することで、学生が自身のキャリアを考えるきっかけとした。各内容については、第10章を参照いただきたい。また、ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻と国際関係学科が卒業生を招き、在学生と仕事や就職活動について話すセミナーを開催した。

a) ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻キャリア支援講座

テーマ:スペイン語圏専攻就職活動準備セミナー

～若手卒業生4名のミニ講演会、4年生内定者の体験談、ディスカッション～

日時:平成28年1月20日(水)13時30分～15時40分

参加者数:32名

b) 国際関係学科卒業生によるキャリア支援講座

テーマ:「座談会」:学生時代に考えていたこと・社会に出て考えること

日時:平成28年 1月20日(水)13時30分～15時10分

参加者数:8名

4. 平成27年度の評価

①効果が表れていること

平成 25 年度より、インターンシップの改革を続けてきており、インターンシップの履修学生は着実に伸びてきている(平成25年度20名(＋グローバル学内インターンシップ 15名)、26年度 45名、27年度 47名)。また、本年度は、海外インターンシップも始まり、3名の学生がメキシコでのインターンシップに取り組んだ。

本年度は、26 年度と比べ、インターンシッププログラムとしては、目立ったものはないが、その種類は広がりを見せている。26 年度のインターンシップは、自治体、金融、観光、製造が中心であったが、今年は、これらに加え、コンサルティングや教育関連なども加わっている。

また、外国語学部では、地域との連携を意識した PBL 型の授業が増えてきており、グローバル人材に求められる普遍的能力、とくに「課題発見・解決力」「広義のコミュニケーション能力」と、「主体性」「協調性」「積極性」「責任感」を育む教育機会が増えてきている。

②改善すべきこと

数値にはあがっていないが、留学を終え、復学するまでの 2~3 か月間に、インターンシップに参加する学生や、インターンシップのために休学する学生も一定数存在する。このような学生の動きを完全に把握していくとともに、留学中の単位認定および留学帰国後のインターンシ

ップの単位認定ができるようになれば、ギャップ期間をより有効に活用する学生が増えるのではないかと考えられる。

現在のインターンシップは、記録の提出を義務付けているが、これらをインターネットポートフォリオに保存するといった取り組みはまだ徹底できていない。キャリアサポートの点からも、今後取り組む必要がある。

本年度は、海外インターンシップを開始することができたが、これを継続するとともに、さらに国内でもグローバルキャリアを活かせる企業等でのインターンシップ先やプログラムを開拓する必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

地元産業界との連携では、インターンシップ先の企業等が当該学生の活動を評価して大学および学生にフィードバックし、大学と企業等が情報を共有しつつ、協同して学生のキャリア形成を支援していく仕組みを整える。

また、平成 26 年度に実施した ESD ユネスコ世界大会のアテンドスタッフ事例のような、国際学会等と連携し、さまざまな学びの機会の創出を目指す。

8－2. 地域と連携した教育活動

1. 概要

インターンシップの拡大やキャリア支援は、本事業においてグローバル人材育成の「出口」として重要であり、特にインターンシップ先企業と大学が協働し学生を育てていく仕組みを作ることは、本事業の課題であった（平成 26 年度外部評価報告書 p.82 で言及）。この問題意識に立ち、本年度は、地域のものづくり企業と NPO 法人との連携により、取材型インターンシップを取り入れたプログラムをスタートさせた。平成 27 年度に 2 期開講し、東海 3 県におけるネットワークを着実に拡げつつある。

2. 平成 27 年度の目標

地域産業界や NPO 等と連携したインターンシップの要素を持った PBL 型教育プログラムを作り、実施する。また、この教育プログラムを発信し、地域での協力ネットワークを作り、継続可能なプログラムに育てる。

3. 平成 27 年度の実績

①地域ものづくり学生共同プロジェクト

「グローバル人材プログラム」では、留学後の履修を想定して開講しており、留学後に学生が自身の語学力と異文化体験を活かしつつ、プロジェクト全体をマネジメントする能力を養成することを目的としている。「地域ものづくり学生共同プロジェクト」（前期「あいちものづくり学生共同プロジェクト」）は、「グローバル人材プログラム」指定科目として本年度から開講している。授業担当は、坂本ファーン（iCoToBa 教員）と宮谷敦美（国際関係学科教員）である。前期は 19 名（＋履修登録なし 1 名）、後期は 24 名が受講した。

本授業では、学生が地域でものづくりに取り組む企業に直接インタビューに赴き、インタビューで得たニーズをヒントに、さらに業界研究を進め、多言語による広報記事を作成する。インタビュー先企業とのマッチングとプロジェクト開始のキックオフ講座は、前後期とも、NPO 法人 G-net の協力を得て実施した。後期からは、三井物産中部支社の協力もあわせて得ている。

［英文記事に関するグループ学習］

プロジェクト実施にあたり、必要なスキルとして扱っているものは、⑴業界研究のしかた、⑵インタビュー計画の設計方法、⑶効果的に質問するスキル、⑷記事タイトルと構成の分析、⑸わかりやすいスライド作成とプレゼ

ンテーションのしかたである。これらのスキルをプロジェクトと並行して学びながら、異なる言語を学ぶ学生 5～7名がチームをつくり、記事作成とプレゼンテーションに取り組む。最後の成果発表会は、前期は 7 月 26 日に愛知県立大学サテライトキャンパスで、後期は 1 月 23 日に三井物産中部支社で開催された。成果発表会には、企業関係者および本学教職員が参加し、さまざまなアイデアと改善のためのディスカッションを行った。

［成果発表会の発表風景］

また、この教育プロジェクトは「地域のグローバル化を支える人材育成」として注目され、新聞にも取り上げられた。このような地域の課題の解決そのものをプログラムに取り入れることで、プロジェクトの目的が明確になる。また、成果発表会では、取材先企業の社長が参加し、学生の発表後に意見交換の時間を持ち、学生が作成した成果物を、実際に企業の PR 活動に使うなどの事例もあり、学生がプロジェクトに取り組む動機を高めることにもつながっている。

第 1 期の授業実施後、学生自身の学びのふりかえりと、後期の授業改善に向けての意見をアンケートにより調査した。このアンケートのコメントを基に、後期は、プレゼンの仕方、視点をかえた文章の書き方などの事前講座を取り入れるなど工夫をした。

また、学生の授業コメントでは、「この授業の良いところは一回失敗させてくれるところだった。例えば、プレゼンでも自分たちがまず思うようにやって、先生や他のチームのみんなにアドバイスをもらえるのですぐに吸収することができた。最初にこうやるんだと細かなことは言われなかったので、逆に成長できた」と自身の失敗を肯定的に捉えるコメントも多数みられた。

前期にこのプロジェクトに参加し、丸八テント株式会社を担当した学生の 1 人は、同企業で現在もインターンシップを継続しており、2 月 19 日ゴールドマン・サックス ジャパン主催「中小企業経営革新プログラム」成果報告会でインターンシップの成果を発表した。また、プロジェクト後に留学した学生が海外でテーマを決めて情報を収集したり、企業と協力して新たなイベントを創出するなど、このプログラムがさらなるチャレンジを生み出すという流れも見られている。

Maruhachi Tent
An Exciting Fast-growing Company

What springs to mind when you hear the word "tent"? Most people think of the kind of tent we sleep in when camping. Tents, however, have a wide range of uses as billboards, roofs and parasols. Tents function to block out wind, sound, dust and even insects. They protect us against the wind, rain, and sun.

◀ commercial examples of Maruhachi billboards, roofs and parasols

Tent-making Pioneer

Hitoshi Sato, the CEO of Maruhachi Tent Co., Ltd. says that since their foundation in 1951, making people's lives better has always been the central goal of their company, as they strive to provide a range of tents to fit any situation. Maruhachi always try to create new and original products. They do not only sell tents, rather they take on the whole process of designing, producing and installing tents, because Sato says they have a strong belief in the importance of originality. This approach allows them to better accommodate individual customer needs.

▲ Hitoshi Sato, CEO

Sun Mesh Shade Cloths

Maruhachi manufacture a wide range of tent-products, including many environmentally-friendly designs. For example, thermal barrier coated mesh shade cloth helps cut down ultraviolet rays as well as infrared rays by up to 80%. Installing this shade cloth by windows creates a comfortable environment with little need for air-conditioning. The material is a mesh, which allows wind and sunlight to get through, while still blocking the heat.

▲ Maruhachi sun mesh shade cloth

Awnings

Maruhachi also produce awnings that function similarly to sun mesh shade cloths. Awnings play a role in creating comfortable places for people to wind down such as a café patio where people can enjoy chatting over coffee.

▲ Maruhachi shop front awnings

Industrial Tents

Maruhachi's tents help people work outside as well. In South East Asia for example, where the weather is rainy and hot all year around, Maruhachi tents are used to improve working conditions such as those in the construction industry. Installation of a tent enhances work efficiency and enables people to work much more safely even in undesirable weather conditions.

▲ Maruhachi tents used for outdoor work

Looking to the Future

Maruhachi's clients vary from home-users to people in the construction industry. Maruhachi have expanded not only in Japan but throughout the world, for example in China, Vietnam and Germany. As long as there are people who need tents, Maruhachi's custom-made manufacturing will continue to evolve.

［学生が作成した多言語記事の一例］

取材協力企業は以下の通りである。

［2015 年度前期］
株式会社 Kitamura Japan（北名古屋市）
杉浦味醂株式会社（碧南市）
船橋株式会社（名古屋市）
丸八テント株式会社（名古屋市）
［2015 年度後期］
神杉酒造株式会社（安城市）
聖和セラミックス株式会社（岐阜県多治見市）
千古乃岩酒造株式会社（岐阜県土岐市）
矢橋ホールディングス株式会社（岐阜県大垣市）

［表 8-2　学生アンケート評価］

質問項目	前期平均点	後期平均点
教師の説明はわかりやすかったか	4.42	4.69
タスクは適切に指示されていたか	4.05	4.26
アドバイスは適切だったか	4.58	4.87
学ぶ価値のあるプロジェクトだったか	4.84	4.91
他の学生に薦めたいか	4.00	4.78

5 点満点、前期 19 名回答、後期 23 名回答

自由記述（抜粋）

- このプログラムに参加して、「人に伝える」ことの難しさ。特に、言語が違ったり、文化背景が違うとこんなにもお互いのものごとに対する感じ方や認識の仕方が異なってくるのだと実感することができました。これは、これから外国語を活かしていこうとする人に大切な感覚だと思います。
- もっともっと「伝える力」というものを学びたいと思った。「読みたい！」と思わせる文や記事のデザイン、「聞きたい！」と思わせる発表ができる能力をもっと身に付けたい。
- 私はチームで長期的にプロジェクトを進めていくことに自信がありませんでした。どう自分が相手にアプローチすればいいのか、どう自分のモチベーションを保持すればいいのかが分からず、結局他人任せにしてしまう（放棄してしまう）か、全て引き受けてしまうかのどちらかでした。後者でできたとしても、私一人の力でできたものは、チームで作ったものに劣ります。結果、自分がチームに入ってしまったら、絶対にうまくいくはずがない、といつも思っていました。このプロジェクトは、その考えを変える足がかりになったのではないかと思います。プレゼンテーションを終えたとき、チームの絆を感じ、大きな達成感を味わうことができました。

海外に販路 学生一役

外国語で商品PR

愛知県立大外国語学部（同県長久手市）の学生が地元の中小企業を取材し、各社のホームページ（HP）に掲載する二カ国語のPR記事づくりに取り組んでいる。海外に販路を求める中小企業にとって、外国語での情報発信は大きな「壁」の一つ。学生は「各社の海外展開をお手伝いできたら。私たちも語学力を磨くチャンス」と張り切っている。（坂田奈央）

愛知県立大 企業のHP記事作成

この取り組みは、外国語学部が四月に始めた「あいちものづくり・学生共同プロジェクト」。学生がビジネスの世界に飛び込み、販路拡大を探る企業の課題を把握するとともに、語学力を高めるのが狙いだ。

学生は英語に加え、スペイン語、ドイツ語、中国語のどれか一カ国語で記事をつくる。「各言語圏の消費者たちの関心を誘うような切り口を」と、記事や写真を工夫している。

企業は、学生が客観的な視点でまとめた二カ国語の記事をHPなどに自由に活用できる。今回参加したのはキタムラジャパン（同県北名古屋市）、杉浦昭商（同県碧南市）、丸八テント商会（名古屋市）、船橋（同）の四社。

枕メーカーのキタムラジャパンの取材を担当した四年の前田遥さんら五人は、英語とスペイン語の記事を約三カ月間かけて作成。スペイン語版では「シエスタ（昼寝）の復活」をコンセプトに、製品の特徴や効能を紹介した。

英語版では「睡眠が美をつくる！」のコンセプトで二十代後半から四十代までの女性をターゲットに、日米両国の枕の概念の違いを丁寧に記した。各言語の校正は県立大の外国人講師が担当した。

キタムラジャパンは今秋、さらに販路を求め、北村圭介社長らが欧米を回っており、近く学生の記事付きのHPも公開する。

北村社長は「学生ならではの視点で面白い。単純に日本語を外国語に翻訳するのではなく、現地の人が興味を持つような切り口の発信が重要と感じた」と話している。

❶枕メーカー「キタムラジャパン」の英語とスペイン語の資料を作成した愛知県立大の学生グループ＝愛知県長久手市の愛知県立大で
❷学生が作成したPR記事の一部

［平成 27 年 9 月 9 日付中日新聞経済欄］

②岡崎ホテルプロジェクト

日本を訪れる外国人観光客の増加に伴い、国内でも外国語で対応できる人材育成が急務となっている。外国語での対応については、外国人の考え方を理解した上で、外国語で（または、やさしい日本語で）的確に、かつ失礼なく伝えることが必要である。このようなスキルの育成を目指し、9 月 28 日から 10 月 17 日にかけて、岡崎ニューグランドホテルと岡崎市観光課の協力を得て、「地域で学ぶ・考える、外国人おもてなしコミュニケーション」をテーマに、宿泊施設における外国人観光客に対応したサービス提供を考える教育プロジェクトを実施した。

この教育プロジェクトでは、中国人を中心とした団体旅行客に対するサービス提供とホテルでのマナー周知に関する課題を抽出し、その解決方法を提案するというプロセスを通して、学生が国内の観光産業の現場における外国人対応の状況と課題に関する理解を深め、中国語および「やさしい日本語」での対応方法について実践的に学ぶことを目的とした。

プロジェクトに参加した学生は中国学科、日本語教員課程、留学生の計 20 名である。本プロジェクトは、川尻文彦（中国学科教員）と宮谷敦美（国際関係学科教員）が担当した。

9 月 28 日のホテルでのフィールド調査では、学生は食堂、大浴場、客室の 3 チームに分かれ、ホテルスタッフと課題を明らかにするとともに、その解決方法について話し合った。その後、学生は課題を持ち帰り、対応するための成果物作成に取り組んだ。

10 月 17 日の成果発表会では、学生が作成した成果物について発表し、参加者が改善点や活用方法について、ディスカッションをした。成果発表会には、学生のほか、岡崎ニューグランドホテルスタッフ 3 名、岡崎市役所観光課職員 2 名、岡崎市の NPO 職員 1 名も参加し、活発な意見交換がなされた。成果物については、岡崎ニューグランドホテルで改善を加えた後、活用される予定である。

［成果発表会での意見交換］

［学生が作成した成果物例］

日中学生マナー懸け橋

岡崎のホテル 中国人客急増、案内など助言

中国人観光客の急増で大忙しの宿泊施設が、思わぬ悩みを抱えている。日本の習慣を知らないまま大浴場に水着を着たまま入浴したり、備え付けのシャンプーを持ち帰ったり―。岡崎ニューグランドホテル（愛知県岡崎市）は日本の宿泊マナーを効果的にPRしようと、愛知県立大の協力を得ることにした。中国語などの案内表示やパンフレットを作り、日中の文化ギャップがもたらす課題の解決を目指す。（坂田奈央）

「宿泊客の増加はありがたいが、日常の業務に追われ、対応が追いついていないのが実情」。岡崎ニューグランドホテルの竹内博剛副総支配人（35）は打ち明ける。今年一～六月の半年間に宿泊した中国人は約五千五百人。前年同期の二十七倍と激増している。

中国人宿泊客の中には、食事の際のバイキングで同じトングを使って違う料理をつまんだり、夜中まで大きな声で話したりする人がいるという。ホテル関係者は「増加のスピードが速く、対策が間に合わずに同じ悩みを抱えているホテルは多い」と話す。

岡崎ニューグランドホテルは、岡崎市観光課を通じて、グローバル人材の育成に取り組む愛知県立大と連携している。

二十八日、外国人対応の方法を協力して考える活動の一環でホテルを訪れた大学院二年の中国人留学生、李嘉輝さん（26）は「中国の公衆浴場では水着を着たまま入浴するのが普通。日本の文化を知らない場合、いつものように入ってしまう」と、説明の必要性を指摘。大学三年生の佐藤遥さん（21）は「ホテルの中に中国語の案内表記が少ないことに驚いた」と話した。

ホテル側は、日中の学生が見て気付いたことを今後の案内表示のデザインなどに生かしていく。

岡崎市など三河エリアは現在、東京と大阪・京都を巡る観光ルートを楽しむ団体客の宿泊地点となっており、二〇一四年後半から中国人宿泊客が急増。一四年度の愛知県の外国人宿泊客数は百四十九万人と前年度より29・6％も増え、本年度はさらに増えると予想されている。

ホテルを案内しながら、中国人客急増に伴う課題を学生たちに説明する従業員（左端）＝愛知県岡崎市の岡崎ニューグランドホテルで

［平成 27 年 9 月 29 日付中日新聞・経済欄］

［表 8-3 学生アンケート評価］

質問項目	平均点
このプロジェクトで学びはあったか	4.83
やりがいのあるプロジェクトだったか	4.83
プロジェクトの達成感はあるか	4.17
プロジェクトの内容を楽しめたか	4.61

（5 点満点、18 名回答）

自由記述（抜粋）

- とても大変でしたが、同時にとてもやりがいがあるプロジェクトでした。中国語を学んでいる者として、いかに中国人の方に、また日本人の方にも快適に過ごしていただけるかを考えるよいきっかけとなりました。
- 留学生としてやはり、言葉の勉強にとても役にたちます。そして日本のサービスのよさに感心しました。チームメンバーとして、本当に楽しかったです。
- 改善点がまだまだあるのでやりきったという感じを持てないが、今回のプロジェクトを通して、様々な考え方を知れた。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が現れていること

本年度は、取材型インターンシップを取り入れた PBL 授業「地域ものづくり学生共同プロジェクト」と、フィールドワークを通して学ぶ短期プロジェクトの 2 種類の教育プログラムを開発、実施した。地域の異文化資源を活かしながら産業界と大学が共に人材育成に取り組むことにより、地域社会におけるグローバル、グローカルな課題解決も目指す教育プログラムのひとつの可能性が提示できたといえる。

また、これらのプログラムの参加が学生の外国語学習やキャリア学習への動機づけとなり、インターンシップへの参加や企業とのイベント開催など、新たな学びの行動へつながっていることも評価できるだろう。

このような産民学による教育プロジェクトでは、外国語に翻訳する労働力を得るという捉え方でなく、長い目でこの地域の将来を支えていく人材育成を協力しながら進めていくというビジョンを共有することが大前提である。これらの教育プログラムが円滑に実施できたのは、取材先企業やフィールドとなる宿泊施設を探す際に、NPO 法人 G-net、三井物産株式会社、岡崎ビジネスサポートセンター等に協力を得て、各プログラムの教育目標を明確にするとともに、その趣旨に賛同いただける企業を紹介いただけたことが非常に大きい。

②改善すべきこと

これらのプログラムを実施するためには、上述のように協力企業が趣旨を理解した上で参加することがプログラムの質を高めるためにも不可欠である。また、学生が職業について深く考えるきっかけとするためにも、可能な限りひとつの学期で行う取材先企業の業種を多様にしていく必要がある。

岡崎ホテルプロジェクトでは、留学生がプログラムに参加することにより、学生がそれぞれの考え方の文化差を知るきっかけになった。地域ものづくり学生共同プロジェクトは、今学期は日本人学生のみだったが、来年度は、留学生にも参加を呼びかけ、より多様な考え方に触れる場にする必要がある。

また、今年度は、記事を書き、冊子を作成するまでがプロジェクトのゴールであったが、インターネットを活用した発信にもつなげていく必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

地域ものづくり学生共同プロジェクトについては、本年度 2 回実施したプログラム実施に関する学生のフィードバックを受け、教育内容を改善する。また、継続的な実施のために、さらに地域・産業界とのネットワークを拡げ、協力企業を開拓していく。また、インターネットを活用した情報発信につなげていく。

加えて、本年度実施した岡崎ホテルプロジェクトのような短期間で学べるインバウンド産業の理解を深めるためのプログラムを継続的に実施する。

9. FD 活動

1. 概要

平成 26 年度より、課題であったグローバル事業に関連する FD 活動を開始した。本年度も引き続き、前期および後期開催の iCoToBa の全授業アンケートを実施し、授業報告で課題となる点を明らかにし、次学期への改善につなげた。また、外国語学部の FD 活動では、本事業で取り組んでいるインターネットポートフォリオシステム manaba を活用した教育実践を紹介した。

2. 平成 27 年度の目標

本年度の目標は、①前期および後期の iCoToBa の全授業でアンケートを実施し、iCoToBa 年報の授業報告に、アンケート結果の分析に基づき、課題とアクションを意識化させるサイクルを作ること、および、②外国語学部の FD 活動において本事業で取り組んでいる教育実践を紹介・議論する場を設け、本事業の蓄積を学部教員と共有し、教員のグローバル教育の理解を高めること、の 2 点である。

3. 平成 27 年度の実績

①iCoToBa 授業アンケートの実施

平成 27 年度前期、後期に開講した iCoToBa の全てのクラスで、授業アンケートを実施した。アンケートは、本学の正課授業との比較が可能になるように、教育支援センターが実施している授業アンケートとほぼ同じ項目で構成されている。アンケート項目は以下の通りである。

［質問項目］

あなた自身について:

Q1. 事前に授業概要を読むなどして授業内容を知ろうと努めましたか。

Q2. この授業における欠席回数を報告してください。

Q3. この授業に関して、授業外での学習・実践など自主的な努力をしていますか。

Q4. この授業を受講して、あなたの語学力は伸びましたか。

Q5. この授業を受講して、あなたの語学学習の方法はよくなったと思いますか。

授業および担当教員について:

Q1. 授業概要や学期開始時の授業に関する説明は、わかりやすかったですか。

Q2. 授業概要や学期開始時に説明された授業の目的は、授業で達成されていたと思いますか。
Q3. 教員の話し方、説明の仕方はわかりやすかったですか。
Q4. 教材（教科書、配布物など）は、有用でしたか。
Q5. ホワイトボードへの板書、パワーポイントなどのスライドは見やすかったですか。
Q6. 教員は学生の反応や理解度・到達度に留意しながら授業を進めていましたか。
Q7. 教員は、一方的な説明だけでなく、質問、発言、発表など学生の積極的な参加を促しましたか。
Q8. 教員の授業への意欲・熱意は感じられましたか。
Q9. この授業によって、もっと上達したい、もっと学びたいという気持ちになりましたか。

②外国語学部 FD 研究会での発表

平成 28 年 1 月 27 日に開催した外国語学部 FD 研究会において、manaba の活用事例報告を行なった。詳しくは p.40 を参照いただきたい。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が現れていること

平成 26 年度に引き続き、授業評価アンケートを行い、客観的な評価から授業担当教員が授業をふりかえり、改善策を考えるというサイクルを確立できている（アンケート結果に基づく授業報告は、全科目 iCoToBa 年報に掲載している）。また、現在インターネットポートフォリオシステムの活用事例を紹介し、留学中の学生とのコミュニケーションのとり方や危機管理の方法について、広く学部教員が知るきっかけをつくることができた。

②改善すべきこと

本年度に実施したアンケート結果は、各教員の授業方法のふりかえりにしか活用できていない。また、現在は、本学教育支援センターのアンケート項目とほぼ同様の内容としているが、学生の学習を促進させる要素等を検討し、平成 29 年度以降の iCoToBa での授業運営に向けたデータを収集していくことが重要である。

5. 平成 28 年度に向けての方策

平成 29 年度以降の新グローバル人材育成推進事業（仮称）に向け、iCoToBa で行うべき学習支援をどのようにするか、学生アンケートから分析を行う。また、iCoToBa 開講からとりためてきたデータを基に、本学におけるグローバル人材育成事業に関する全体的な評価を行ない、次期への課題を設定する。

10. 講演会・セミナー・イベント

1. 概要

「グローバル人材育成推進事業」の採択から、本学では、グローバル人材育成に関連するテーマで講演会・セミナーを開催し、本学の取り組みを学内外に情報発信するとともに、学生のグローバルマインドやキャリア意識の醸成を目指している。

本年度は、愛知大学と本学がグローバル事業採択大学西日本第一ブロックの担当校になり、共催で、「2015 年度西日本第一ブロック共同シンポジウム」を開催した。これについては、11 章で報告する。

2. 平成 27 年度の目標

本学学生のグローバルマインドやグローバルキャリア意識の醸成を目指し、セミナーおよび小規模の座談会形式のセミナーを多く企画・開催する。また、外部留学支援団体と連携し、学生の留学支援を目指した国別・地域別のイベントを開催する。

3. 平成 27 年度の実績

①グローバルキャリア・グローバルマインドの醸成を目指したセミナー

グローバルキャリアを目指す学生を対象に、国際社会で活躍する社会人を招き、現場の話を聞くセミナーを 9 回開催した。

［表 10－1 グローバルキャリア・グローバルマインドに関するセミナー一覧］

月日	タイトル	参加者数
4 月 22 日	通訳に求められる能力～大学で今、身につけるべきこと～	148
5 月 11 日	Compassion in Action: Be the change you want to see in the world	47
6 月 22 日	Spreading HOPE Around the World: From Poverty to Self Reliance	39
6 月 25 日	Global Career Seminar: The EU Student Perspective	31
7 月 8 日	The Impact of Learning Mobility: The Value of Erasmus	22
7 月 23 日	語学力と異文化理解力で世界をつなぐ仕事 ～アルゼンチンと日本の橋渡し役として～	17
10 月 20 日	日本の難民受け入れ－シリア難民の事例から考える－	13

11 月 30 日	外務省や国際機関で働きたい人へ	9
1 月 21 日	A Place within the Global: Media, Identity, and Japan	65

「通訳に求められる能力～大学で今、身につけるべきこと～」(4 月 24 日)

講師:加藤美貴子氏(英語・スペイン語通訳者)

プロ通訳者として活躍されている加藤美貴子氏を招いて講演会を開催した。講演の前半は通訳者に求められる資質、実際の仕事内容について説明があった。通訳になるためには、経験を積むことが次の仕事につながることや、学生のうちに積極的にボランティア通訳などに挑戦することが大切だとメッセージを送った。また、加藤氏の体験談に基づきつつ、通訳になるための条件として、高い外国語能力とともに、日本語能力、専門知識、気配りや身だしなみ、そして自分を売り込む能力も必要であることが説明された。後半には加藤氏による通訳トレーニング法を参加者が体験的に学び、瞬発力を要する通訳の仕事の難しさを理解した。

講演終了後には、多くの学生が加藤氏に質問をする姿が見られた。外国語学部生、教職員、一般参加者 148 名が出席し、通訳という職業への関心の高さがうかがえた。

[加藤氏によるセミナー風景]

"Compassion in Action: Be the change you want to see in the world" (5 月 11 日)

講師:Sylvia Beauchain 氏

(CEO and Founding Director of Chi-Ki Children's Charity)

March 11th 2015 the second global seminar took place in the Aichi Prefectural University Cultural Exchange Centre small hall. Forty-seven students and staff attended the lecture by Sylvia Beauchain, CEO and Founding Director of Chi-Ki Children's Charity.

Ms. Beauchain spoke of her personal desire to help others, and how that led her to establish her own charity organization. She gave information about the programs currently in place in Uganda, India and Laos, and gave many examples of different ways in which it is possible to approach problems creatively and use what is available to make change happen.

[Beauchain 氏によるセミナー風景]

Students saw several small videos illustrating the work the charity does in different communities, and had a chance at the end of the presentation to question Ms. Beauchain about her experiences. The lecture was conducted entirely in English.

Many students remarked that they found the lecture very inspirational and it was a great jumping-off point for individuals who want to reach out to the world in some way but have no clear idea of where to start.

"Spreading HOPE Around the World: From Poverty to Self Reliance"（6 月 22 日）

講師：Erin SAKAKIBARA 氏（HOPE 日本支部名古屋地区代表）

［SAKAKIBARA 氏によるセミナー風景］

カナダの NGO 団体 HOPE 日本支部名古屋地区代表の Erin SAKAKIBARA 氏を迎え、NGO 活動や国際開発について、「水」をテーマにお話しいただいた。HOPE の具体的な活動事例から、農村部に井戸を掘ることで、農作物を作ることができる、安全な飲み水を確保できる、子供が何時間も歩いて水を汲みに行く必要がなくなり、代わりに学校へ通えるといったさまざまな利点があることが分かった。日本では当たり前のように使うことのできる水の大切さに目を向け、水へのアクセス環境を整えることで、発展途上国の人々の暮らしを経済面、健康面、教育面から改善することができることに気づかされた。セミナーは英語で行われたが、国際開発に興味関心をもつ学生や、iCoToBa 授業を積極的に受講する学生など 39 名が参加し、講師の発表に熱心に耳を傾けた。

"Global Career Seminar: The EU Student Perspective"（6 月 25 日）

講師：Anne Forryan 氏（サンティアゴ・デ・コンポステーラ大学国際交流室）

"The Impact of Learning Mobility: The Value of Erasmus"（7 月 8 日）

講師：Adriana Lago de Carvalho 氏（ミーニョ大学国際交流室）

Via Lactia プロジェクトにおいて本学と協定を締結している 2 大学からそれぞれ講師を招き、EU 圏の学生がグローバル社会で必要とされるスキルやマインドをどのように身に付けているのかをテーマに講演いただいた。2 回にわたり開催された講演会では、エラスムス計画に焦点をあて、国境を越えて活躍するヨーロッパの学生の活動について知識を得ることができた。

［Forryan 氏によるセミナー風景］

［Carvalho 氏によるセミナー風景］

「語学力と異文化理解力で世界をつなぐ仕事～アルゼンチンと日本の橋渡し役として～」

（7 月 23 日）

講師：相川知子氏（スペイン語通訳・翻訳者、ブエノスアイレス市立外国語大学日本語教師）

相川氏はスペイン語通訳・翻訳や日本語講師として活躍されているほか、アルゼンチンを紹介・報道するテレビ番組のコーディネータや『地球の歩き方』アルゼンチン特派員としての記事執筆など、これまでに日本とアルゼンチン、中南米をつなぐ数多くの仕事に従事してきた。セミナーでは、相川氏が大学卒業後、アルゼンチンで暮らすようになった経緯と、これまでに関わってこられた多様な仕事や出会った人々について、スライドとともに紹介された。開催時期が前期試験中であったため、セミナーとしては小規模の集まりだったが、海外でのキャリアを目指す人がまだ珍しかったころから、グローバルキャリアを積んでこられた先輩の貴重なお話を聞くことができた。

［相川氏（一番左）と参加者との記念撮影］

「日本の難民受け入れ－シリア難民の事例から考える－」（10 月 20 日）

講師：羽田野真帆氏（NPO 法人名古屋難民支援室）

本学スペイン学科卒業生の羽田野真帆氏がコーディネータとして活動している NPO 法人名古屋難民支援室では、東海地方に居住する難民や難民申請者が安定した生活を送れるよう、生活面、法律面での支援をしている。セミナーでは、シリア難民の事例を基に、日本における難民支援の現状と課題について報告があった。

セミナーでは、日本での難民受け入れの経緯とともに、ここ数年来日本での難民認定申請者の増加に反して、非常に限られた人しか認定されていない状況など、他の

［羽田野氏によるセミナー風景］

難民受け入れ国と比較しながら説明された。また、実際に行なわれている生活支援や認定までのプロセスについても、羽田野氏自身の経験談をまじえつつ説明があった。

参加者には、すでに難民支援ボランティアを経験している学生もおり、質疑応答では難民の生活状況の詳細に関する質問や、現在の日本の制度への疑問など、活発な議論が続き、学生の関心の高さがうかがわれた。

「外務省や国際機関で働きたい人たちへ」（11 月 30 日）

講師：田口一穂氏（外務省総合外交政策局国連企画調整課首席事務官）

外務省の総合外交政策局国連企画調整課首席事務官である田口一穂氏を招いて座談会を開催した。セミナーはリラックスした座談会の形式で行なわれ、外国語学部と看護学部の学生 9 名が参加した。まず田口氏から、外務省に入省する方法や試験科目、入省後の仕事内容などをご紹介いただき、近年「外務省専門職員」の採用人数が増加傾向にあり、合格できるチャンスが広がっていること、また女性が仕事を継続しやすい職場であることなどを、資料も示しながらご説明いただいた。国連に関しては、様々な専門機関があり、日本人職員が求められていること、入るルートはさまざまあること、特定の専門領域を持っていた方が有利であることなどから、関心がある人は大学院進学を含めて中長期的に準備してほしいとのアドバイスがあった。

［田口氏によるセミナー風景］

参加者からは、入省するために求められる能力や外国語スキル、入省後の研修、結婚・出産後の海外赴任やキャリア形成、大学での勉強など予定時間を大幅に超過し、活発な質疑応答が行なわれた。

“A Place within the Global: Media, Identity, and Japan”（1 月 21 日）

講師：Brett Hack 氏（愛知県立大学 iCoToBa 専任講師）

This special lecture was initially conducted at another university by iCoToBa instructor Brett Hack. It was improved and adjusted in order to be given at Aichi Prefectural University this semester. This was a student-centered talk; however, it was also open to any interested parties, including

［Brett 氏によるセミナー風景］

university faculty and members of the public. The talk investigated the relationship between the global flow of culture and the entertainment media in which people partake. Inquiries into how this relationship can both aid and impede intercultural understanding were conducted. The event was held on Thursday January 21st, 2016 from 1 PM to 2:20 PM in room H004. It was attended by approximately 70 students, including members of British and American Studies Research and Discussion classes. Questions for the instructor included inquiries on the details of social privilege and request for ideas on how to avoid stereotyping in daily life. As many of the students in the audience had not ever taken an iCoToBa course, this event provided an introduction to the dynamic learning style that the center offers, and will hopefully will lead to a number of first-time enrollers next year.

②外部留学支援団体と連携したイベント

昨年度に引き続きドイツ留学に関連した情報を提供する「県大ドイツデー」と、新たにフランス留学に関連した情報を提供する「フランコフォニー祭」を開催した。

県大ドイツデー（6 月 3 日）

本セミナーは、昨年度に引き続き、DAAD（ドイツ学術交流会）と公益財団法人日独協会の協力により開催したものである。全部で 80 名が参加した。

第 1 部の「交換留学とドイツの大学生活をめぐって」では、東京ドイツ連邦共和国大使館代表によるドイツに関する一般情報の説明の後、DAAD の Habil Ursula Toyka 氏による現地情報および DAAD による奨学金情報について解説があった。日独協会の Tabea Kauf 氏からは、現代ドイツ事情について、社会、文化の多方面から紹介があった。

第 2 部の「ドイツ留学・ドイツ学生生活フォーラム」では、ゲスト講師と本学の教員、ドイツ留学を経験した学生がテーブルに分かれ、さまざまな質問に応じた。第 3 部の「県大生によるドイツ留学報告」では、学生の立場から、留学のアドバイスや意見が述べられた。今回の開催も、DAAD から 800 ユーロの援助を得ており、参加者はドイツのお菓子や飲み物を味わいながら交流を深めた。

本セミナーは、2013 年度から連続して開催している。この成果として、ドイツ語圏の協定大学が増加していることに加え、これまでに 15 名の学生が協定大学以外の 8 大学に留学を果たすなど、着実にドイツ語圏の留学者増加に貢献している。

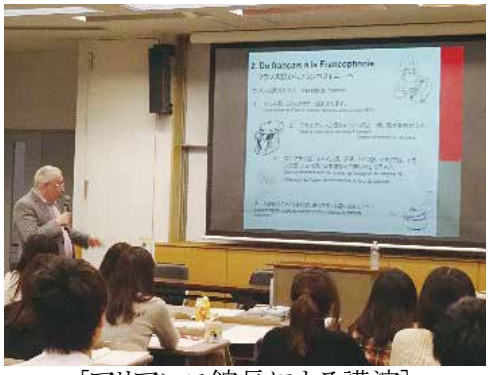
［ドイツデーの広報ちらし］

［ドイツデー参加者の集合写真］

［学生とのディスカッション風景］

フランコフォニー祭（12 月 2 日）

アリアンス・フランセーズ・愛知フランス協会の館長、クリストフ・ドレイエール氏を本学に招き、iCoToBa のモルガン・ダレン教員とフランス語圏専攻、佐藤久美子教員の企画による「フランコフォニー祭」を開催した。約 50 名が参加した。



［アリアンス館長による講演］

まず 13 時から、アリアンス館長の講演が行われ、「グローバル化された現代世界でのフランス語」というテーマを中心に、今日フランス語を学ぶ意義が多面的に論じられた。館長の意義深くかつユーモアに富んだ講演に、会場は熱気と笑いに満ち、特にフランス語を学ぶ学生たちの関心を大いに引き、予定時間を過ぎる 15 時過ぎまで活発な質疑応答がなされた。

15 時過ぎからは、本学の協定大学であるリール第三大学、トゥールーズ大学からのフランス人留学生 5 名と、当該大学で学び帰国した本学の学生 2 名による、大学紹介やフランスでの生活等についての発表が、フランス語圏専攻の原教員の指導のもと行われた。フランス人留学生たちは、日本語で発表し、出席した本学学生たちは、フランス留学への関心を新たにするとともに、日仏学生の交流が活発に行われる機会ともなった。

16 時からは、すでに参加していた学生たちに新たな学生たちも加わり、フランス風の前菜と清涼飲料水を囲み、歓談の時を過ごした。学生たちは、アリアンスの館長やフランス人留学生たちとの活発で自由な会話を楽しみ、日仏両言語によるこの懇親会は、極めて友好的な雰囲気のなか、日仏の参加者の間の交流を深め、予定終了時間を大幅に越えて続けられた。

［懇親会の風景］

開催後のアンケートによれば、参加学生たち全員が、当日の「フランコフォニー祭」に非常に満足し、このような行事が、「たびたび」、「毎年」、あるいは「定期的に」開催されることを要望するとのことであった。本

学学生たちのフランス語・フランス文化の学習意欲を高め、日仏の交流をより活発なものにしたこの行事は成功裡に終ったといえよう。また、学生たちの要望に従い、今後も引き続き同様の行事が開催されることが望ましい。

③高大連携イベント Immersion Program（12 月 12 日～13 日）

昨年度にひきつづき、岡崎市愛知県青年の家において、外国語だけで生活することで、その言語能力を高めるプログラム「Immersion Program（イマージョン合宿）」を開催した。今回専攻言語である 5 言語（英語、中国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語）全てで開催する予定だったが、ドイツ留学経験者がプロジェクトに登録しなかったため、4 言語で準備を進めた。しかし実際は、中国語とフランス語のプログラムには大学からの参加者が集まらず、最終的には、英語とスペイン語だけとなった。しかし、当日のプログラムでは、フランス語を担当するリーダーが参加し、高校生が初習外国語を体験する「外国語アワー」と「タレントショー」でフランス語の楽しさを紹介した。この結果、フランス語を専攻したいという高校生が出てきたことはこのプログラムの成果であると言えよう。

県大生はリーダーを含めて 22 名が参加したほか、高校生（スーパーイングリッシュランゲージハイスクールなど）が英語枠で 10 名参加した。そのうちの1人は希望により 2 日目はスペイン語プログラムに変更した。各言語で 2 日間を過ごしたほか、媒介言語を用いない直接法によるフランス語、スペイン語の入門講座と English Café を 2 コマ設けた。iCoToBa の大山守雄教員とセルヒオ・ネリ教員の 2 名が参加し、マルチ・リンガルの世界を高校生が体験した。

1 日目は全参加者の 1 分間紹介のあと、言語ごとにわかれてアイスブレーキングの時間を設けた。その後スキット作りに取り組み、夜のタレントショーで発表する内容をチームごとに練習した。参加者が例年より少なかったため、タレントショー後の自由時間は各言語でゲームをしたり話し込んだりして、夜遅くまで交流した。

2 日目は英語で指示が入るラジオ体操からスタート。朝食・掃除を終えたあと、各言語で独自のプログラムを 1 時間単位で行った。クイズ大会や留学体験発表、ゲームとリーダーの創意工夫を競い合った。27 時間という短い時間だが、参加者は外国語でコミュニケーションをとり続けるのは案外大変だということは実感できたのではないかと思う。高校生参加者からは今回も高い評価をもらったが、来年度はロール・モデルとしての県大生がより多く参加することで、さらに高大連携の効果が高まると思われる。

［Immersion Program の活動風景］

④他大学との異文化交流イベント

Viva Italia（1 月 27 日）

本学グローバル人材育成推進室と愛知県立芸術大学（以下、芸大）との共同事業として、iCoToBa で「イタリアデー・VIVA ITALIA」を開催した。本イベントは芸大のイタリア週間の一環として実施されたものである。

［イタリア語でサンタルチアを歌う］

第 1 部の芸大音楽学部教授、水野留規氏と芸大の協定大学であるサレルノ大学講師のアンナリーザ・ポンティス氏によるイタリア語発音講座では、多くの参加者がイタリア語の発音に挑戦した。第 2 部では、芸大非常勤講師のロムアルド・バローネ氏のクラリネットの演奏にのせて、芸大の学生 2 名が「サンタルチア」を歌い、参加者もイタリア語での合唱にチャレンジした。第 3 部ではアンナリーザ・ポンティス氏によるイタリアの若者の文化、習慣に関する講演があり、日本の若者との比較を交えて興味深い話を聞くことができた。イベントの参加者は 35 名で、約 20 名の芸大生が参加した。

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

本年度は、昨年度と比べ、セミナーの質、量ともに増加した（前年度 3 回→本年 9 回）。グローバルキャリアに関するセミナーでは本学卒業生を 3 回招き、学生はグローバルに活躍するキャリアモデルを身近に感じることができた。

また、本年度は外部と連携したイベントの実施回数も増えた。ドイツデーとフランコフォニー祭の開催は、学生にとって、留学に関する情報を多面的に得る機会となった。また、高大連携と他大学との連携など、本学を核とした連携が着実に進んでいる。

②改善すべきこと

高大連携を目指したイマージョン合宿については、残念ながら本年度は参加者が例年と比べ多くなかった。3 年次の留学経験者のうち、リーダーとして参加を希望する学生は後期に集中するが、高等学校の参加希望者は夏休みのほうが都合がよいため、双方の開催希望時期のすり合わせが難しい。また、これまでは外部の公共施設を宿舎として利用しているが、夏休み期間は利用が集中するため、希望の日時の確保が難しいという問題もある。

イマージョン合宿は高大連携の観点からも評価が高いため、来年度以降、継続的に実施する体制を見直す必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

本年度実施したセミナーは、本学の卒業生の協力も得て、充実したものになった。本学を卒業しグローバルに活躍する先輩諸氏は、学生にとって身近なロールモデルであり、来年度もこのようなセミナーを開催するとともに、同窓生のネットワークを拡げ、本学を盛り立てていく。また、外部留学支援団体と連携し、学生の留学支援を目指した、国別・地域別のイベントを開催する。高大連携事業のひとつであるイマージョン合宿の開催方法について見直し改善を加える。

11. 西日本第1ブロック共同シンポジウム

1. 概要

スーパーグローバル大学等事業経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援の2015年度西日本第一ブロック共同シンポジウムが、2015年11月14日(土)13時より愛知大学名古屋キャンパスにて行われた。

経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援(GO GLOBAL JAPAN)は経済社会の発展を牽引し、グローバルな舞台に積極的に挑戦し、世界に飛躍できる人材の育成を図るために、学生のグローバル対応力を徹底的に強化し、推進する組織的な教育体制整備の支援を行うことを目的として文部科学省が行っている大学を対象にした補助事業である。

本事業において全国の採択大学を地域により4つのブロックに分け、西日本第一ブロックはタイプ A(全学推進型)に同志社大学、関西学院大学、タイプ B(特色型)に神戸大学、福井大学、鳥取大学、愛知県立大学、愛知大学、京都産業大学、立命館大学の計 9 大学が採択されている。

西日本第一ブロック採択の 9 大学は、2013 年には同志社大学で「グローバルの普遍性について」を、2014 年には神戸大学で「大学が育成するグローバル人材とは」をテーマに各々共同シンポジウムを開催した。今年度は愛知県立大学と愛知大学の共催で「地域に根ざしたグローバル人材とは」をテーマに共同シンポジウムを開催した。各採択大学はこれまでグローバル人材育成の多様な取り組みを展開してきたが、グローバル化への対応は日本各地域にとっても喫緊の課題であり、また「地方創生」が叫ばれる今日において、グローバル人材の育成を通じていかに地域社会の発展に貢献できるかは、大学自身の大きな課題でもある。今回のシンポジウムでは、大学、企業、自治体、さらに高等学校や NPO 団体の具体的な取り組みを紹介し、「地域に根ざしたグローバル人材」育成のあり方を討議した。

2. 平成 27 年度の目標

2015 年のシンポジウムでは以下のような問題意識を念頭においている。

「近年、地域に軸足をおき、内からグローバル化を支える人材育成の重要性がますます高まっている。では、高等学校、自治体、企業・NPO 団体等と協働しつつ、地域を支える、地域に根ざしたグローバル人材を育成するために、大学は何ができるのか。」

グローバル人材育成支援事業採択大学および東海地方(おもに愛知県)の教育機関や自治体、NPO 団体等の人材育成の取り組みについて情報共有を図ることを第一の目的とする。また、地域を支えるグローバル人材育成のありかたや今後の可能性について、有識者からアドバイスを得るとともに、地域の教育機関、自治体、企業、NPO とのネットワーク構築の機会にする。

3. 平成 27 年度の実績

2015 年 11 月 14 日（土）12 時 50 分より 17 時 20 分まで愛知大学名古屋キャンパス講義棟 11 階にて、以下のようなシンポジウムを開催した。全体像を示すために当日のプログラムを再掲する。

本シンポジウムの企画、立案、準備は、本学ではグローバル推進室の吉池孝一（室長）、宮谷敦美（副室長）、川尻文彦（副室長）、学務課の夏目美和が担当した。愛知大学の事業担当者（砂山幸雄副学長、安部悟現代中国学部長、愛知大学教務課高橋正樹、七原一樹、神野恵子）と数度にわたる会合を持ち、周到な準備作業を行った。

スーパーグローバル大学等事業
経済社会の発展を牽引するグローバル人材育成支援
2015 年度西日本第一ブロック共同シンポジウム
「地域に根ざしたグローバル人材とは　Community-Rooted Global Human Resources」

［プログラム］

12:50～ 13:00　開会挨拶
高島忠義氏（愛知県立大学学長）

13:00～ 13:45　基調講演
「世界を魅了する中部地域とグローバル人材」
石田建昭氏（東海東京証券代表取締役会長・最高経営責任者 CEO・中部経済同友会直前代表幹事）

13:45～ 14:45　個別発表
「日韓学生による環境実践活動と地域国際交流」
田川公太朗氏（鳥取大学地域学部准教授）
「大学・地域協働型グローバル人材育成」
小幡浩司氏（福井大学国際交流センター教授）
「地域の課題解決も目指すグローバル人材育成」
宮谷敦美氏（愛知県立大学外国語学部教授）

［シンポジウムちらし］

14:45～15:30　Coffee Break・ポスターセッション
［参加高校］名古屋大学教育学部附属中・高等学校、旭丘高等学校、時習館高等学校、名城大学附属高等学校、春日丘高等学校、清林館高等学校

［参加自治体等］あいち国際ビジネス支援センター、可児市、高山市、独立行政法人国際協力機構(JICA)中部国際センター、NPO 法人 G-net
［参加大学］関西学院大学、福井大学、鳥取大学、京都産業大学、愛知県立大学、愛知大学

［ポスターセッション風景］

15:30～ 16:00 特別講演
「Heart of JAPAN ～Technology & Tradition」
大村秀章氏（愛知県知事）

［大村知事の講演風景］

16:10～ 17:10 パネルディスカッション
コメンテーター：大森昭生 共愛学園前橋国際大学副学長
パネリスト：田中 明 高山市役所ブランド・海外戦略部部長
南田修司 NPO 法人 G-net 共同代表・理事
山田史良 同志社大学国際連携推進機構国際化推進室長
野間春生 立命館大学情報理工学部副学部長
コーディネータ：砂山幸雄 愛知大学副学長

17:10～ 17:20 閉会挨拶 佐藤元彦愛知大学学長
17:30～ 19:00 情報交換会

［パネルディスカッションの風景］

講演の要旨は以下の通りである。

「世界を魅了する中部地域とグローバル人材」（石田建昭氏）
これからの若い人達が世界の中で活躍するためにはどうしたら良いのか。オープンでグローバルな視点を持ち、異文化に触れる機会を増やし、世界の源流を知る。日本人としてのアイデンティティーを大事にし、自らの可能性にチャレンジする。そうした人材の力が世界を魅了する地域を創出し、輝かしい将来の日本を牽引することになる。

「日韓学生による環境実践活動と地域国際交流」（田川公太朗氏）

日本海沿岸の海洋ごみ問題を題材とし、鳥取大学と韓国・南ソウル大学の学生が山陰地域の住民・自治体・教育機関と協働して、環境保全・啓発や国際交流等を実践する活動を紹介した。

「大学・地域協働型グローバル人材育成」（小幡浩司氏）

平成 28 年設置の国際地域学部が目指す地域協働型のグローバル人材育成構想、および実際の先行取組事例として SGH 採択校の海外留学プログラム支援について紹介した。

「地域の課題解決も目指すグローバル人材育成」（宮谷敦美氏）

愛知県立大学では、企業や NPO と連携し、地域のグローバル化を担う人材育成に取り組んでいる。「地域ものづくり学生共同プロジェクト」等の事例紹介から、地域の大学におけるグローバル人材育成のありかたを示した。

「Heart of JAPAN ～Technology & Tradition」（大村秀章氏）

大村知事は、愛知県の強みについて、①国土の中央、大都市圏と豊かな自然、交通ネットワークの充実、②人口の自然増、社会増でともにプラス、③産業集積日本一、④リニア中央新幹線の整備、⑤港湾の機能強化、⑥航空ネットワークの充実を挙げた。また、Technology & Tradition をキーワードに、愛知県の現状と今後の展望について、以下の項目について紹介した。

<u>Heart of JAPAN ～Technology & Tradition</u>

1. 国土の中央、大都市圏と豊かな自然、交通ネットワークの充実、 2. 人口の自然増、社会増でともにプラス、3. 産業集積日本一、 4. リニア中央新幹線の整備、5. 港湾の機能強化、6. 航空ネットワークの充実

<u>Technology / 産業首都あいち</u>

1. 世界一の自動車産業の集積、2. 燃料電池自動車（FCV）の普及促進、3. アジア no.1 航空宇宙産業クラスター形成特区、4. MRJ（三菱リージョナルジェット）、5. あいちロボット産業クラスター推進協議会、6. 工作機械産業の集積

<u>Technology / 人が輝く愛あいち</u>

1. 産業人材・雇用、2. モノづくり人材の育成、3. 愛知総合工科高等学校の開校、4. あいち・ウーマノミクス研究会

<u>Tradition</u>

1.「あいち観光元年」、2. 文化芸術の発信、3. スポーツを活用した地域振興・魅力発信

<u>あいちのグローバル展開</u>

1. あいちをターゲットとした国際戦略、2. グローバル人材の育成・獲得

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

シンポジウムの開会の辞で高島忠義愛知県立大学学長は、グローバルの意味内容を近年学界でさかんにとなえられているグローカル（glocal）の概念を借りて説明した。大雑把にいえば、グローバルとはローカルとの相互作用においてのみ成り立ちうるというものである。私たちが求めるグローバルとは上滑りな「国際化」や「対外開放」とは異なった内実が求められる。まさしく本シンポジウムでは大学教育に軸足をおいたグローバルとはいかなるものか、過去数年の実践をもとに、その成果と今後の課題について真摯な議論が行われたといえる。

本事業の中間評価でSを与えられた共愛学園前橋国際大学でのグローバル教育の実践例からは、学生目線に立った大学教育とは如何にあるべきか本学の課題が明らかになった。特に、語学教育のみならず、学生の自発性を引き出す仕掛けについて、本学でも取り入れるべきポイントが整理できた。

パネルディスカッションでは、学校関係者以外の取り組みから多くの学びを得た。高山市の取り組みから、激増する海外からの観光客への対応について、来場者も多くのヒントを得たのではないだろうか。グローバル教育といえば、とかく文系の語学、教養教育に偏しているきらいがあるが、このシンポジウムでは、複数の報告者から理系学部でのグローバル教育実践についても紹介され、幅広い視点からグローバル人材育成について情報共有を行うことができた。ポスター報告ではスーパーグローバルハイスクールを中心に 6 校の高等学校の参加があり、高大連携の観点でも有意義だったと評価できよう。

シンポジウムの質疑応答は非常に活発であった。また大学関係者以外にも一般市民も参加しており、予想を超える 250 名規模の盛会となった。またシンポジウムの運営についても愛知大学、愛知県立大学関係者の尽力でまったく滞りなかった。

本シンポジウムを通じてグローバル教育について多面的な側面について認識を深め、共有することができた。この点が最大の収穫である。

②改善すべきこと

本シンポジウムは成功裏に終わったとみなすことができる。グローバル教育のカリキュラム構築、発進型授業の実践、留学のもつ意義、大学教育と社会とのかかわり、語学教育、海外大学との交流など討論のなかで出てきたいくつかの課題について、大学教育の実践においてより深めていくことが重要である。

5. 平成 28 年度に向けての方策

本学でのグローバル人材推進事業をさらに進展させ、本学での教育内容に反映させていくことが求められる。日本社会の変化は激しく、求められるグローバル人材もつねに変化してい

る。学生に真の実力をつけさせるためにはどのような教育が可能であるか、さまざまな観点から絶えず考えていく必要があるであろう。

本シンポジウムは 2016 年度、鳥取大学で開催されることが決まっている。あらためて実りある議論が行われることを期待したい。

12. 入試・広報活動

1. 概要

本学の「グローバル人材育成」に関する取り組みを広く周知すると共に、「グローバル人材候補者」になりうる高校生に、本学を進路先として選択してもらうこと、入学予定者に対する早期の動機づけを重視し、主に次の 3 つを柱として取り組んでいる。

①高校（生）向けの入試広報活動と高大連携強化
②新しい入試（全国枠の推薦入試（グローバル人材枠））制度の定着と広報
③グローバル人材の育成を見据えた入学前指導の充実

①に関しては、オープンキャンパスやキャンパス見学ツアー、出張模擬授業やイマージョン合宿（第 10 章参照）等を行っている。高校および PTA を対象としたキャンパス見学ツアーには、iCoToBa の施設・授業見学をコースに組み込んでいる。また、8 月開催のオープンキャンパスでは、保護者対象説明会を 2 回に分けて開催し、ここには 200 名を超える参加があった。また、本年度は、愛知県内のスーパーグローバルハイスクール指定校と連携し、西日本第1ブロック共同シンポジウムを開催した。

②に関しては、県内の高校を対象とする推薦入試（外国語学部・定員 23 名）に加えて、平成 26 年度から外国語学部において、「全国枠のセンター試験利用型推薦入試（グローバル人材枠、定員 43 名）」を導入し、全国枠推薦入試制度の定着に力を入れている。

③については、上記全国枠での推薦入試合格者を対象とし、2 月中旬に「入学前オリエンテーション」を実施しており、英語力の維持・向上や主体的に広い視野をもって学修に取り組むための動機づけを行っている。

2. 平成 27 年度の目標

①高校（生）向けの入試広報活動と高大連携の強化

公開講座、模擬授業、ガイダンス、高校訪問、など、さまざまな手段により「グローバル人材育成プログラム」の存在や魅力を、広く高校（生）に周知、アピールする。こうした活動を通じて、グローバルな視野を持った高校生に入学の動機づけを行い、グローバル人材に求められる基本的な能力（積極性や協調性、コミュニケーション力など）を有する入学者を増やす。

グローバルミニオープンキャンパスやイマージョン合宿など高大連携の拡大を視野に入れた行事を行ない、高校教員に本学の取り組みを知ってもらうとともに、スーパーグローバルハイスクールとの連携を強化する。

②「大学入試センター試験を課す全国枠の推薦入試（グローバル人材枠）」制度の広報

各種進学セミナーやグローバルミニオープンキャンパスの実施を通して、「大学入試センター試験を課す全国枠の推薦入試（グローバル人材枠）」の周知に向けた広報活動を行なう。

③入学希望者、入学予定者に対する指導（動機づけ）

本学に興味を持つ高校生に対し、英語と共に、他の言語学習にも興味を持つきっかけとなるようイマージョン合宿を実施する。また、全国枠推薦入試による入学予定者に対し、入学前オリエンテーションを実施し、入学前の準備期間に英語力をさらに伸ばし、大学での学修や留学に対する動機付けにつなげさせる。

3. 平成 27 年度の実績

①高校（生）向けの広報の拡充

通常の入試広報活動に加え、平成 27 年度は愛知大学と共同で「西日本第 1 ブロック共同シンポジウム」を開催し、本学教員が企業や NPO と連携し地域のグローバル化を担う人材育成の取り組みを紹介した。また、特別講演では愛知県知事大村秀章氏に愛知県の取組について熱く語っていただいた。同シンポジウムには自治体、NPO 団体、高校がそれぞれ地域に根ざしたグローバル人材育成に関わる特徴ある取り組みをポスターセッションにて紹介し、教育関係者、高校生、一般市民など約 200 名が参加し、本学の取り組みを周知するとともに、近隣高校と情報交換を行なった。

高校生やPTAなどによるキャンパス見学ツアーやオープンキャンパスでは、iCoToBa（多言語学習センター）をプログラムに組み込み、可能なかぎり「体験型」の案内を取り入れた。このほかにも、外国語学部教員による高校出張講義依頼や高校の大学訪問を積極的に受け入れている。平成 27 年度に高等学校で行った出張ガイダンス・模擬授業（表 12-1）、iCoToBa を訪問した高等学校（表 12-2）共に、着実に増加しており（どちらも前年度比 4 校増加）、「グローバル人材プログラム」や iCoToBa の存在は、高校生が本学を選択するプロセスで大きな影響を与えていると言えよう。

［表 12-1　平成 27 年度出張ガイダンス・模擬授業実施一覧］

学校名	学年	実施日	内容	参加者数	担当
岐阜県立斐太高等学校	2・3	5 月 21 日	学部学科説明	20	中国学科：小座野　八光
愛知県立旭野高等学校	2	6 月 1 日	模擬授業	32	スペイン語圏専攻：谷口　智子
愛知県立常滑高等学校	2	6 月 11 日	模擬授業	59	英米学科：宮浦　国枝

帝京大学可児高等学校	2	6 月 22 日	模擬授業	28	英米学科:エレノア・ロビンソン・山口
愛知県立国府高等学校	3	7 月 2 日	模擬授業	40	ドイツ語圏専攻: 中屋　宏隆
三重県立松阪高等学校	1・2・3	7 月 13 日	模擬授業	40	中国学科: 小座野　八光
愛知県立小牧南高等学校	3	7 月 15 日	模擬授業	35	英米学科:森田　久司
名古屋市立向陽高等学校	1	7 月 15 日	模擬授業	30	国際関係学科: 半谷　史郎
愛知県立津島高等学校	2	9 月 17 日	模擬授業	21	フランス語圏専攻: 中田　晋自
愛知県立天白高等学校	1	10 月 8 日	学部学科説明	30	国際関係学科: 高橋　慶治
岐阜県立岐阜北高等学校	1	10 月 16 日	学部学科紹介 模擬授業	67	英米学科: 熊谷　吉治
愛知県立江南高等学校	2	10 月 19 日	模擬授業	32	スペイン語圏専攻: 谷口　智子
愛知県立豊田南高等学校	2	10 月 19 日	模擬授業	22	スペイン語圏専攻: 渡会　環
愛知県立豊丘高等学校	1・2	10 月 21 日	模擬授業	59	中国学科:中西　千香
愛知県立豊田北高等学校	1・2	10 月 21 日	模擬授業	39	英米学科: 小澤　正人
愛知県立刈谷北高等学校	2	10 月 22 日	模擬授業	45	フランス語圏専攻: 石野　好一
愛知県立半田東高等学校	2	10 月 28 日	模擬授業	50	ドイツ語圏専攻: 杉原　周治
愛知県立高蔵寺高等学校	2	10 月 29 日	模擬授業	39	英米学科: 中村　不二夫
愛知県立丹羽高等学校	2	11 月 5 日	模擬授業	49	英米学科:池田　周
岐阜県立大垣東高等学校	2	11 月 5 日	模擬授業	27	中国学科: 小座野　八光
岐阜県立恵那高等学校	2	11 月 5 日	模擬授業	40	ドイツ語圏専攻: 今野　元
愛知県立瑞陵高等学校	2	11 月 11 日	模擬授業	33	国際関係学科: 髙阪　香津美
愛知県立東海南高等学校	2	11 月 12 日	模擬授業	30	中国学科: 小座野　八光

愛知県立半田高等学校	2	11 月 13 日	模擬授業	36	英米学科：大森　裕實
名古屋市立桜台高等学校	2	12 月 14 日	模擬授業	27	スペイン語圏専攻： 谷口　智子

［表 12-2　平成 27 年度 iCoToBa 訪問者一覧（高等学校）］

学校名	学年等	月日	訪問者数			
			生徒	教員	PTA	合計
京都府立鳥羽高等学校	2	4 月 14 日	83	4	0	87
静岡県立袋井高等学校	2	5 月 22 日	83	4	0	87
愛知県立鶴城丘高等学校	2・3	6 月 3 日	118	5	0	123
岐阜県立関高等学校	保護者	6 月 9 日	0	2	86	88
愛知県立阿久比高等学校	保護者	6 月 22 日	0	3	50	53
愛知県立成章高等学校	2	7 月 6 日	133	3	0	136
富山県立南砺福野高等学校	2	7 月 30 日	38	3	0	41
三重県立津西高等学校	1	9 月 4 日	37	2	0	39
名古屋市立緑高等学校	1	10 月 7 日	42	3	0	45
名古屋市立緑高等学校	1	10 月 8 日	41	2	0	43
愛知県立日進高等学校	1	10 月 27 日	10	2	0	12
愛知県立日進高等学校英米学科入学希望者	1	11 月 10 日	32	4	0	36
計			617	37	136	790

②外国語学部・グローバルミニオープンキャンパスの実施

平成 27 年 7 月 20 日に、外国語学部の「大学入試センター試験を課す全国枠の推薦入試（グローバル人材枠）」の広報を目的とし、「外国語学部・グローバルミニオープンキャンパス」を開催した。昨年度はグローバル人材育成推進室単独で開催したが、今年度は外国語学部、iCoToBa および入試・広報課と協力して実施した。

本年度も前年度にひきつづき、東海 3 県のスーパーグローバルハイスクールおよび英語科や国際科を有する高校（主に 2、3 年生の生徒および引率教員）を対象として、参加者を募った。本学の特色でもある少人数教育の語学授業を体験してもらうため、参加人数は 30 名程度の規模にとどめた。5 校から 23 名の生徒と 1 名の教員が参加した。参加校および参加人数を以下に示す。

愛知県津島高等学校（4 名）、安城東高等学校（4 名）、豊田北高等学校（4 名）、名古屋市立名東高等学校（3 名）、岐阜県立関高等学校（8 名、引率教員 1 名）

プログラムは、大きく4つの内容から成る。①iCoToBa 教員による外国語の体験授業（2 言語）、英語とフランス語、スペイン語、ドイツ語、中国語から 1 言語を選ぶ、②iCoToBa 紹介、③教員と学生による学科・専攻紹介、④留学制度の説明である。最後に全体を通したふりかえりとアンケート記入を行なった。

参加者を対象に行なったアンケート評価結果は表 12-3 の通りである。

［表 12-3 外国語学部・グローバルミニオープンキャンパス評価］

内容	評価平均
外国語の体験授業	4.88
iCoToBa 紹介	4.75
学科・専攻説明	4.67
留学説明	4.58
プログラム全体	4.75

評価は 5 点満点。参加者 23 名全員が回答

自由記述欄には、次のような意見が寄せられた。（抜粋）

- 在学生の方とお話できる機会があったのはとてもよかったです。英語ともうひとつの外国語の授業が受けられたのもよかったです。頑張って入学したいと思います。
- 大学について何もわからなかったので、わかりやすい説明に助けられました。私は英米学科と国際関係学科の違いが知りたかったです。
- 去年もこのグローバルミニオープンキャンパスに参加したのですが、去年と違って学科の先輩達と話すことができて、留学制度についていろいと聞けてよかった。留学以外の大学生活やカリキュラム、専攻についてももう少し聞きたかった。
- 体験授業を受けて、言語に触れられて、何語を学ぼうかもっと深く考えようと思えました。
- TOEIC800 点を目指したいです。来年学部生徒として愛県大に戻ってきます。
- 学部案内の時間が短い。第一希望の学科になかなか行けず、後から時間をとってもらったため、もう少し長いとよい。
- 授業が少し短く感じたので、もう少し長かったらいいなと思った。普段関わりのない言語と関わることができてとてもよかった。
- 県大の外国に対してのやる気がとてもよかった。iCoToBa という、ふれあいの場のことや授業風景がわかってよい。
- 授業を体験できて、本当にこの大学に来たいと思えたし、やる気がでました。
- 授業のことはよく分かったけど、学校生活についてはあまり知れなかったので、普段の生活も紹介してもらえるともっと良いと思いました。

本学では 8 月に全学でのオープンキャンパスが開催され、ここでは外国語学部の全般的な

情報や講義の雰囲気を知ることができる。これと異なり、グローバルミニオープンキャンパスでは、留学制度をはじめ、高校生にとってなじみがあまりない英語以外の言語の魅力を体験できるため、高校生がより積極的に外国語を学ぶ意味を考えることができる点が利点である。今回の自由記述欄でも専攻言語選択について言及しているものもあった。不本意入学者を減らし、外国語学習に対して高い意識を持った学生を確保するためにも、このような取り組みは意味があると言えよう。

［グローバルミニオープンキャンパスの風景］

③「大学入試センター試験を課す全国枠の推薦入試（グローバル人材枠）」の実施

平成 26 年度から「全国枠のセンター試験利用型推薦入試（グローバル人材枠、定員 43 名）」を導入している。平成28年度入試は167名の応募があり、47名が合格した。（表12-4）。

［表 12-4　全国枠センター試験利用型推薦入試（グローバル人材枠、定員 43 名）実施結果］

学科・専攻	外国語学部・平成 28 年度入試状況　（括弧内・27 年度数値）			
	募集定員	志願者数	合格者数	実質競争倍率
英米学科	12	54 (65)	12 (13)	4.5 (5.0)
フランス語圏専攻	6	14 (26)	7 (6)	2.3 (4.3)
スペイン語圏専攻	6	23 (32)	7 (8)	3.8 (4.0)
ドイツ語圏専攻	6	25 (12)	6 (6)	4.2 (2.0)
中国学科	6	15 (18)	7 (7)	2.5 (2.6)
国際関係学科	7	36 (29)	8 (8)	5.1 (3.6)
合計	43	167 (182)	47 (48)	3.9 (3.8)

④ 入学予定者に対するオリエンテーションの実施

昨年度に引き続き、グローバル人材育成を見据え、全国枠推薦入試合格者に対する入学前オリエンテーションを開催した。

日時: 平成 28 年 2 月 16 日(水)14 時～16 時 40 分
場所: iCoToBa (多言語学習センター)
参加者数: 合格者 47 名(13 府県)中、46 名(13 府県)

当日は次のような企画をおこなった。

[第 1 部:アイスブレーキング・セッション]

参加者同士の自己紹介、自分の学科/専攻を選んだ理由、将来の夢や大学時代にチャレンジしたいことなどを共有する。前半は学科/専攻ごとに、後半は様々な学科/専攻を混ぜてグループをつくり、様々な考え方に触れることで相互に刺激しあうきっかけをつくる。教員、ネイティブ教員も参加し、一部英語を交えて行なった。

[第 2 部:先輩学生との交流・ディスカッション]

各学科・専攻ごとに先輩学生がチューター役となり、所属学科/専攻の特長を PR し、大学の授業、生活全般、留学についてアドバイスし、質問に答えた。

[第 3 部:e-Learning 演習と語学学習アドバイス]

iCoToBa で提供している e-Learning 教材を実際に使って実習を行うとともに、講師から語学学習に関するアドバイスを行った。参加者には仮 ID が付与され、春休み中もシステムを利用して自主的に学習できるようにした。

[第 4 部:ふりかえり]

オリエンテーション全体をふりかえり、大学時代にチャレンジしたいことをあらためてイメージし、入学までの期間どんな取り組みをするか、どのような大学生活を送るかを考えさせた。

参加者を対象に行なったアンケート評価結果は表 12-5 の通りである。

[表 12-5 入学前オリエンテーション・プログラムの評価]

内容	評価平均
第 1 部 アイスブレーキング・セッション	4.77
第 2 部 先輩学生との交流・ディスカッション	4.95
第 3 部 e-Learning 演習と語学学習アドバイス	4.58
第 4 部 ふりかえり	4.61
プログラム全体	4.86

評価は 5 点満点。参加者 46 名全員が回答。

オリエンテーション実施後に行なったアンケートの「県大を選択した理由(自由記述)」では、オープンキャンパス(9 人)、大学ガイダンス(1 人)、イマージョン合宿(1 人)、大学祭(1 人)、合計 12 人の学生が大学に直接アクセスして得た情報を基に決定していることが分かった。こ

のような高校生が県大の魅力を直接感じることのできるイベントには一定の効果があると評価ができよう。

［入学前オリエンテーションの様子］

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

これまでの広報活動や本年度実施したグローバル共同シンポジウムをきっかけとし、グローバル人材育成に重点的に取り組む高校とのつながりが拡がっている。高大連携の取り組みとして、スーパーグローバルハイスクールである、愛知県立旭丘高等学校と情報交換をするとともに、旭丘高等学校のアジア理解を目指した留学生との交流授業に本学の台湾人の学生を派遣した。

入試広報の効果としては、たとえば、推薦入試の志願理由書の中で、「グローバル人材プログラム」やオープンキャンパスでの iCoToBa 訪問・授業体験に関する言及が目立つようになっている。このことからも本学の「グローバル人材プログラム」や iCoToBa の存在は、本学への志望動機となっていることが分かる。また、夏のオープンキャンパスで企画した保護者向け説明会および留学説明会も 200 名以上が参加するなど、注目を集めている。

外国語学部の「全国枠センター試験利用型推薦入試（グローバル人材枠、定員 43 名）」に関しては、導入初年度（平成 26 年度）に比べて応募者数や出身県数が減ったものの、平成 28 年度入試は、167 名の応募があった。全国枠での推薦入試制度の新設の狙いのひとつは、全国から優秀で目的意識の明確な人材を本学に集めることにある。現状は、本学在学生の 70％以上が愛知県内出身者であるが、全国を対象にグローバル人材を目指す意思と能力を持つ生徒に推薦の枠を広げたことで、学生構成が「多様化」することは、結果として県内出身の学生にとっても大きな刺激となる。

推薦入試合格者を対象とした入学前オリエンテーションの実施の趣旨は、①春休み期間を有効に利用し語学力の向上を図ること、②大学合格が「ゴール」ではなく、「スタート」なのだと強く認識させることの 2 点にある。参加者は、春休み中に取り組むこととして、e-Learning を活用した英語学習や、自身が専攻する言語の基礎知識に関する学習、言語が使われている地

域に関する学習（例：中国史など）について言及しており、自ら学ぶ主体として何をすべきか考えるきっかけになっていると評価できる。

②改善すべきこと

本学で行っている入試広報については、全般的に効果があがってきていると考えられる。来年度もこれらの行事を実施していくが、同時に教職員の入試広報の負担増についても意見があがっている。来年度は、グローバルミニオープンキャンパスなどを含め、継続的な入試広報方略を考えていく必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

入試制度改革および高大連携の観点から、ひきつづき、以下の課題に取り組んでいく。

第一に、グローバル人材育成推進室と入試広報室の連携を一層強化し、様々な入試広報活動の機会をとらえて本学の「グローバル人材プログラム」や全国枠推薦入試制度について周知活動を行なう。引き続き、①明確でわかりやすいアドミッション・ポリシー、②グローバル人材育成推進事業の全体像が簡単にわかる広報（ターゲットは高校生、教師、保護者）、③グローバル人材育成プログラム科目を外国語学部の正課科目へ取り込み、外国語学部のカリキュラムの特色として、平成 29 年度にスタートする新たな「グローバル人材プログラム」等の発信に力を入れる。また、さまざまな高大連携事業（講演会、模擬授業等）も広報機会として活かす。

第二に、全国枠推薦入試に関して、合格者に対する入学後のフォローアップ調査を行う。当該推薦枠による入学者の成績パフォーマンスや学科・専攻での影響力、大学全体へのインパクトなど、その効果を量的、質的に分析していく。また、本推薦制度による応募者がゼロ、または極めて少ない都道府県については、広報ターゲットを検討するなど効果的なアプローチ方法を考える必要がある。

第三に、スーパーグローバルハイスクール採択校との連携や愛知県が進める「あいち国際戦略プラン」（平成 25 年度～29 年度）の中に位置づけられているグローバル人材育成推進事業（あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業等）との連携など、さまざまな高大接続のあり方を検討する。

また、第 10 章でも言及したが、卒業生によるセミナーについても情報発信し、本学が輩出している人材のグローバルな活躍を広く周知する。

13. 情報発信

1. 概要

本学の「グローバル人材育成推進事業」に関する情報を広く発信するために、専用のホームページの開設と共にパンフレット等の印刷物を作成した。また、本事業関連会議等に参加し、他大学と取り組みに関する情報交換を行い、本学の取り組みに反映させた。また、大学広報のために大学進学セミナーや高等学校でのガイダンスも実施した。

2. 平成 27 年度の目標

本学の取組を紹介するパンフレット等の印刷物を作成するとともに、多言語学習センターiCoToBa、および「グローバル人材育成推進事業」の HP の内容を充実させる。また、グローバル人材育成推進事業の全国およびブロック会議に積極的に出席し、他大学と取り組みに関する情報交換を行う。その他、各種マスコミに情報を提供する。

3. 平成 27 年度の実績

①グローバル人材育成推進室・iCoToBa ホームページの運営

平成 25 年 4 月に iCoToBa のホームページを開設し、授業の開講情報、行事予定および報告、各種募集内容など、定期的に最新情報を発信している。iCoToBa スタッフブログでは、外国人教員からのコメントを随時掲載し、Students' Voice では本施設を頻繁に利用する学生に原稿を依頼し、学生の立場に立った情報発信も行っている。今年度の追加機能として、パンフレットや、教員が作成した教材、報告書等をダウンロードできるページを新設した。

グローバル人材育成推進事業のホームページは平成 25 年 12 月に開設した。本事業に関連する行事案内および報告の情報発信をしている。留学、インターネットポートフォリオ、外国語学習支援等、関連するサイトのリンクを貼り、閲覧者が求める情報を的確に提供している。

本事業に関して、Web サイトにアップした情報を、表 13-1 に示す。

［表 13-1　本事業に関する Web での情報発信実績］

Web サイト名	発信数
グローバル人材育成推進室 Web サイト	21
iCoToBa Web サイト	21

また、本学公式ホームページの「新着情報」にも適宜グローバル関連の情報をアップしている。本年度は、外国語でのコンテストやトビタテ留学での受賞情報について発信した。

グローバル人材育成推進事業 Web サイト URL	http://www.for.aichi-pu.ac.jp/global/
iCoToBa Web サイト URL	http://www.for.aichi-pu.ac.jp/icotoba/

②グローバル事業に関する講演・発表・広報活動

a) NAFSA 2015 (May 27th, 2015)

Title"Effective assessment tool for language acquisition and personal growth: On the case study of Global Project at Aichi Prefectural University"

Presenter: Atsumi MIYATANI

(Vice director of Office of Global Human Resourse Development)

b) Benesse 進学フェア（平成 27 年 6 月 20 日、於愛知県体育館）

タイトル「愛知県立大学の『iCoToBa』で留学しよう！」

発表者：杉原周治（グローバル人材育成推進室委員、ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻）

c) 夢ナビライブ 2015 （平成 27 年 7 月 18 日、於ポートメッセなごや）

タイトル「グローバル社会に必要な外国語能力とは？」

発表者：宮谷敦美（グローバル人材育成推進室副室長、国際関係学科）

d) 2015 年度西日本第 1 ブロック共同シンポジウム

「地域に根ざしたグローバル人材とは Community-Rooted Global Human Resources」

（平成 27 年 11 月 14 日　於愛知大学）

個別発表　タイトル「地域の課題解決も目指すグローバル人材」

発表者：宮谷敦美（グローバル人材育成推進室副室長、国際関係学科）

e) Go Global Japan Expo 2015 （平成 27 年 12 月 20 日　於明治大学）

プレゼンテーションタイトル：

世界が注目する「ものづくり愛知」だからこそ学べる「グローバル人材プログラム」

発表者：宮谷敦美（グローバル人材育成推進室副室長、国際関係学科）

③マスコミによる情報発信

a)　日経新聞　2015 年 4 月 22 日（水）「中小の海外発信支援」

b)　中日新聞　2015 年 9 月 9 日（水）「企業の HP 記事作成 海外に販路学生一役」

c)　中日新聞　2015 年 9 月 29 日（火）「岡崎プロジェクト　日中学生マナー架け橋」

d)　中日新聞　2015 年 12 月 1 日（火）「ドイツ語俳句コンテスト部門 1 位愛知県大生」

④iCoToBa 訪問者

［表 13-2　平成 27 年度 iCoToBa 訪問者一覧］

月日	所属・氏名	担当
6 月 4 日	名古屋市立大学人文社会学部教授日木満氏 外国人教師 Louise Haynes 氏	宮谷敦美 高橋慶治
7 月 10 日	関西学院大学グローバル人材育成推進事務室 課長補佐　菱岡洋志氏、酒井仁子氏 神戸大学学務部学務課専門職員森慎二氏、濵口修氏 グローバル教育推進室コーディネータ　清水秀夫氏 事務補佐員福中香澄氏 福井大学学務室国際課課長補佐　西弥生氏、 学務部国際課・専門職員（国際教育）　郡妙子氏 鳥取大学学生部教育支援課・課長　宮田育征氏 研究・国際協力部国際交流課課長　安部春雄氏 愛知大学名古屋教務課・課長　高橋正樹氏 グローバル人材育成推進事業担当係長神野恵子氏 名古屋教務課・グローバル人材育成推進事業担当 七原一樹氏 京都産業大学学長室課長　物部剛氏 学長室課長補佐山内尚子氏 立命館大学情報理工学部事務室・専任職員　高儀智和氏 同志社大学国際連携推進機構国際化推進室 事務室事務長岡村洋子氏 係員堀田直英氏、市野亜美氏	夏目美和 岡崎まどか
9 月 8 日	愛知県副知事　堀井奈津子氏 副知事秘書、学事振興課長、学事振興課職員	宮谷敦美 夏目美和
10 月 6 日	愛知県立芸術大学音楽学部教養教育教授水野留規氏、 同准教授　井上彩氏	宮谷敦美 水野淑子
11 月 18 日	京都府議会文化・教育常任委員会委員長他 12 名、 職員 2 名	岩井美樹
1 月 22 日	愛知県議会議員　塚本久氏	宮谷敦美

4. 平成 27 年度の評価

①効果が表れていること

本年度も、多様な方法による積極的な情報発信を行なった。特に、本事業に関連する学生の取り組みを積極的に新聞や本学 Web サイトに掲載した。

②改善すべきこと

本学の教職員や学生による成果に関する情報を迅速に収集することができておらず、情報開示までにタイムラグが発生してしまう点については、解決を図る必要がある。

5. 平成 28 年度に向けての方策

事業運営費縮小傾向の中で、効果的な広報発信については検討を有する。本学 Web サイトのほか、新聞などのマスコミで本事業での取り組みを取り上げてもらえるよう働きかけるようにする。

14. グローバルキャンパスへの取り組み

1. 概要

本学では iCoToBa（多言語学習センター）をグローバル人材育成推進のプラットフォームと位置づけており、語学の授業や留学アドバイジング、「グローバル」と「異文化」をキーワードとした学生の主体的な活動をサポートする場として機能させている。

本事業の目標である「外国語学部生の 60％以上が単位認定を伴う留学を経験する」を達成すべく、これまで国際交流室を中心として学術交流協定大学の拡充に努めてきた。既存の交換、派遣留学にとどまらず、学生の海外留学に対するモチベーションを高めるために、①外国語学部の全言語圏におけるショートプログラムの開始、②アジア・パシフィック域内の学生交流大学コンソーシアムである UMAP（University Mobility in Asia and Pacific）を利用した交換留学の開始準備、③世界中の大学と学生交流ネットワークをもつ SAF（スタディ・アブロード・ファウンデーション）への加入検討など、学生を派遣する仕組みを検討、実施してきた。また、学内の語学教育環境の充実や交換留学生が増加したことに伴い、海外留学に挑む本学学生が増加し、グローバルキャンパスの展開が進んでいる。

また、グローバルキャンパスを展開するために、国際交流関係業務の運営や、国際的教育研究活動支援を円滑に行える事務職員の育成に取り組んできた。国際交流室での業務である大学間学術協定締結上の語学力と折衝能力、APAIE や NAFSA 等海外の大学フェアにおける外国語でのプレゼンテーション能力は必須である。国際交流担当の職員のみならず、留学生や海外からの来客に対応、海外の大学と連携したプロジェクトの立ち上げなど、大学事務職員の英語運用能力の強化は喫緊の課題となっており、全ての事務職員がグローバルな視点を持ち、外国語によるコミュニケーション能力及び国際感覚の養成を図ることが求められている。そのため、①職員の海外研修、②職員の語学力向上の取り組み、を展開してきた。

2. 平成 27 年度の目標

①海外留学に対するモチベーションを高める仕組みの検討および、海外留学への挑戦をサポートする体制を中心に、グローバルキャンパス化に対する学内体制を充実させる。

②事務職員の英語能力の強化をスタッフディベロップメントの課題の一つとして位置付け、TOEIC 目標スコアを 800 点以上に設定する。

③若手事務職員の国際的な対応力強化を実践的に図るための海外研修を実施する。海外の大学フェア等に参加し、本学の PR スキルを身に付ける。また現地での交流を通して他大学の広報活動・留学制度等を学ぶ。

④英語版 HP や英語版大学案内作成により、海外への情報発信を充実させる。

3. 平成 27 年度の実績・評価

① グローバル化に対応する学内体制の充実

学内におけるグローバル化への対応として、昨年度は主に屋外・屋内の学内誘導サインや案内板を日本語と英語の両方で表記するなどハード面を重点的に整備し、施設利用者の利便性を向上させた。今年度はグローバル人材育成事業を支える基盤の強化に向けて、ソフト面の充実を図った。学内文書の英文化については少しずつ進められており、今年度は、研究活動不正行為および研究費の不正使用防止、学術研究の信頼性と公正性を確保するため、英語版「愛知県公立大学法人研究倫理綱領」を作成し、外国人教員に広く周知した。

国際交流室では、これまで協定大学が少なかったアジア圏に学生を派遣するために、平成 28 年度から UMAP を利用した交換留学の準備を進めてきた。また、SAF の加入を検討するために、SAF が実施するネットワーク大学視察海外研修に参加した。SAF のネットワークを利用することにより、留学の選択肢の拡充、留学に関するカウンセリングの充実や留学中のきめ細やかな現地サポートなど、総合的支援が期待できる。

日本文化学部では、平成 27 年度、愛知県の特徴ある地域を訪れ、自然・文化・歴史を体感し、それを新しい視点からまとめ、発信していくことを目指し「留学生的アイチガイド（観光パンフレット）」作成を進めてきた。日本人学生と外国人留学生とが地域情報を収集し、集約した内容の翻訳に取り組んだ。担当職員は留学生のサポートを含むガイド作成の一翼を担い、本学の教育活動に対する理解をより深めた。国際交流や外国語学部担当職員以外の事務職員が、こういった取り組みに参画することで、グローバルキャンパスの展開に対する意識を高めている。

② 職員の語学力向上の取り組み

平成 25 年度に開始した、英語力向上制度（大学職員の語学力向上の取り組み）は、今年度で 3 回目の実施となった。本法人において各年度 5 名（上限 5 名）が 1 月の TOEIC 受験を目指して、勤務時間内に TOEIC 対策講座（iCoToBa 開講授業）を受講している。今年度も引き続き、職員全員に TOEIC 受験を奨励するとともに、英語学習支援 e-Learning「ALC Net Academy 2」の利用促進が通知され、希望者にはアカウントが配付された。

また、国際担当職員を対象とした英語研修（JAFSA・ブリティッシュカウンシル共催）に参加し、英語を使用した業務のスキルアップを図った。研修を通して、国際交流実務に関わる実践的な知識や経験を得た。

③ 職員海外研修

事務職員に海外の大学、国際会議、国際シンポジウム等における実地研修の機会を与えることにより、大学全体のグローバル化とその意識改革を推進している。平成 27 年度は以下の研修を実施した。参加した職員は、異文化への理解を深めるとともに、海外の大学ではどのよ

うにグローバル化を進めているか、またその知識や手法、情報を習得した。以下の表 14-1 は平成 27 年度法人職員海外研修の状況である。

［表 14-1　平成 27 年度職員海外研修実施一覧］

研修内容	目的	日程	訪問国	人数
NAFSA Conference 2015	既存の協定大学との関係強化、情報交換。新規協定大学の拡充。	平成 27 年 5 月 26 日～平成 27 年 5 月 29 日	アメリカ	1 名
ロボカップ世界大会同行	異文化理解を深める。広報活動および研究室の後方支援。本学の海外における活動を理解する。	平成 27 年 7 月 18 日～平成 27 年 7 月 24 日	中国	2 名
名古屋大学事務職員海外研修同行	モンゴルの大学における国際交流事業の取組（主に留学制度、ジョイントディグリー、奨学金制度）を学ぶ。	平成 27 年 9 月 12 日～平成 27 年 9 月 17 日	モンゴル	1 名
名古屋大学事務職員海外研修同行	異文化理解を深める。広報活動。タイの大学の状況や、タイにおける日本の大学や学術振興会等組織の動向を知る。	平成 27 年 11 月 3 日～平成 27 年 11 月 8 日	タイ	1 名
APAIE Conference 2016	既存の協定大学との関係強化、情報交換。新規協定大学の拡充。	平成 28 年 3 月 1 日～平成 28 年 3 月 4 日	オーストラリア	2 名

④ 海外への情報発信の工夫

平成 27 年度より、英語版大学案内を作成し、英語版大学ホームページには採用情報をリンクさせた。人事選考結果通知、採用手続に関する書類やその説明文書についても英語で通知し、外国人教員にも十分理解できるように整えた。また、国際交流室の英語版ホームページ開設に向けて作業を進めている。本学の国際交流の状況を英語で発信し、①協定大学の学生が本学の情報を収集し、②日本の協定大学を探している海外大学への情報発信に役立てたい。

4. 平成 28 年度に向けての方策

引き続きグローバル関連や iCoToBa の最新イベント情報、国際交流室で行われる留学関連の情報を英語で発信し、活発に実施されている学内行事を効果的に広く公開していくことに努める。

15. 資料

15－1. グローバル人材育成推進室運営体制

［グローバル人材育成推進室］

室長	吉池　孝一　（外国語学部長、中国学科）
副室長	宮谷　敦美　（国際関係学科）
副室長	川尻　文彦　（中国学科）
室員	久田　由佳子　（英米学科）
室員	原　　潮巳　（ヨーロッパ学科フランス語圏専攻）
室員	江澤　照美　（ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻）
室員	杉原　周治　（ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻）
室員	寺澤　君江　（iCoToBa）
室員	鎌倉　やよい　（副学長）
室員	桑村　昭　（国際交流室）
室員	夏目　美和　（学務課）
事務職員	水野　淑子
	岡崎　まどか　（2015 年 10 月まで）
	岩井　美樹　（2015 年 10 月から）

［iCoToBa］

専任講師	英語担当	Fern Sakamoto
専任講師	英語担当	Brett Hack
専任講師	フランス語担当	Morgan Dalin
准教授	スペイン語担当	Sergio Neri
准教授	ドイツ語担当	Morten Hunke
専任講師	中国語担当	顧　令儀
専任講師	語学学習アドバイザー	寺澤　君江
非常勤講師	留学アドバイザー	大山　守雄
事務職員	iCoToBa 受付	岡崎　まどか　（2015 年 10 月まで）
		岩井　美樹　（2015 年 10 月から）

15－2. グローバル人材育成推進室会議開催一覧

［表 15-1　平成 27 年度グローバル人材育成推進室会議開催一覧］

回	開催日	主たる審議・報告事項
第 1 回	4 月 22 日	グローバル人材育成推進室業務計画 H27 年度前期グローバル人材プログラム指定科目
第 2 回	5 月 20 日	グローバルミニオープンキャンパス グローバル人材プログラム科目成績認定
第 3 回 (メール会議)	5 月 21 日 ～26 日	ドイツデー グローバル講演会(Via Lactea)
第 4 回	6 月 24 日	中国学科翻訳・通訳コース学生のグローバル人材科目 グローバル人材プログラムの外国語基準
第 5 回 (メール会議)	6 月 25 日 ～29 日	H27 年度イマージョンプログラム日程 西日本第 1 ブロック共同シンポジウム進捗
第 6 回	7 月 30 日	語学検定受験状況と受検申込案内文案 後期グローバル人材プログラム対応科目 グローバル人材プログラム FAQ 改訂
第 7 回	9 月 2 日	iCoToBa 非常勤講師委嘱 グローバル人材プログラム修了証・受講証明書発行スケジュール、後期グローバル人材プログラムガイダンス 平成 27 年度外部評価委員会
第 8 回	10 月 22 日	グローバル人材プログラム科目成績認定、受講証明書発行、 西日本第 1 ブロック共同シンポジウム参加
第 9 回	12 月 17 日	グローバル人材プログラム修了見込証明書発行 学生便覧正誤表、グローバル修了要件について 検定試験結果に関する情報収集
第 10 回	12 月 24 日	2016 学生便覧別表 5 推薦入試合格者入学前オリエンテーション イタリアデー
第 11 回	1 月 20 日	グローバル人材プログラム科目成績認定について TOEIC-IP 結果の情報公開について
第 12 回	3 月 2 日	グローバル人材プログラム修了証発行
第 13 回	3 月 18 日	H28 年度前期開講グローバル人材プログラム指定科目、 グローバル人材プログラム関連ガイダンス、イマージョンプログラムの実施

15－3. iCoToBa 委員会

［iCoToBa 委員会］

委員長	高橋 慶治 （国際関係学科）
委員	森田 久司 （英米学科）
委員	佐藤 久美子 （ヨーロッパ学科フランス語圏専攻）
委員	糸魚川 美樹 （ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻）
委員	四ツ谷 亮子 （ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻）
委員	中西 千香 （中国学科）
委員	宮谷 敦美 （グローバル人材育成推進室副室長）
委員	寺澤 君江 （iCoToBa 学習アドバイザー）
担当事務職員	岡崎 まどか(グローバル人材育成推進室、2015 年 10 月まで)
	岩井 美樹 （グローバル人材育成推進室、2015 年 10 月から）
	水野 淑子

15－4. iCoToBa 委員会開催一覧

［表 15-2 平成 27 年度 iCoToBa 委員会開催一覧］

回	開催日	主要な審議事項
第 1 回	4 月 24 日	平成 27 年度 iCoToBa 委員会体制、iCoToBa 定期刊行物の購入、ロゼッタストーン ID 配布
第 2 回	5 月 20 日	平成 27 年度後期 iCoToBa 時間割 iCoToBa サマープログラム準備のお願い
第 3 回	6 月 25 日	iCoToBa サマープログラム iCoToBa 後期授業について
第 4 回	7 月 16 日	夏季休業中 iCoToBa 開室時間 全学オープンキャンパス iCoToBa スケジュール
第 5 回	9 月 30 日	平成 27 年度後期ロゼッタストーン ID 配布 iCoToBa 年報
第 6 回	10 月 29 日	平成 27 年度 iCoToBa 年報
第 7 回 (メール会議)	11 月 18 日 ～20 日	フランコフォニー祭
第 8 回	12 月 24 日	iCoToBa 教材作成、スプリングプログラム、 春季休業中 iCoToBa 開室時間

第 9 回	1 月 21 日	平成 27 年度前期 iCoToBa 授業の他学部生聴講
第 10 回	2 月 24 日	2016 年度グローバル予算 iCoToBa 関係、平成 28 年度新年度ガイダンスについて、平成 28 年度前期 iCoToBa 開講科目

総括と次年度に向けて

吉池　孝一

本事業の助成金継続期間は 5 年（平成 24～28 年）である。5 年という年月の活用はそれほど容易ではない。4 年目となる本年度の平成 27 年 4 月からは、着地点を見据えながら事業を進めた。様々な検討をしたわけであるが、主なものは下記の 2 点となる。

1. グローバル人材育成プログラムの正規科目化

文部科学省の補助終了後の平成 29 年度の 2 年生から、グローバル人材育成プログラムを履修することができるようにするため、前年度となる平成 28 年度のカリキュラムの改訂を行った。内容は次の通りである。英米学科、ヨーロッパ学科フランス語圏専攻、ヨーロッパ学科スペイン語圏専攻、ヨーロッパ学科ドイツ語圏専攻、中国学科、国際関係学科の 6 学科専攻全てのカリキュラムの中にグローバル人材育成に係わる新たな科目を立てるというものである。各学科専攻のカリキュラム表の中には「学部共通各論」というものがある。この学部共通各論の中に新たに「共通各論（グローバル:日本紹介)」「共通各論（グローバル:比較文化セミナー）」「共通各論（グローバル:リサーチ発信プロジェクト)」という科目を立てることとした。外国語学部としては 18 科目増えたというわけである。これによって、グローバル人材育成プログラム中の iCoToBa 科目（正課の単位にならない）を正課の科目として単位化し、文部科学省の補助期間終了後も、同事業を発展させる形でグローバル人材の育成を継続することを明確にした。それとともに、グローバル人材育成に係わるフランス語圏専攻およびスペイン語圏専攻の既存の科目名の一部を平成 28 年度より変更することとした。

2. 「新グローバル人材育成事業」立ち上げの検討

文部科学省による補助期間終了後の平成 29 年度 4 月以降は、全学に資する内容の新たな事業として、グローバル人材の育成を推進する事業を行うべく検討を開始した。

平成 28 年度は、文部科学省の補助によるグローバル人材育成事業の目標に取り組みつつ、平成 29 年度から行う予定の大学独自の新グローバル人材育成事業の内容を、具体的に検討し、確定するという作業の 1 年となろう。

平成 27 年度
愛知県立大学経済社会の発展を牽引する
グローバル人材育成支援
外部評価・実績報告書

平成 28 年 7 月 31 日発行

発行：愛知県立大学グローバル人材育成推進室
〒480−1198　愛知県長久手市茨ケ廻間 1522 番地 3　E 棟 2 階
℡：0561－76－8833
E-mail: global@for.aichi-pu.ac.jp
http://www.for.aichi-pu.ac.jp/global/